ガーリー・エアフォース　翠緑の亡霊

幻在

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ザイ。突如現れた、敵性飛行物体。それらの出現によって、人類は、滅亡の危機にさらされていた。

異常な機動力、ミサイルを通用させなくさせ、五感すらも狂わせる電波。それらをもって、奴らは人類を蹂躙していった。

だが、人類はそんな圧倒的強さを誇る敵に対して、とある対抗手段を作り出していた。『ドーター』とそれを駆る『アニマ』。

ザイの技術を流用されて作られた機体と、それに乗る少女たちをもって、世界は、ザイに対抗しようとしていた。

その渦中の中、日本の自衛隊にて、泉守恭平は、一機のドーターと、一人のアニマと邂逅する。

これは、『ブレイカー』の名を持つ男と、人類救済を目的とする人外の少女の、大空を駆け抜ける、天空戦記である。

目次

イーグルブレイカー ―――― 1
シー・ネーム・イズ・ファントム 20
エアリアル・ファイト ―――― 50
ミサワ・ランデブー ―――― 77
翠緑の鋼鉄の亡霊（エメラルド・フルメタル・ゴースト） ―――― 89
ファントム・イズ・マイバディ ―――― 118
チャンス・ミーティング ―――― 132
ザ・アザー・アニマ ―――― 161
リコーナセンス・イン・フォース 185
ディターミネイション ―――― 214
プロテクト・エヴリデイ ―――― 240

イーグルブレイカー

空は無限に広がっている。
それが彼『泉守恭平（いずみもりきょうへい）』の祖父の口癖だった。
かつて陸軍であり、飛行士（パイロット）でもあった彼の祖父は、常に、空を飛ぶ時に見る景色は格別だと言い、その言葉に魅せられた恭平は、父親と同じく自衛隊員を目指すようになり、そして、長年に渡る研鑽の結果、見事、航空自衛隊に入隊し、そして、一度三沢基地への所属となり、紆余曲折の元、頑張っていた――――

あの日、ザイが現れてからは――――

『――――こちらマリオ01より管制室、情報の提供を請う』
眼下に広く青い海、上には無限に広がる空の下、泉守恭平三等空尉は、隊長機が送る無線を横流しに聞いていた。

返事はすぐに帰ってきた。
『管制よりマリオ０１、敵編隊一、距離３０、高度――――――』
「・・・・」
とりあえず聞き流しながら、恭平はキャノピーに移る真っ青な空を見上げた。
『奴ら』が現れてから、人類は負け続けている。
だというのに、空は残酷なまでに青い。
まるで、地上の事なんか知らない、とでもいうかのように。
（いまさらか）
そう結論付けて、恭平は前を向いた。
それと同時に、隊長機から指示が入る。
『マリオ０１より各機、交戦準備』
「マリオ０２了解」
『マリオ０３了解』
自分の後に続く無線に応答する者たちの声を聞き流しつつ、恭平は自身が乗る戦闘機の翼を見た。
彼が乗るのは『Ｆ―１５Ｊ』、通称『イーグル』
航空自衛隊において、それに乗って空を駆る者たちの事を、一言に言って、『イーグル

ドライバー』と呼ばれている。
「持ってくれよ・・・・」
　そんな呟きの中で、ふと無線から隊長機からの声が響いた。
『マリオ０１よりマリオ０２、応答せよ』
「ん？こちらマリオ０２、何か用で？」
『・・・・壊すなよ』
　なんとも、我らが隊長ながら念を押してくれる。
　しかし、それは無理な相談というものだ。
「了解。できる限り努力します」
『はあ・・・』
　溜息が返ってきた。何故だ。
　そう思っている間に、正面にきらめく何かを見つけた。
　来た。奴らだ。
『マリオ、これより交戦に入る』
　隊長機の言葉と共に、これから始まる戦闘に身を震わせる。

　そうして始まる、奴らとの戦闘。

２０１５年六月――――この日、世界は奴らに蹂躙される事になる。

『マリオ０９、ダウンッ!!』
『畜生!またかよ!!』
『ブレイク!ブレイク!』
無線から、九つ、いや、七つの悲鳴が聞こえてくる。
その中で、恭平だけは悲鳴をあげず、ミサイルを放ち、しかし外れても機関砲で叩いていく。
ガラス細工のような機体は、こちらの常識を軽々と超える機動力でこちらを圧倒してくる。それだけじゃあない。数が多い。少なくともこちらの倍の数はいる。
『マリオ０３、ダウン』
『なんだよこいつら・・・!?』
『く、隊長!』
無線から轟く悲鳴。その全てを無視して、恭平は、目まぐるしくかわる天地と景色を睨みつけて、目の前の敵機を追い、後ろの敵機を振り切ろうとする。
そこで、ミサイルアラートが鳴り響く。

が――――

「あらよっと」

真正面から迫ってきた敵機の機関砲を掻い潜り、そして、機体を反転させてその下をぎりぎりの所で潜り抜けて、追ってきたミサイルをぶつけた。

「敵機撃墜（スプラッシュ・スリー）――――」

それでも戦いは終わらない。

まだ、敵はたくさんいるのだ。

「ＦＯＸ２」

翼下のミサイルの一本がリリースされる。それが、目の前の敵機に向かって突き進み、しかしミサイルは回避行動に出ている敵機に接近した直後、突然、目標を見失ったかのように勢いを緩め、空中で自爆した。

「くそ！やはりミサイルは効かねえか！！」

吐き捨て、マニュアルに切り替えて、ドッグファイトに切り替えて飛び回る。

気付けば、味方は自分を含めて、残り数機。

敵の数は、たいして減ってはいない。

『撤退だ！撤退するぞ！』

隊長機から、そのような叫び声が無線から放たれた。それに従うように、他の味方機

が戦線を離脱していく。
『マリオ０２！お前も――――』
「隊長方はそのまま離脱してください。俺はしんがりを務めます」
『な!?無茶だ！いくらお前の機動力があったとしても、数が――――』
「どうせこのまま追撃されれば終わりだ！それに味方のほとんどが落とされた。俺一人失った所で対した事にはなりませんよ」
ミサイルアラート。背中から迫るミサイルから必死に逃げて、他の敵機の目の前に躍り出て、そしてすれ違いざまに敵機にそのミサイルを叩きつける。
無線から、隊長の悲痛そうな叫び声が聞こえた。だが、もはやそれを気にしている余裕はない。
相手は、自分に迫る技量で戦ってくる。
ならば、自分はそれ以上の機動で奴らを落として見せよう。
後ろにつけさせない。喰らいついたなら逃がすな。敵は確実に落とせ。
無茶な機動。あまりにも乱暴な操縦。しかし、それでも奴らを追い詰めている。
ミサイルを撃ち尽くす。無駄だと分かっていても、下手な鉄砲も数撃ちゃ当たるという事で撃って、それで落とせたのはたった二機。
しかし機関砲がその銃口から火を噴けば、敵機は確実な数を減らしていく。

どんどん減っていく残弾数のメーター。だが、この際、気にしていられない。
この際、全てを使って敵を出来る限り落とす。
後ろにつかれる。
敵機がその標準を、恭平のイーグルに定める。
しかし、いざミサイルを放とうとした所で、唐突に目の前の機体の姿が掻き消えた。
いきなりの敵機の消失に、その機体はそのイーグルを探した。
しかし、見つける前に、背後から降り注いだ弾丸の雨を喰らい、くしくも落ちていく。
その弾丸の雨を降らせたのは、いつの間にかそのガラス細工の機体の背後を取っていた恭平のイーグルだった。
「残りは――――」
そう、呟きかけた時――――イーグルが悲鳴を上げた。
「やべっ――――」
気付いた時には、イーグルの機体に亀裂が入っていた。
そして、背後からくるミサイルアラート。
ブレイクをしようとする。しかし、それ以前に機体の事が気になって上手くパフォーマンスできない。
フレア、チャフはもう間に合わない。逃げる事も叶わない。

もう一度、全力で機動すれば、間違いなくこの機体は壊れる――――

「――――悪い、皆」

ひきつった笑みを浮かべて、恭平は、呟いた。

「俺、死んだ」

次の瞬間、敵のミサイルが、恭平のイーグルの翼を叩いた。

片翼を失った大鷲は、ぐるぐると回転しながら落ちていき、やがて、海に墜落した。

『泉守ィィイ――――――――ッ!!!!』

無線から、隊長の叫び声が聞こえた気がした――――。

『ザイ』――――

突如、中央アジアに出現した、謎の飛翔体。

それらは現代の軍用機を軽々と凌駕する機動『高機動航空技術(HIMAT)』とミサイルのレーダーどころか人間の五感すら狂わせる未知の電波『電子・感覚対抗手段(EPCM)』によって、瞬く間に中国を占領していった。

それらの機動は、人間が耐えられる9Gという度合いを軽々と超え、重力や常識すらも無視しており、さらにはミサイルのレーダーなどを狂わせて暴発、さらには人間の五感を狂わせるような電波を発してマニュアル射撃もままならないようにしている。

それらの要因が災いして、世界中の空軍は悉く敗北しているのだ。当然それは自衛隊も同じだ。

その正確な目的は不明。ただ分かっているのは、奴らは人間を襲うという事だけだった。

泉守恭平――――

祖父は海軍所属のパイロットで、父親は航空自衛隊二等空佐。母親も情報管制などを担当する自衛官で妹でさえも航空学校の生徒。

ようは、軍人の家系だ。

そんな家の第一子として生まれ、そして祖父の言葉に魅了されて父親同様に自衛官となった。

その度重なる努力のおかげで航空学校を通して、類まれなる才を示して、三沢の第三航空団に所属する事に成功した――――が、問題なのは、彼がいままでやっていたのはシミュレーターであって実機を操作した事はなかったという事。そして、彼の持つ操

縦技術が常識を超えており、彼の体がその非常識に耐えられる体を持っていたという事。

そのせいで、彼は、F―15―――イーグルというイーグルを、そのとてつもない操縦能力で使い物にならなくさせていったのだ。

その、常識を超えた操縦技術と恐ろしいまでの戦闘技術を持ち合わせていた彼ではあったが、危うく航空団を首にさせられそうになった事がある。

そのおかげでついたあだ名が『大鷲殺し（イーグルブレイカー）』。

全くもって不名誉である。

「その結果が、三ヶ月の昏睡なんだよなぁ・・・・」

緑の迷彩柄のジャケットを着込んで、そうひとりごちる恭平。

すっかり衰えた筋力を気にしつつ、恭平は自室を出た。

ザイが現れてすでに半年。

三ヶ月前、中国の援護という事で出撃した三沢の航空隊のほとんどを投入して敗北したあの戦い。
その戦いにおいて、恭平は自らの操縦によって悲鳴をあげたイーグルを撃ち落とされ海の上に墜落。
落下の際に意識を失って、そして気付いたらベッドの上。その上でカレンダーを見て驚愕したのが一週間前。
相当な筋力の衰えによってリハビリに時間を取られ、そうしてやっと出た退院許可が昨日。
しかし、その日に顔を出してみた三沢基地は、案外それほど変わってはいなかった。
あの一戦以降、あまりザイのよる襲撃を受けなかったようだが、それでも一度だけ二、三機の襲撃を受ける事があった。
その結果、かなりの数の仲間が減ったとも言っていた。
ザイとの最前線ではないのが唯一の救いだろうか・・・
（なんて・・・楽観的になっている場合じゃねえんだよな）
食堂の一席に座って、恭平は手をあわせて「いただきます」と呟いて、Ｂセットの揚げ物を口に放り投げる。
「起きて早々、随分とのうのうとしているな、泉守」

「ん?ああ、狩野か。どうした?」
そんな恭平の向かいの席に、彼の同期である『狩野祐司(かのうゆうじ)』がAセットをもって座った。
「聞いているか。今日、なんでも新戦力がここ三沢に投入されるらしい」
「ああ、昨日隊長から聞いたよ。なんでも、ザイの部品を流用したみたいだな」
「お前の救出次いでに拾ってきたもので作ったらしい・・・忌々しい」
祐司の箸を持つ手に力が入る。
その眼光も、これまでにないほど鋭くなっている。
「そうかっかすんなよ。そいつでアイツら落とせるなら万々歳じゃねえか」
「貴様はどこまで能天気なんだ。奴らのコアとやらを利用してつくったものだぞ。信用どころか信頼する要素はどこにもない」
「でも技本の奴らが試行錯誤を重ねた結果で出来上がったもんだろ?仲良しこよしとはいかんでも、協力する価値はあるぞ」
「貴様は・・・まあいい」
祐司はもくもくと自分の食事を食べていく。
「どちらにしろ・・・ザイは皆殺しにする・・・」
「・・・変わったな、お前」
その理由は聞いている。

中国にいる恋人がザイによって殺された。
ただそれだけのシンプルな理由だ。
しかし、そんなシンプルな理由だからこそ、祐司はザイをこれまでにないほど憎んでいるのだ。
そして、周りも。いや、彼らの場合は、恐怖という感情の方が正しいだろう。
ザイという、未知の戦力に、その技術に、そして、それによって作られた、新兵器に。
ならば恭平はどうかといわれると、そうでもない。
自分の力が、すくなからず通用する。
その事実があるだけで、彼のザイに対する恐怖心はそれほどなかった。
（まあ対話は不可能だろうけどな）
なんて結論付けて、恭平は最後の揚げ物を口の中に入れた。
「どっちにしろ、俺には乗る機体がないんだ」
「確か再配備まで数日かかると言っていたな」
「ま、それまでに衰えた筋力を取り戻していくさ。それじゃあ俺はこれで」
盆と食器を返して、恭平は食堂を後にする。

ザイの出現。それによって蹂躙される中国。

現代の航空技術では太刀打ちできない敵の力は、まさしく化け物以外の何物でもない。

なら、それに対抗できる技術を持っている自分は一体――？

廊下を歩きながら、そう考えていると、ふと、放送が入った。

『――――泉守一等空尉、ただちに第三打ち合わせ室にきてください。繰り返します――――』

この間の戦闘で、二尉から一尉に昇格したために呼び方が変わっている。まあ気にすることではない。

だが、このタイミングでこの放送とは、一体何の用だろうか。それに、司令からの呼び出しではなく、どこかの誰かからの呼び出しとは。一体なんの用なのだろうか。

やはり検討がつかない。

とりあえず、行ってみるとしよう。

そうして向かってみた第三打ち合わせ室にて、その人はいた。

丸々と太った体に、丸い縁の眼鏡をかけた男だった。

「お前が、泉守一尉か？」

突然、そう言われたから、少し慌て気味に返事をした。

「え、ええ・・・泉守一等空尉です。それで、貴方は・・・」

「申し遅れた。俺は防衛省技術研究本部、特別技術研究室室長の八代通だ」
「ああ、技本の・・・それで、そんなお偉方がどうして俺のような一兵卒に用があるので？」
　それを聞いた八代通はくわえていた煙草を手に取るなり煙を吐き出した後、語り出した。
「よく言う。泉守恭平、二十三歳。航空学校を首席で卒業。志望理由は空を飛びたいというなんとも子供らしい理由らしいな。非凡なる才を発揮して筆記、実技ともにダントツの成績を修めて期待の新星としてここ三沢基地に配属になった。そして、そこでの初飛行において、自分が乗っていたF―15を操縦しただけで破壊、それを二、三度繰り返した結果、『イーグルブレイカー』などという不名誉極まりないあだなをつけさせられた」
「よくお調べになったことで」
　恭平のこめかみには青筋が浮かんでいる。
「それで、まさかそんな嫌味を言うために俺を呼んだんじゃないでしょうね？」
「当然だ。でなければお前をここに呼んだ意味がないからな。ついて来い」
　八代通に言われるがまま、ついていく恭平。
「お前さん、どうして俺たち人間は奴らに負け続けていると思う？」

そんな中、突然そんな事を言われた。
「えーっと、数が膨大なのと、奴らの常識を超えた機動力。そしてミサイルのセンサーが狂わされる電磁波ってところか？」
「まあ八十点といったところか」
なんとも嫌味な口調で言われた。
「それを正式になんと呼ぶか知っているか？」
「さあ？」
「ＨＩＭＡＴとＥＰＣＭだ」
「ＨＩＭＡＴは分かるが、ＥＰＣＭってなんだ？」
「ＨＩＭＡＴは高機動航空技術の略だな。有人では実現不可能な機動性のことだ。一方のＥＰＣＭは、お前の言うミサイルのセンサーを狂わせる電波の事だ。ただ、これの厄介な所はもう一つあってな。それが人間の五感にも作用しちまうって事だ」
「え？そうなの？」
ふと、八代通が立ち止まった。なんだ、と訝しんでいると、こちらを振り返って若干驚いているような視線を向けていた。
「まさか・・・効かなかったのか？」
「それ以前に、俺、そんなのあったなんて聞いてませんよ。まあ、聞かなかった俺の自業

自得ですが・・・」
「・・・まあいい。それについては後で議論する事にしよう」
　また歩き出す八代通。
「それでだ。奴らの超技術に、なにも手をこまねいていた訳じゃあない」
「技本っていうぐらいだから、何か、新型の兵器の開発に成功したんですか?」
　この半年間で?これは早いと言えるのか?
「その通りだ」
　気付けば、恭平たちは夜の基地の中、この三沢基地にある第四格納庫にやって来ていた。
「既存の戦闘機をＨＩＭＡＴ化して奴らの機動力に対応出来るようにチューニングし、対ＥＰＣＭ性能の付与、専用の自動操縦機構『アニマ』を装備させたのがこの――――」
　中に入れば、そこには、一機の戦闘機が置いてあった。
「『ドーター』だ」
　しかし、真っ先に疑問に思ったのはそのカラーリング。
　全身を緑の塗装で塗り固めたその機体は、他とは違う何かを放っていた。
　そして、色は違えど、その機体の名前を知っていた。
「・・・・ＲＦ―４ＥＪ・・・ファントムⅡ・・・」

「それでだ、泉守一尉」
　その謎の機体、ファントムのボディに触れる八代通は恭平を見てこう言った。
「お前にこいつの管理を頼みたい」
「・・・・は？」
　一瞬、何を言っているのか分からなかった。
「えーっと、それってつまり、俺がこいつを使うって事ですか？」
「ああ、これじゃあ語弊があったな。お前が管理するのはコイツじゃない」
「え？じゃあ何を・・・」
「室長、来ましたよ」
　そこでスタッフの一人から、そのような声があがった。
「やっと来たか。やれやれ・・・紹介しよう、泉守一尉」
　八代通が視線を向けた先、そこには、一人のお嬢様然とした少女が、なんとも上品な歩き方でこちらに歩み寄ってきていた。
　緑色のおかっぱ髪、どこかの令嬢と思わせる整った顔立ちと雰囲気、服装もさることながら、その立ち振る舞いも一つ一つが丁寧だった。
　そして、八代通の隣に立つと、その琥珀色の目でじっと恭平に向けていた。
「ＲＦ―４ＥＪ―ＡＮＭファントムⅡ、その自動操縦装置『アニマ』だ」

「はあ・・・自動操縦装置・・・って・・・」

あまりにも、少女が可憐だったので見惚れていたが、八代通の野太い声によって現実に引き戻され、そして、ここ一番の絶叫をあげた。

「女の子じゃん!?」

後に、二人は同じ機体に乗るパートナーとなるのだが、それはまだ先の話である。

シー・ネーム・イズ・ファントム

恭平は今、非常に憂鬱になっていた。
その理由は、自分の目の前で、上品に食事をする一人の少女にあった。
その少女の名前は『ＲＦ―４ＥＪ―ＡＮＭファントムⅡ』――――通称ファントム。
エメラルドグリーンのおかっぱ髪にどこかの令嬢とまで思えるほど整った顔立ち。
一見、清楚で礼儀正しそうな彼女ではあるが、ふとこちらの視線気付いてこちらを見るなり、
「あら？私の顔になにかついて？」
「いや何も・・・随分と綺麗に食べるんだな」
「一応、ある程度のマナーは弁えているつもりですよ一尉。それともなんですか？兵器なら兵器らしく、もう少し機械的に振る舞えと言うんですか？」
これだ。この口調だ。
嫌味たっぷりな口調と声音、そしてこちらを嘲るような表情が、その清楚なイメージを一発でぶち壊すのだ。
「いやそういう訳では・・・」

「なら、あまりこちらを見ないようにしてください。貴方は自分の食事に集中していればいいのです」
　そう言って、再び食事の手を動かすファントム。
（なんでこんな事に・・・）
　事の発端は、昨夜にまで遡る。

「女の子じゃん!?」
　そんな恭平の叫びが、四格内に響く。
「そうだな」
「いやいやいや、そうだな、じゃないですよ!?なんで女の子!?どうして女の子!?というか自動操縦機構ってプログラムとかそういうのじゃないの!?」
　喚く恭平を他所に、八代通は紫煙を吐き出す。
「お前、ドーターにチューニングする際、何の部品を使っているか分かるか?」
「え・・・」

しばし考えたのち、
「落としたザイの部品・・・・」
「そうだ。ドーターにはそれを組み込んであり、一方のアニマには、そいつのコアを使っている。ようはそういうことだ」
「いや、コアをドーター自体に組み込む事は出来なかったのか・・・？」
うんざりするようにそんな質問をしてみたが、八代通は答えて見せる。
「そういう案もあったが、何せこいつらには感情がある。そんな中で勝手にコイツを起動させられかねない。だから勝手に操縦できないように頭と体を切り離してるって訳だ」
「なんかゾッとするな・・・」
つまり、ドーターを作る、というよりかはドーターを動かす上でアニマは必要不可欠な存在ではあるものの、勝手に動かれてはたまらないという事で、別々に個体を用意したのだろう。
「怖いですか？」
ふと、そこでアニマの少女が口を開いた。
「ん？」
「無理もありません。私はいわば貴方たちの敵であるザイの部品によって作られた存

在・・・しかし貴方たちはそんな私に頼らなければならないのです。皮肉なものですね」
「まあ、そう言われると頷くしかないのだが・・・それよりも、大丈夫なのか？見た目は人間だが、９Ｇ以上の飛行に耐えられるのか？」
「ご心配なく。私の体は素体からして人間とは違うので、対Ｇスーツがなくても問題なく戦闘は可能です」
「そうか・・・」
　余裕たっぷりに答えられるので、なんとも複雑な気分である。
「まあ、戦えるなら良い・・・それで、具体的には何をすればいいんだ？」
「単純な話、こいつと行動をともにしてもらう」
「ようは監視って事か・・・」
「上がうるさくてな。一応、テストは重ねたつもりだが、どうにもまだ信じられないらしい」
「監視なら、俺以外にも適任はいると思うんだが・・・」
「そこは気にするな」
　いや気にするぞ。気にするなという方が難しいぞ。
「とりあえず、任せたぞ」
「お、おう・・・」

そう言い終えるなり、八代通は恭平にファントムを押し付けてどこかに行ってしまった。
「・・・えっと、まずなんて呼べばいいんだ?」
「どうぞお好きに。この際、名前なんてどうでもいいでしょう?」
「いや、意思疎通に必要だろ」
「それもそうですね。ではファントムとお呼びください」
「了解だ。俺は・・・」
「泉守恭平一等空尉。三ヶ月前のザイとの戦闘で、多大なる功績をあげたそうですね。なんでも、対ザイ戦のエキスパートと呼ばれているとか」
「そうなのか?」
「ちまたでは有名ですよ。今、この日本において、貴方が一番多くのザイを撃墜していると聞き及んでいるので」
「へえ・・・・」
しばし、考え込んだ後、
「それ嘘だよな」
「はい。嘘です。よくわかりましたね」
恭平は思った。

コイツはやばい、と。
「ふふ、まさかこの様な嘘をこんなにも容易く見抜かれるとは思ってもみませんでした」
「あの時の戦いで、俺は墜落して三ヶ月も生死の境を彷徨ってたんだぞ。それでなんで対ザイ戦のエキスパートなんて呼ばれなきゃいけねえんだ。俺のあだ名はいつも決まって――――」
『イーグルブレイカー』――――イーグルを何度も壊した事で、そのようなあだ名がついたようですね」
「・・・・よく調べてるな」
すっとファントムを睨む。
「ええ。私が所属する基地の事なんですから、よく知っておかないといけませんからね」
なんとも油断できない笑みを浮かべるファントム。
「とりあえず、これからよろしくお願いします。一尉」
「・・・おう」
なんとも、腹痛が響くような事を任されたと、恭平は今更ながらに思った。

そんなやりとりのあった翌日。
あまりにも歓迎されていない雰囲気の中で紹介されたファントムは、しばし恭平と一緒に行動をともにする事になったのだ。
「厄日だ・・・・」
ふと、横を同じ自衛隊員が通りぬけたが、その時、ファントムに対して鋭い視線が降り注いだ。
それには、恭平も気付く。
「・・・・歓迎されてねーな」
「仕方がありません。怖いんですよ。私という存在が」
「だろうな」
そう言って、恭平はお茶をのむ。
「・・・・追及しないんですね」
「なんだ?追及されたいのか?今更だよ今更。今更そんな事を話したって今の状況が好転する訳じゃねえんだからよ」
「それもそうですか・・・」
そう言って、最後の一口を口に入れ、「ごちそうさま」とつぶやくファントム。
「では、そろそろ行きましょうか」

「たしか初飛行だったな」
「ええ、よければ見ていきますか？」
「というか、俺はお前についていなくちゃならないから、強制だな」
「別に無理しなくてもいいんですよ？」
「お生憎様、暇を潰そうにも肝心の飛行機がぶっ壊れているからな。だから、お前で暇を潰すしかないんだわ」
　おちゃらけて言う恭平を後目に、ファントムは歩き出す。そして恭平はその後ろをついていく。
　その最中、背後から突き刺さるような視線を感じながら。

　いくつもあるモニターの一つに、ファントムの姿が映し出されている。
　そのファントムの髪は、エメラルドグリーンの光を発しており、琥珀色の目も、心なしか発光しているようにも見える。

『三沢タワー、ＢＡＲＢＩＥ０１、レディーフォーディパーチャー』
　無線越しから聞こえてくる少女の声を受け、管制が指示を送る。
『ＢＡＲＢＩＥ０１、ランウェイ２８、クリアードフォーテイクオフ』
『Ｒｏｇｅｒ、ＢＡＲＢＩＥ０１、ランウェイ２８、クリアードフォーテイクオフ』
　指示に従い、ファントムが離陸する。
「なるほど、問題はないな」
「ああ、でなければまともに戦えんだろう。何十回にも及ぶシミュレートの結果だ」
　隣で八代通が紫煙を吐きながらそう呟いた。
「これでトラブルさえ起きなければ何も問題はないわけなんですよね」
「ああ、そうだ」
「そんなわけです、八代通室長、ちょいと奴について話してくれませんかね」
　好奇心をたっぷり含んだ視線を八代通に向けると、彼は面倒くさそうに紫煙を吐いて語りだす。
「何が聞きたい？」
「単純な話、アイツの他にもドーターはあるのか、どんな操縦機構使ってんのか、何故俺を監視役に指名したのか。わかる範囲で全部吐き出してもらいますよ」
「ハア・・・順番に言っておこう。まず、アイツ以外のドーターだが、いる。今はロシア

に一機いるだけだが、これからどんどん増えていくだろうな」
「へえ、あの共産主義野郎どもの・・・」
「ザイに接触する機会が多いからな、研究も進んでたんだろう。でなけりゃ俺が露助風情に負けるものか」
「アハハ・・・」
　苦笑するしかない。
「次に操縦機構だが、あのパネルみたいなやつだが、あれはＮＦＩ――神経融合インターフェースと言って、ようは、手足を動かす感覚で機体を動かせるようになるっていう寸法だ」
「なるほど、だから操縦桿がなくても問題なく動かせるのか・・・あれ?それって他のアニマが使った場合でも大丈夫なのか?」
「無理だな。アニマにはザイのコアから発される生体電流と特殊な波が常に体内に向かって放出されていて、それが僅かだけでも体外に放出されている。その周波数に合わせて機体をチューニングする為に、他のアニマにはその機体は使えないんだ」
「あー、つまり、鍵と錠の関係って事か」
「まあそうだな。それで、何故お前をアイツの監視役に任命したかだが――――一言で言って保険だ」

「保険？」
「ああ、アイツが暴走した時の為の、な・・・・・」
「・・・・・」
うすうす勘付いていた。
だって、奴らはザイの部品で作られ、なおかつそのコアを流用し、そしてザイと同じ機動が出来る。
そして、恭平は、そんなザイの機動に対抗できる操縦技術を持つ唯一の人間――――
「つまり、アイツが暴走した時は、俺が落とすという事だな」
「そうだ」
紫煙を吐いて、肯定する八代通。
モニターの向こうでは、ファントムが試験の四分の三までおわらせてしまっていた。
「俺はいらんと言ったんだがな。どうにも上層部はそんな得体のしれんものを野放しにできるかと言う意見が多くてな。それで、元々、あのファントムがあったここ三沢にある人員で適任を探していたら、お前さんがヒットした訳だ」
「・・・・・」
確かに、奴ら相手に大破覚悟で戦えば、白兵戦なら確実に勝てる。
しかし、それでも時間が足りない。

奴らを時間内に倒せる可能性が、圧倒的に足りない。
「なるべく急ピッチでお前の機体を呼び寄せている所だが、それでも三日だ。それまでにザイどもがこなければいいんだがな」
「・・・・」
八代通のそんな懸念を聞きながら、恭平は、意気揚々と戻ってくるエメラルドグリーンのファントムを見つめた――――

「お疲れさん」
降りてきたファントムに対してそう呼びかける。
「あら、一尉、わざわざお出迎えなんてご苦労な事で」
「一応お前に付き添えと言われてるんでな」
「そうですか」
「そういう所で悪いが、ファントム、これから検査に行くぞ」
恭平の後ろから八代通がそう言ってくる。
「分かりました、お父様」

「一尉、今日はもう良い。戻って休め」
「了解、八代通室長殿」
軽い敬礼をしたのち、八代通とファントムは、そろってどこかに行ってしまう。
「・・・・・」
「しっかし、いつ見てもふざけたカラーリングだねぇこりゃあ」
背後から、なんとも快活な女の声が聞こえた。
無理むけば、作業着のジッパーを半開きにして、その下にあるシャツを露わにしている焼け肌の女性が目に入った。
整備士の『古田杏(ふるたあん)』だ。沖縄からここに転属してきた女性である。
「八代通のタヌキジジイ、こんなじゃじゃ馬用意しやがって」
その言葉とは裏腹に、彼女の顔は嬉しそうだった。
「整備は大丈夫か?」
「ん?ああ、お前のように毎度毎度壊れて帰ってくるわけじゃないからね。問題ないよ。ほら、さっさと格納庫に運んだ運んだ!」
他の整備士たちを叱咤しつつ、彼女は恭平の元へやってくる。
「それで、アンタ、あの子の事どう思うよ?」
「腹黒い」

「ずいぶんとざっくりとしてるねぇ。まあアタシも同意見だけど」
作業服の上からでは分かりにくいが、実は彼女、結構グラマラスな体つきをしている。
だが恭平はその事にはいつも気付かない。
「ただねえ。何か企んでる気がするんだよねぇ・・・・」
「だけどそれは分からない」
「そう、そこだよ。明後日、八代通がもう一機のドーター化をするために那覇にいっちまうからねぇ、その間の整備をアタシらがしなくちゃいけないんだけど・・・」
ちらり、と古田は恭平を見ると、その首に腕を回して顔に近付ける。
「いいかい、しっかり監視するんだよ。事は起きてからじゃ遅いからね」
「善処する」
「いいね・・・・・正直、アタシもあの子が怖いよ」
そう言って、彼女は持っていかれたドーターを追いかけていった。

しばし、ザイの襲撃はなく、しかし中国が未だにザイの侵攻の被害をもろに受け続けているというニュースを聞き続けて、もう四日が立っていた。
やっとの事で届いた恭平用のイーグルではあるが、それがまさか恭平用のチューニングを施されている訳でもなく、費用のほとんどをドーター化の為に持っていかれているためにイーグルの改造は出来ていない。
そもそも、ドーターの修理と維持に莫大な費用がかかるために、たかが一人の兵の戦闘機を改造するなんて余裕はないのだ。
だが、それでもザイからの襲撃はなく、比較的平和な日々が過ぎていった。
そんな平和な日常の中で、航空自衛隊三沢基地には、とある変化が起きていた。

「・・・ん?」
それに気付いたのは、食堂にいた時だった。
どうにも、空気というか雰囲気が違っていた。
特定のグループでのみ集まり、他のグループに対しては何か、嫌悪感のようなもの感じる。

（なんだ・・・？）

何かの勘違いだろうか。その時は深く考えずに目の前にいるファントムを眺めた。

疑念が確信に変わるのは、そう短くはなかった。

基地内の外をファントムと一緒にあてもなく歩いていた所、それに出会った。

「野郎ッ！もう一度言ってみやがれッ！」

どこからか怒声が聞こえた。そちらに視線を向けてみれば、何やら二つのグループがいがみ合っていた。

「なんだなんだ・・・？」

「ああ、何度でも言ってやるぜ。お前らは旧式にしか乗れない哀れな戦闘機乗りだってな」

「んだとォ・・・」

なんだ。そんな事で・・・

「悪いファントム、ちょっと待っててくれ」

「別に仲介する必要もないでしょう？それともなんですか？『仲間』が争い合うのは見ていられないとかそういう意識ですか？」

「まあそんな所だ。見てろ」

そう言って、恭平は彼らに歩み寄った。
「おいおいお前ら一体何やってんだ？」
「あ？誰かと思ったらイーグルブレイカーじゃねえか」
（定着してるんですね・・・）
遠目から聞いていたファントムがそのような感想を抱いた。
「そんな事はどうでも良い。それよりも、お前ら一体何やってんだ？」
（気にしないんですか・・・）
「こいつらが俺たちの事を古臭い奴にしかのれない哀れな戦闘機のりと言ってくるんだよ」
「それはそうだろう？Ｆ―１５、つまりイーグルに乗っている者はその実力が認められ、なおかつ最新鋭の機体に乗る事を認められた誉れあるパイロットだ。お前らのような旧式パイロットと同じにされたくないね」
「なんだと!?」
どうやら自意識過剰者が他人をけなしているだけのようだ。
しかし、今までそのような事があったか？なかったはずだ。
というか言われている方もこんなに短気じゃなかったはずだが・・・
「ていうか！家のお陰で融通してもらってる癖にいい気になってんじゃねぇよ!!」

「それが現実というものだ。それでも実力もある。未だにファントムにしか乗せてもらえないお前らに、そんな事を言われる筋合いはないな・・・・」
　それに、と彼はつづけた。
「影でくだらない憶測を立ててこちらを貶めようとしているくせに、偉そうな事をいうな」
　と、こちらもあり得ない程の眼力で相手を睨みつけた。
「な、何の話だよ・・・」
「とぼけるな。お前たちは影でさんざん、俺らの事をザイ戦で負けた負け犬などと呼んでいるんだろう」
「ハア!?」
「あー、ちょっと待て」
　何やら不穏な方向に進み始めた会話をどうにか止める恭平。
「つまりなんだ?そんな噂を耳にしたからわざわざ直接言いがかりをつけに来たのか?」
「その通りだ。影でこそこそやる奴らよりも、よっぽどマシだからな」
「て、テメェ・・・ふざけんのも大概に・・・」
　そこで恭平が掴みかかろうとしていた方を手で制した。

「つまりお前は、そんなくだらない事の為にわざわざ出向いたって事か」
「何？」
「お前さぁ、よく考えてみろ。たかが『噂』だろ？わざわざそんな確証もねえ下らねえもんのためにこいつらを貶めようってのか？それはな、馬鹿のすることだ」
「テメェ・・・」
　相手の額にあおすじが浮かび上がった。
　しかし恭平は構わず話を続ける。
「お前ら何を聞いたか知らねえけどな。影で悪口いうのも正面から悪口言うのもどっちもアホらしいんだよ。無駄な事言って、それで時間を無駄にしている暇があんならザイを落とす為の工夫を少しでも考えろ。それともなんだ？どうせ俺たちじゃザイに勝てないからその苛立ちを他人にぶつけて憂さを晴らそうって、そういう口か？そんな事考えてんなら、今すぐ自衛隊員やめちまえ。俺たちはあくまで自国を護衛する為に戦ってんだろうが。それが自衛隊だろうが。今目先のくだらねえ事でトラブル起こすな」
　シン、と場が静まり返る。だがそれすらお構いなしに恭平は対峙していた二人の手を取るなり、それを無理矢理握手させる。
「分かったら、ハイ、仲直りの握手。今後、誤解のねえように、きちんと話し合うように」
「・・・・なんか、悪かったな」

「いや、こちらこそ・・・」
無理矢理現実に引き戻し、和解させた。
それを確認した後、恭平はファントムの元へ戻る。
「悪い、時間かかった」
「いえ、とても興味深かったです」
ふと、ファントムの目が、恭平を興味深そうに眺めた。
「ん?どうした?」
「いえ、なんでも。では行きましょうか」
そう言って、振り返って歩き出すファントム。その後を恭平は仕方なしについていく。
そして、ファントムが、その口角を吊り上がらせて、何かを企むかのように笑ったのを、恭平はついぞ気付くことはなかった。

そして、しばらくの間、トラブルが絶えなかった。

掃除が行き届いていない、アイツはこっちを嘲笑っている、コイツは訓練の時はいつもさぼっている、などなど。

そんなくだらない事で起きる小競り合いを、恭平はすべて論破という形で納めてきた。

実は恭平、かなりの対人スキル持ちなのである。

覚えている言語も英語を初めとしてロシア語、ドイツ語、ポルトガル語、フランス語、中国語などなど、全部で七ケ国の国の言語をマスターしているのだ。

その上、裁縫も上手いとか。

どんなトラブルが起きようとも、それが対人的な問題である限り、彼はその話術と臨機応変な対応によって全て納めてきた。

イーグルを初めて壊した時も、その話術でどうにか上司を丸め込んだらしい――――

それが、これまでにファントムがかき集めた、『泉守恭平』という人物の個人情報の一部。

他にも、家族構成が両親と妹、祖父母はすでに他界しているらしく、親戚が何人かいるらしい。

そして、何よりも目を引くのが、そのイーグルを壊した際の彼の機動。

全くもって、異常である。

物理法則を無視するかのような急加速に急旋回を決めてくる。その機動は通常のパイロットどころかザイすらも超えており、その機動によって、彼の操る機体そのものが耐えられず自壊、墜落していってしまう。

そのほとんどがイーグルであることから、ついたあだ名が『イーグルブレイカー』なのだろう。

他にも、『金巻き上げ野郎』だとか『費用無駄遣い装置』とも呼ばれているらしい。

だが、いずれにせよ彼が自らの脅威になる事には変わりはない。

どうにかしなくては。

自分の存在意義を、最優先事項を全うする為には、障害をとことん排除しなければならない。

正直、どれほど彼をはぶろうとしても、得意の話術と機転の使い方で全て阻止されてしまう。

ならばどうするべきか――――

「――――俺と模擬戦をしろだぁ？」
「ええ」
突然、そんな事を言われて顔を引きつらせる恭平。
「いやいやいや何言ってんのお前。なんで俺がお前と戦わなきゃならんの？」
「あら、いけませんか？私はただ、一尉の実力を知りたいが故に、もっとも手っ取り早い方法で頼んでいるだけなのですが？」
「映像は見たのか？」
「ええ、しかし、見ただけでは実力を本当に理解できないというもの。実際に体感した方が、効率が良いでしょう？」
「お前・・・俺がなんと呼ばれてるのかわかってるの？」
「ええ、イーグルブレイカーでしょう？」
「分かってんならやらねえ理由を聞くな。大体、俺とお前がやりあうメリットがねえ」
「メリットならありますよ。貴方はアニマの実力を知れる。そして私は貴方の実力を知れる。どうですか？これから作戦をともに遂行していく仲、互いの実力を知っておいた

方が損はないでしょう?」
「ここの自衛隊員の個人情報をかき集めといてよく言う」
「・・・・・」
「はい、沈黙は肯定と受け取ります」
突然の質問に、沈黙するファントム。
「・・・いつから気付いて?」
「カマだよカマ。その返答で言質は取ったからな」
ファントムは閉じた口の中でぎりっ、と歯を食いしばった。
どうやら、相手の方が一枚上手のようだ。
「・・・なぜ私だと?」
「まず、アイツらがいがみ合いを始めた時期。お前が早めに実行に移してくれてたからな。その点の特定は簡単だった。二つ目にお前の視線。あの格納庫前で、お前、笑ってたな。まるでああなる事を分かってたみたいに」
「見てたんですか?」
「そりゃあお前から目を離すなと言われてるんでな。それで最後に、単純な俺の勘だ。戦闘機乗りとしての。そして、長年の経験からの、な」
「・・・・」

黙り込むファントム。しかし、その余裕そうな姿勢は崩さず、言い返した。
「それで、どうするつもりですか?それで弱味を握ったと思っているでしょうが、そんなもの、もみ消すのは簡単ですよ?」
「だろうなぁお前はここにいる全ての隊員の情報を掴んでる。それらを操作すれば、瞬く間に俺の掴んだ情報を霞に消える・・・分断して統治せよ。なんとも結構なやり方じゃあないかファントム君。でだ」
そこで、恭平はすっとファントムを睨みつけた。
「何が目的だ。内容によってはここで射殺する」
先ほどまでの陽気な声とは一変して、重みのある声になる。
そして、腰のホルスターから、拳銃を抜き取る。
ここは、人気の無い格納庫の裏。
だから、先ほどの会話は誰にも聞かれていない。
「・・・・」
「だんまりはなしだぞ。１０(テン)カウント以内に言わなければ即刻――――」
「人類の救済のためですよ」
「・・・・・おう」
なにか、とんでもなくスケールのでかい話が出てきたな。

「私は、少々面倒な開発過程を踏んでいましてね。肉体をもって、戦闘機に乗って飛ぶ前に、様々なシミュレーションを行ったんです。実際に戦闘配備され、出撃し、帰還し、そしてまた出撃したらどうなるか。それを何十回何千回、条件を変え、状況を変えて・・・体感にして百年は経験しているでしょうか」

「ひゃく・・・」

「だからこそですよ。私は日本唯一のドーターにしてアニマ。私の判断一つで人類は敗北してしまう。故に、私は生き残らなければならないんです」

「・・・そうか、だからこその分割統治か。自分に敵意が向かないように、他の人間同士をいがみ合わせて・・・」

　得心がいったという感じで拳銃をしまう恭平。

「だけど、それじゃあ日本はどうなるんだ?その判断一つで日本が滅んでもいいのか?」

「それは人類の終焉ですか?」

「チッ、そういう事か。人類そのものが助かるなら国一つ滅んでもいいと、そういう事かよ」

「はい。理解が早くて助かります」

　妖艶な笑みが一瞬浮かび、しかしすぐに引っ込み、真剣な表情で、彼女は語る。

「私は、生き残らなければならないんです。私の判断一つで、人類を滅ぼされる訳にはい

かないんです。それが私が生まれた理由であり、存在意義です。これまでも、そしてこれからも」
「なんか、よくわからねえな」
「分からなくてもいいですよ。何せ、その度重なる試験の結果、私から情緒の類はほとんどなくなってしまいましたから」
「それにしては、結構表情豊かだよな」
「そうでしょうか？」
　予想外な返答におもわずきょとんとするファントム。
「まあ、別の場所でバカ騒ぎしてる奴らと比べたら、あんまり感情表現は苦手かもしれねえかもだけど、そんな人間はこの世にごまんといるぜ。激情に燃えていても分かりにくい奴もいれば、逆に感情を隠すのが苦手な奴もいる。まああれだ、お前はそんな特別じゃねえって事だ」
「はい？」
　思わず瞠目するファントム。
「何を言ってるんですか貴方は」
「じゃあ聞くがお前からアニマという要素を抜き取ったら何がのこる？」
「それは・・・・」

「ようはそういう事だ。俺もイーグルブレイカーなんて呼ばれてるが、俺から戦闘機抜いたら何が残る?ヨーヨーが上手い奴からヨーヨーを取り上げたら?料理出来る奴から料理を抜いたら?『普通』だろ。結局の所、イーグルをぶっ壊す程の操縦技術を持ってる俺であっても、アニマという存在であるお前であっても、結局はそれは単純な長所なだけなんだよ。ついでに言って短所ともいえる。よくいうだろ?長所と短所は紙一重だって。結局はそういう事だ。どれだけお前が人類の救済だー、生き残らなければーと言っても、結局それは当たり前の事で、お前はそんな当たり前の事の中にいるだけなんだよ」

「・・・・それじゃあ、私は何をすれば」

「いやいやいや俺は何もそう思うのはやめろって言ってるわけじゃねえんだぞ?ただな、その思いの為に他人を貶めるような真似はやめろって言ってるんだよ」

「・・・・それでも、私は、一人です・・・一人だけの私は、一体何で身を守ればいいんですか?」

　そこで恭平は理解する。

(そこで拗らせてんのか)

「俺が守ってやるよ」

　答えはすぐに出た。

「はい？」
「地上でも空でも、俺がお前を守ってやる。他の奴らにお前を殴らせねえし落とさせねえ。それでいいだろ？」
「・・・・・・」
「もし、それでも信じられねえっていうなら、望み通りにやってやるよ」
恭平は、今日初めてにやりと笑った。
「――――模擬戦だ。格の違いを見せてやる」
「・・・・いいので？」
「今更だな。こんな事言った手前、お前との信頼を勝ち取るにはこの方法が一番手っ取り早いんだ。わかったらさっさと行くぞ。ただし実機じゃなくシミュレーターでだ。いいな」
しばし、考える素振りを見せたファントム。だが、やがて、納得するようにうなずいた後、顔を上げて恭平を見て、
「分かりました。では今から――――」

その時、けたたましいサイレンの音が鳴り響いた。

「・・・おいおいおい。いくらなんでもタイミングが良すぎるんじゃないのか？」

言わずもがな、

――――非常事態（スクランブル）だ。

エアリアル・ファイト

スクランブルの警報が鳴り響き、自衛隊三沢基地は騒然としていた。
整備士たちの怒号や、パイロットたちの駆け足音が静かだった基地内をバーゲンセールをやってるスーパーの店内のような状況を作り出していた。
「泉守！」
「ん？」
対Gスーツを着て、自分のイーグルに乗り込んでいる恭平に古田が声をかけた。
「一応、あんた用に装甲の強度を上げといたけど、それでも子供騙し。ちょっと壊れる時間が遅くなるだけだよ。ざっと見積もって、いつもより一分は長く持つ筈だよ」
「すまない。そこまでしてもらって」
「ふん、必ず帰ってくるんだよ」
「了解」
古田に見送られ、恭平はキャノピーを閉める。
ヘルメットをかぶり、そして酸素供給器を装着する。
そのまま滑走路へと移動する。

「ＢＡＲＢＩＥ０１、応答せよ」
『こちらＢＡＲＢＩＥ０１、何の用ですか？』
「いや、無線がちゃんとつながるかどうか確認したかっただけだ」
『そうですか。心配しなくても、こちらから拒絶しない限りは交信は可能ですよ』
「それが聞けただけでも十分」
『ＢＡＲＢＩＥ０１、および０２、ランウェイ２８、クリアード・フォー・テイク・オフ』
そこで、管制からの無線が入る。
「Ｒｏｇｅｒ、ファントム」
『ええ、ＢＡＲＢＩＥ０１、ランウェイ２８、クリアード・フォー・テイク・オフ』
エメラルドグリーンに輝く機体が、紺碧の空へと飛んでいく。
それに続くように、恭平のイーグルも滑走路に並ぶ。
「ＢＡＲＢＩＥ０２、クリアード・フォー・テイク・オフ」
そして、滑走路から離陸する。
「ＢＡＲＢＩＥ・・・人形かい俺らは。まあ、前の名前もそうだったが」
今回、与えられたＢＡＲＢＩＥの名・・・これは本来なら、アニマに対して使われる離陸時の呼称なのだが、恭平は僚機だという事で、同じ名を与えられている。
最も、彼自身が人間離れした操縦技術の持ち主であるがゆえに、そもそも人間じゃな

いアニマと同列に並べられてしまったのだ。
まあ、不思議と悪い感じはしないが。
ふと目の前を見れば、そこには同じＦ―１５の部隊がＶ字に編隊を組んでいた。
それを見て、恭平は思い出したかのようにファントムへ無線をかけた。
「ＢＡＲＢＩＥ０１、応答をしろ」
『こちらＢＡＲＢＩＥ０１、０２、どうしました？』
「せっかくだ。俺たちも編隊を組んで戦おう」
『具体的にはどうするので？』
「ロッテ戦術」
『お断りします』
「即答!?」
まさかの返答に思わず瞠目する恭平。
『だって、あなたの機体が私の動きについていって、壊れない保証はないですもの』
「ああ、内容は知ってんのね。そして心配してんのは俺の方なのね」
ロッテ戦術とは、ドイツのジョン・Ｓ・サッチ少佐が考案した二機一組の相互支援戦術だ。機織りのように互いに交差するようにＳ字の旋回を繰り返す事で、敵機に後方を取られても、編隊僚機がその敵機の後ろにつくことができるという戦術である。

これを使えば、たとえ後ろからロックオンされても、ミサイルが発射される前に機銃で倒せるかと思ったのだが。
「やっぱこの機体じゃだめかぁ・・・」
『アイディア自体は悪くはありませんでした。ですが、私が全力で飛行して、あなたがそれについて行って、あなたの機体が壊れてしまっては元も子もありません。ですので、貴方は大人しく自分の戦闘に集中してください』
「へーい・・・でも援護はするからな」
『どうぞお好きに』
そう言った切り、会話が止まる。
今回のスクランブルは、敵方は十機のみの編成で真っすぐ、三沢に迫ってきていた。
正確には、その手前にある能代市にだが。
そして、そこの防衛のために、こうして駆り出されている訳だが。
「こちらは駐屯基地からの増援を足しておおよそ三十機。俺たちを加えると三十二機か・・・さらに海自からの支援攻撃もあるだろうが、正直言ってだめだろうな」
『こちら管制より全機、海自からの支援の結果、撃墜は一、他健在』
一機は撃墜できたようだ。しかしそれでも残り九機。はたして三十機のみで倒せるかどうか。

『ご心配なく』
「ん？」
『少なくとも、今は私が守ってあげましょう。九機だけなら、それほど問題はありません』
「今は、ねえ・・・・」
『不満ですか？』
「いや、俺が心配してんのはそこじゃねえよ」
『ではなんですか？』
　ファントムから来る、しつこい質問。
　それに対して、恭平はしばし逡巡したあと、答える。
「・・・お前の事は誰が守るんだ？」
『はい？』
『マリオ０１よりＢＡＲＢＩＥ隊、これより交戦を開始する』
　ファントムが何かを言い返そうとする前に、聞きなれた男の声が聞こえて、ついぞその声は聞けなかった。
「構えろよファントム。油断したらその瞬間に足元をすくわれかねないからな」
『言われなくても分かっています』

目の前で火花が散った。いや、それは火花というにはあまりにも大きい。
それはミサイルが自爆した時に見せる燐光。それは、前にいる編隊がザイと交戦を始めたという事。その先制攻撃だ。
しかしその数秒後。
『ブレイクッ!!』
鋭い怒声。そのさらに数秒後に。
『マリオ０４、ダウンッ!!』
撃墜報告、仲間が墜ちた、その報告が無線から響く。
悲鳴が響き、ザイ相手に蹂躙されている事が、手に取るようにわかる。
仲間が撃墜されていく報告がリアルタイムで耳に入ってくるたびに、操縦桿を握る手に力が入る。
『落ち着いてください』
ふと、ファントムの声が聞こえた。
『苛立っていると、肝心な時に視野が狭くなりますよ』
「ああ、そうだな・・・」
ファントムに諭されて、一度深呼吸をする恭平。
「悪い、お陰で落ち着いた」

『どういたしまして。そろそろ私たちも戦闘区域に入ります』
「了解、ＢＡＲＢＩＥ０２、これより交戦に入る」
スロットルを上げて、一気に混戦状態の戦場へ突入する。
そこは、やられている側にとってはまさに地獄絵図だろうか。
仲間が一方的に蹂躙され、次々と落とされ、減っていく様は、悪い夢でも見ているかのような気分だった。
だが、そんな現状を目の当たりににしても、敵は無慈悲にも、こちらを落とさんと向かってきていた。
そんな敵機を、恭平は得意のアクロバットで後ろを取り、機銃のみで落としていった。
ザイ相手にミサイルは使えない。ならばマニュアル射撃で落としていくしかない。
その結果、多少機体が軋みつつもザイ相手にかなりのスコアを叩き出していた。
「敵機撃墜（スプラッシュ・スリー）」
三機目のザイを撃ち落とした所で、恭平はファントムの方を見た。
目立つカラーリングなので、すぐに見つける事が出来た。
「すごいな・・・」
アニマは基本的には人間ではないが、それでも人型の誰かが乗ってるとは思えない機

動力でザイを追い回し、翼下のミサイルをリリースする。
『ＦＯＸ２』
囁くような呟きと共に、飛翔する槍がガラス細工の機体を追い回す。
本来なら、近付いた所で自爆するはずなのだが、エメラルドグリーンの亡霊が放ったミサイルは落ちる事なく追尾し、ついにはそのガラスの機体にその一撃を叩き込んだ。
『敵機撃墜（スプラッシュ・ツー）』
撃墜報告を聞きつつ、恭平は自機の操縦に戻る。
だが、いくら恭平とファントムが敵機を落とそうとも、それで落とされた仲間が帰ってくる訳でもなければ、仲間が落とされなくなる訳じゃない。
ただ、その速度が落ちるだけだ。
残り五機。
こちらは十五機。
半分落とすまでにこちらも半分落とされている。
これ以上落とされる訳にはいかない。
その思い、スロットルレバーを操作してあげようとした瞬間、突如として、がくんっ、と機体が揺れた。
「なッ!?」

突然の事に被弾したのかと一瞬思ったが、そうではない。
（やべぇ、無理させすぎた）
恭平の機動に、機体が耐えられなくなったのだ。
恭平の操縦でかかるＧは１０Ｇ以上、それもザイの機動を超えるほどだ。
通常の戦闘機が耐えられるＧは１５Ｇ、それを過ぎればすぐさま機体が空中分解を引き起こしてしまう。
「くそっ！こんな時に・・・」
『退がれ恭平！』
「ッ!?狩野・・・・!?」
そこへ狩野のイーグルがやってくる。
「まだ戦え・・・」
『それで機体がバラバラになって海に落下か?ふざけるのも大概にしろ！お前は俺たちの切り札だ！その命をここでみすみす無駄にする気か!?』
「ッ・・・」
流石に黙る恭平。
『マリオ０３の言う通りです』
「ファントム!?」

『今すぐ下がってください。機体が壊れかけている以上、貴方は足手まといです』
冷静なファントムの声に、歯をくいしばる恭平。
「・・・分かった。こちらＢＡＲＢＩＥ０２、今より戦闘区域から――――」
そして、絞り出すような声を発して、すぐに戦線離脱の報告をしようとした。その時だった。
『敵機撃墜（スプラッシュ・ワン）！』
味方からの歓喜の声が恭平の耳に届いた。
思わず周囲を見渡し、上空を見上げれば、そこで煙を噴いて落ちていくガラス細工の機体が見えた。ザイだ。
その機体は、揚力を失ったのかどんどん海面に向かって落ちていっていた。
だが、その時、そのザイがいきなり落下する軌道を変えた。
その先には――――エメラルドグリーンの機影。
「――――ッ!!」
瞬間、身体中の毛が総立った。
あのザイは、自らの体を弾頭にファントムに突撃する気なのだ。
「ファントム！逃げろ！」
『え？』

無線越しに怒鳴るが、ファントムはきょとんとするだけ。
（野郎、経験はかなり積んでるだろうがそれが逆に仇になってやがる！）
ファントムは想定外の事態に弱い。
恐らく、百年分の経験の自負があるが故に、その経験に頼り、その経験にない事は一切想定していないのだ。
シミュレーターである事も災いして、敵が自滅覚悟で突っ込んでくるような内容はなかったのだろう。
だから、ファントムは反応が遅れた。
『ッ!?』
無線越しに息を飲むのが分かった。
このままでは激突してしまう。
そう思った瞬間、体は考えるよりも先に動いていた。
『泉守?どこに行く気だ!?』
狩野が驚きの声をあげる。
だが、今の恭平にはその声どころか、乱戦の騒音や、自らが乗る機体のエンジンの唸り声も、自機の悲鳴すら聞こえなかった。
ただ、目の前で、一人の少女が乗る機体が落とされてしまうという事実を捻じ曲げる

為だけに、恭平はスロットルレバーを限界にまで押し倒した。
（しまった・・・・）
ファントムは呆然と迫り来るザイの機影を走馬灯のようにスローとなった景色の中で見ていた。
油断していた。まさか、敵が自爆覚悟で突っ込んで来るとは予想しなかった。
このままでは落とされてしまう。
明確な終わりが――――『死』が迫ってくる。
回避しなければ。いや、もう間に合わない。
直撃する。死。嫌だ。まだ、何もやっていない。何も成し遂げていない。
人類を守らなければ。その為には、ここで死ぬわけにはいかない。どうにかしないと、でもどうやって。
ダメだ。ぶつかる――――!!
そう思い、目をつぶろうと思った、瞬間、
『――――ファントム!』
声が聞こえて、目を開けた。そこに、ガラス細工の機体の他に、もう一機、機影があった。
それは、翼から煙を吹いているF―15――――恭平のイーグルがそこにあった。

「え・・・」

その時、唐突に出撃前の言葉がフラッシュバックした。

――地上でも空でも、お前の事を守ってやるよ

――お前のことは誰が守るんだ？

「一尉ッ!!」

叫んだ頃には、全てが手遅れだった。

ファントムに突っ込もうとしていたザイに向かって捨て身のタックルをかました恭平のイーグル。激突されたザイはその軌道を変えてファントムへの直撃は回避された。

その代わり、恭平のイーグルが落ちた。翼を叩きつけるかのような形になった為に、すでに取れかかっていた翼はついに折れて、バランスもとれず、回転しながら海面へと落下した。

「いち・・・い・・・・」

煙を上げ、海面に浮かぶ鈍色の機体を、ファントムはただ呆然と見ていた。

「――――よく聞け、恭平」
長い髭を顎から垂らして、空を見上げながら祖父は言った。
「俺は鳥が羨ましい。何故かって?自由だからだ」
自由?
「そう。自由だ。鳥は好きな時にいつでもこの広い空を飛んでいく事ができる。どこまで飛んで、海さえも渡っちまう。そんな、すげえ奴らなんだよ」
でも雨の日とか飛びにくくないのか?
「バカ野郎、そんなもんで奴らの自由を奪えるか。奴らには、自由に飛ぶ為の翼がある。だけど、俺たち人間にはない。俺はそれがどうしても悔しい!」
だから、パイロットに?
「おうよ。地上なんて目じゃねえくれぇに空は自由で広い。その気になりゃあどこまでも飛んでいける気がするんだ。けどまあ、俺の場合はそんなに自由に飛べなかったけどな」
祖父は、悲しそうな目をした。
「ま、今更だな」
そして悲しそうに笑った。

「恭平、自由に生きろ。でもこれだけは言っておくぞ。初めて空を飛んだなら水平線を見てみろ。そうすりゃ、絶対にこう思うはずだ」

世界は、無限なんだ、てな――――

「・・・・じい・・・ちゃん・・・」

思い瞼を持ち上げて、一番始めに目に入ったのは、鉄の天井だった。

「ッ!?意識が戻りました」

ついで、おそらく寝ている自分の横から、救急隊員の服装をした男性が誰かに報告しているのが見えた。

「おい、意識ははっきりしているか?この指は何本に見える?」

そう言って目の前の男は指を二本立ててきた。

意識がはっきりするのと同時に、けたたましい風切り音とプロペラが回転するかのような音が耳に入ってくる。

「・・・・二本」

「よし、意識は安定しています」

「まだ油断するな。どこか負傷しているかもしれん」
　おそらく、隊長と思われる男がそう指示をする中で、恭平はどうしてここにいるのかを思い出していた。
　確か、ザイと交戦していて、それでファントムに敵機が突っ込んで、そしてその機体に自分は激突してその後は――――
「そうだ・・・・・」
　全てを思い出した瞬間、恭平はすぐ近くにいた救命隊員の服を掴んでいた。
「うお?!」
「ファントム・・・ファントムはどうなった!?」
「お、落ち着いて!お前が落ちた後の被害はゼロ。あの後ザイは全部撤退したから、みんな先に基地に帰ってるよ」
　それを聞いて、体から力が抜けた。そしてそのまま床に寝転がった。
「そうか・・・・よかった・・・」
　ひとまず、ファントムが無事ならそれでいい。
　こうして生きているのなら、なお良いだろう。
　そう、その時はそう思っていた。
　救命ヘリに乗せられて、そのまま基地に戻ることになり、ヘリが基地内に着陸しよう

としていた時、何やら人だかりが出来ているのを見つけた。
（なんだ？）
疑問に思い、目を凝らしてみると・・・
「あ、おい!?」
ヘリが着陸したのと同時に恭平は飛び降りて走っていた。
（何があった!?）
あの人混みの中心にいたのは、エメラルドグリーンのおかっぱ髪の少女だった。
その少女に、一人の自衛隊員が掴みかかっていた。
「どう言い訳するつもりだぁ化け物・・・」
ファントムの胸倉を掴み、怒りで歪んだ顔で睨みつける。一方のファントムは、何も言わず、ただなされるがままにしていた。
「テメエのせいで泉守が死んだんだぞ。どう落とし前をつけるつもりだ！ああ!?」
なおも怒鳴るが、ファントムは何も言わない。
「なんとか言えよ、この――――」
男の拳が振り上げられる。そのままファントムの顔面に叩き落される、その寸前。
「対空自飛行士（パイロット）ドロップキック！」
航空自衛隊のパイロットに対して強烈な両足飛び蹴りを食らわす、恭平の必殺技であ

る。
　それを食らった自衛官は宙を舞い、アスファルトの上に落ち倒れる。
「やいやいやい、勝手に殺すなバカ野郎」
　突然の乱入者に混乱する周囲を置いて、恭平はファントムの方を向く。
「おい、大丈夫か？」
「一尉・・・・？」
「ん？ああ、ほらこの通り生きてるぞ。言っとくが幽霊じゃねえからな」
　試しに片手をあげてぐっぱと握ったり開いたりしてみる。
　ファントムは、まるで何かにすがるような視線を向けていたが、すぐに俯いてしまった。
　その事にとりあえず首を傾げる恭平だったが、しかしまずはこの状況をどうにかするべく説教に入った。
「というかお前ら、一体何やってんだ一人の女の子相手に。恥ずかしくねえのか？たかだか俺が落とされた程度で喚きすぎだ。今までに沢山仲間が落とされてんのに、今更感半端ねえぞ」
　どきっぱりと言い切る恭平。しかしそんな言葉に反論する者がいた。
「俺たちが憤っているのは、そういう理由じゃないぞ、泉守」

「ん？」
狩野だ。
「そもそも、その女の悪事を暴いたのはお前だろう？」
「へえ、コイツが一体どんな悪事をして、どうやって俺が暴いたんだ？」
「そいつが、今まで俺たちの不和を招いていたという事だ」
聞かれていたのか。
狩野は、ファントムに鋭い視線を向ける。
「そいつは今まで、俺たちが違いに嫌悪感を抱かせるような噂を流して俺たちを対立させる事で、自分に向けられる悪意をそらしてきた。今の今まで、俺たちはそいつに踊らされてきたんだ」
指をファントムに突きつける。
「人の姿になってもザイはザイ。そいつは俺たちにとって有害な存在だ。だから隔離すべきだ。もう二度とそいつが下手な真似が出来ないように、拘束して、監禁すべきだ」
周囲も、そうだそうだ、自由にのさばってんじゃねえよ、化け物風情が、などとファントムを責め立てる。
彼女に味方はいない。だから彼女は、あの様な手段に出たのだろう。元々の作りからして隔たりのある彼女と彼らでは相容れないと判断して、ただ一人でも大丈夫なよう

に、周囲を分割し、敵対させようとした。自分にその害意が向かないように。
そして、その結果がこれだ。彼女の所業はバレた。このままいけば、彼女は出撃以外はずっと一人で独房で過ごす事になるだろう。
（これが、報いなのでしょうか）
人を信じなかった。その結果がこれなのか。
吐き出される悪意の言葉を受けながら、ファントムはもうなにもかもを諦めて目を閉じた。
「・・・・いや、お前何言ってんの？」
だが、その時、恭平の言葉が耳に届いた。
「なんだ？隔離する事か？それともそいつはザイである事か？」
「いや、コイツが噂を流したって話。何寝も葉もない事言ってんだお前」
予想外の言葉が恭平の口から吐き出された。
「は？」
「証拠はあんのか証拠は？上層部に提出して、こいつを監禁してくれっていう許可がもらえる証拠は？」
「そ、それは・・・」
「ない？ないの？まさか証拠もねえのにコイツの事犯人呼ばわりしてたのかお前!?マジ

で？引くわー、マジで引くわー」

大袈裟な態度で次々に言葉が恭平の口から出てくる。

「お前さー、証拠もないのにさー、こいつを追放しようとしたのかー？それってさ、ただ自分の憶測を押し付けているだけじゃん、意味ないじゃん。話の筋は通るかもしれないけど確実性がないじゃん。それじゃあ裁判に負けるぜーお前。いいか。法廷の場で勝ちたかったなら証拠を集めろ、しょ・う・こ、をな」

ここぞとばかりに挑発するかのような言動を叩きつけまくる恭平。

「お前らもだ。たかだか噂如きに踊らされやがって。どんな話を聞いたか知らないが、そんな確証のねえもん信じてどうすんだ？まあ気になったならとことん調べりゃいいが、調べる気もないのにその嘘かも知れねえ情報を信じるお前らの頭の中身を疑うぜ」

さらに、恭平はファントムの方を見て。

「お前もだファントム。こんな奴らに好き勝手言われてんじゃねーよ。もっと堂々としろ。俺たちとお前は結局の所、同じなんだよ同じ」

「待て泉守、そいつと俺たちは違う。そもそも生まれ方からして隔たりが・・・」

「俺から戦闘機乗りという事を取ったら何が残る？」

「は？」

「自衛隊だという事、軍人だという事、誰かの子供である事、それら全て、俺の特徴だ。

そう、特徴に過ぎねえんだよ。俺たち個人個人にある特徴を全部抜いたら何になる？『同じ』なんだよ。何の変哲もねえ、当たり前な集団の出来上がりだ。こいつに限ってもそうだ。こいつからアニマだって事を抜けばそれはもうどこにでもいる人間の出来上がりだ。いいか。どんなにすげえ才能もってよーが生まれが違おーが人は人だ。そこに隔たりはなく、皆その点だけは平等なんだよ。ただ違うのはそこに特徴が追加されるってだけだ。それが個性だ。お前らは、ただそんな当たり前なものを貶してるだけなんだよ。無駄なんだよ無・駄。お前らのやってる事は無駄なんだよ」

恭平の説教に、そこは言葉を失っていた。

「いいな。わかったらもうファントムを犯人呼ばわりなんてやめろ」

そう言って、恭平はファントムの手を掴んでそのまま去っていった。

「あ、あの・・・一尉・・・」

「ん？なんだ？」

基地の廊下で、ファントムが気遣わしげに恭平に話しかけた。

それに恭平は歩くのをやめ、ファントムの方を見た。

「何故、私を庇ったのですか？」

「ん？ああその事ね。出撃前に言っただろ。地上でも空でも俺がお前を守ってやるってな。俺は言ったことはだいたい有言実行するタチなんだよ」

そう言ってのける恭平。それに対して、ファントムは、

「馬鹿じゃないんですか」

「酷!?」

「私は兵器です。例え貴方の理論が正しくても、私はその為だけに生まれてきた存在。どれほど貴方が言葉を並べても、私がそうである事実は変わりません」

「それは当たり前だろ」

「はい？」

予想外の返しに、やはり愕然としてしまうファントム。

「俺には俺の存在意義が、お前にはお前の存在意義がある。そこにとやかくケチつける気なんてねえよ」

「そ、それじゃああの時言った言葉は・・・」

「あれは本当だ。人間や動物、植物から建物、道具にだって特徴なんてものはある。それに、兵器にだって戦う以外の用途があるんだぜ？壁を破壊したり物を運んだり。銃弾から火薬を抜いて工事に役立てるのもいいな。ていうか、兵器から武装をとっちまったらそれこそ置物か車と変わらねえ。戦闘機に関しちゃ、それこそただのどこにでもある飛

行機だ。そうなっちまったらお前の存在意義はなくなっちまうか」
　おどけるように笑う恭平。
「まあなんだ。戦うけど生き残りたいっていうなら、何か楽しい事でも見つけないとな」
「何を言ってるんですか・・・」
「だって、戦いが終わっちまったら、お前はその後どうするんだよ」
「そ、それは・・・貴方には関係のない事でしょう」
「いいや、こうして知り合っちまった以上は心配はするね」
「余計なお世話です」
「じゃあお前が今来てる服はなんだ？」
「え？」
「それってさ、お前の完全な趣味だよな？」
「・・・・」
　沈黙するファントム。
「こ、これは技本の方々が用意してくれたものです」
「へえ・・・その割には随分と気に入ってるようだが？」
「気のせいでしょう？」
「毎日来てるのかそれ？ほかの服見た事ないけど」

「これでも他の服も着るんですよ」
「今はないのにか？下着三着に同じような服を三着ぐらい・・・」
「なんで知ってるんですか!?」
「カマだ。ていうか図星かよ!?」
「～～～!!」
　何故だ。何故この男にだけは手玉に取られる!?言ってくることも先読みされるし、どういうわけか自分の事をピンポイントで当ててくる。一体何なのだ。
「な、なんでそんなに・・・」
「単純な話、お前の性格を読み取った。そこから出てくる言葉と行動から、お前がどんな私生活を送ってんのかを想像してるだけなんだけど・・・いやぁここまでぴったりだと逆に怖くなるね」
「それって、私が分かりやすいって事ですか？」
　流石にイラついてくる。
「そういう事だな」
　隠すことなくそう言い切る。
　それでファントムが切れる。
「バカにして！」

「いやしてねーよ!?」
「いいですよ!そんなに私が子供っぽいんですかそうなんですかそうなんですね!だったら良いですよお望み通り子供のように癇癪を起こしてあげますよ!」
「いやなんでそんなに怒ってんの!?論破されたのがそんなに嫌だったの!?」
　ぎゃーぎゃーと喚き散らす事数分、どうにか収まった所で、
「まあ、なんだ。つまりだな・・・この戦いが終わったら、どこかに遊びに行ってみないかって事だよ」
「行って、何になるというんですか?」
「さあな。ただ俺は、街の人たちがただそこで暮らしているというだけで、俺がやってきた事は無駄じゃないんだって、そう思えるんだよ。だから、街の中を歩くだけでも結構楽しいんだぜ。お前には分からないかもしれないけど」
「・・・」
　ファントムは、しばし恭平の事を見つめた。この、言葉巧みに予想外な事を言ってくる、自分でさえも予想の出来ない人。だけど、自分に向けられるその言葉に、不思議と裏表はないように見えた。
（不思議な人）
「ん?どうした」

ファントム自身は気づかなかったが、ほんの少し、笑っていた。
「いえ、なんでもありません。話はこれで終わりでしょうか？」
「ん、まあそうだな。どうする？このまま帰ってもいいし食堂に行くでもいいが・・・」
「その前に一つ、約束してください」
「約束？」
「明日、私と模擬戦をしてください」
「またそれか」
「貴方、言いましたよね。格の違いを見せてやるって」
「・・・・言ったな」
「ではそういう事です。明日、技本のシミュレータ室で待っていますから」
そう言って、彼女は身を翻した。
「・・・・やれやれ、気の抜けない女だな」
頭をかいて、そうぼやく恭平。
ただ、振り返る時の彼女の顔が、何やらとても楽しそうだった。
（ま、あの笑顔が見れただけでも儲けものか・・・横顔だけど）
その笑顔は、何かを企むようなものではなく、年頃の少女が見せる満面の笑顔だった。

ミサワ・ランデブー

「あ・・・ありえない」

そう呟くファントムの目の前には、恭平との模擬戦のリザルトが表示されていた。

曰く、十戦中二勝八敗（ファントムの成績）

「言っておくが、お前からのクラッキングは分かってたからな」

「嘘でしょう・・・・」

シミュレーターから出て、そう言う恭平の言葉を聞いて、なおも目を見張りながら今回の戦績を睨みつけていた。

ここは三沢基地にある技本の執務棟にあるシミュレーター装置の置かれている部屋。技本の人間に頼み、十本勝負の模擬戦をしてみたところ、結果が以上のようになったのだ。

「ありえない、あれがただの人間の機動・・・?どうやったらあんな・・・アニマの私でも不可能・・・・でも、あれ、あれ・・・?」

「おいおいおい落ち着け落ち着け!考えすぎてオーバーヒートしかけてねえかお前!?」

慌てて頭から煙を吹いてファントムを思考の海から引っ張り上げて、外にある椅子に

座らせた。
「まさかここまで惨敗するとは・・・」
「正直、ザイよりも強くて焦ったよ。それに、シミュレータとはいえ、二本も取られるとは思っていなかった。いつもなら、十本中十本は簡単に取れるんだけどな」
「そりゃ当たり前だ。あんな機動してたら誰も追いつけるわけが無いだろう?」
　恭平の言葉に答えたのは、ファントムの検査をするために戻ってきた八代通だった。
「というかお前本当に人間か?」
「失礼な。これでもれっきとした人間だ」
「普通の人間ならあんな機動した時点で体の中身がスクランブルエッグになっているぞ」
「そうか?・・・いや、うん俺が異常なだけだな。うん」
「しっかし、処女作とはいえ、アニマに圧勝するとは・・・お前本当に人間か?」
「それ二度目っすよ・・・」
「そういや聞いたが、ファントム。初陣はあまり良くはなかったようだな」
「・・・申し訳ありません、お父様」
「別に謝れと言っている訳じゃない。また次がある」
「そういえば、中国の方はどうなってます?たしか、小松あたりに難民が集まってるって

聞きましたけど・・・」
　その恭平の質問に煙草を吸いながら、八代通は答える。
「政府のコントロール力を上回るほどに蹂躙されている。と言ったところか。それほどまでに奴らの力は強く、そして速い。いずれ、中国全土が、奴らの支配権になるだろうな」
「マジか・・・」
「このまま中国が落ち、韓国や北朝鮮などの半島、台湾がやられれば、小松が前線になるだろうな」
「うわあ・・・てか、それならなんでファントムがここにいるんだ?小松が前線になるんなら、ここにいちゃマズくねえか?」
　恭平の疑問は最もである。しかし、その疑問にいち早く答えたのはファントムだった。
「単純な話、三沢の上層部が私を手放したくないんですよ。三ヶ月前の戦いで惨敗したのが原因だそうですけど」
「なるほどねえ・・・」
　ドーターは対ザイ戦の切り札。その戦闘力は並みの戦闘機を上回り、なおかつたった一機だけだ。そんな貴重な戦力を、自分たちの手の中にあるのにみすみす手放す気など

さらさらないだろう。
「面倒くさいことを・・・・」
「まあ、私はとくに気にはしませんけどね」
「あっそう・・・・」
時々、ファントムのこの無頓着さにはいささか心配を覚える。
そこでふと、八代通がパソコンの液晶画面をじっと見つめていた。
「・・・八代通室長？」
「ん、ああ、すまない。・・・一尉、ちょいとファントムを使って見せてくれないか？」
「は？」
「少し、試したい事がある」

そんな訳で

『うーむ・・・イーグルとは操縦方法が違うんだな・・・』
シミュレーターで、ドーターのファントムを操る恭平。その様子を、八代通とファントムは外のモニターで見ていた。
「これから課題を提示していく。その通りに動いてくれ。本気でな」

『まあシミュレーターだからな。いいぜ』
「よし、それじゃあ・・・」
　そうして八代通が出してきたのは、どれも普通の人間なら出来ないような無理難題だった。しかし、そのどれもを恭平は軽々とこなしていった。
　ファントム以上に。
「アニマを超える機動を軽々とこなすとは・・・」
「・・・」
　呆気にとられる二人。
『もう終わりですかー?』
「ああ、もういい」
『了解』
　その言葉を皮切りに、シミュレータが止まる。
　そしてキャノピー部分が開いて恭平が出てくる。
「いやー、イーグルと性能が違うからちょいと操縦にてこずったが、慣れれば難しい事はねえな」
「なんでそう軽々と言ってのけられるんですか・・・」
「だって動かし方は同じだろ?」

もはや何も言うまい。
「ふむ・・・」
「それで八代通室長。結局、何をさせたかったんだ？」
「何、気にするな」
「はあ・・・あ、じゃあアンタの要望に答えた礼と言っちゃなんですが、今日一日ファントムを借りてもいいですか？」
「何？」
八代通の鋭い視線にもおどけず、恭平はファントムの肩を持って、にししと笑っていた。

「何かと思えば貴方は・・・なんで私を基地の外に連れ出してるんですか」
「ん？息抜き」
「それだけですか・・・」
どきっぱりに言われて呆れるファントム。
「まあそんな悲観するなって。息抜きなのは本当だけど、俺のじゃなくてお前の息抜きだ。お、ちょっと待ってろ」

そう言って走り出す恭平。その先には屋台車が一台。
その事に首を傾げていると、何かを買ってきたらしく、戻ってくる。
「待たせたな」
「・・・クレープですか」
恭平の手にはクレープが持たされていた。
「おう、食えよ」
「いりません」
「いいからいいから。一口だけでもさ」
「・・・・」
恭平のしつこさに観念したのか、とりあえず一口食べてみる。
「・・・・バナナですか」
声を発する一瞬前、驚愕が迸ったような顔をしたファントム。
「一番無難な奴選んだつもりだぞ?」
「いえ・・・はむ」
(あ、食うんだ)
おもむろにクレープを恭平の手から奪い、頬張るファントム。
あまり表情には出ていないが、かなり喜んでいる事が分かる。

どうやら、気に入ってもらえたようだ。
その事に内心安堵しつつ、恭平も自分のクレープを食べる。
そのまま、三沢の街を散策する恭平とファントム。
三沢は、人口約四万二千人に加えて米軍人など、八千人が住む、異国情緒の溢れる街だ。
さらに世界で初めて太平洋横断をした『ミス・ビードル号』が離陸した場所でもあるのだ。
米軍、自衛隊、民間航空会社が共同で使っている滑走路がある三沢空港や、青森県立三沢航空科学館など、空とも関わりが深い街でもあるのだ。
また、米軍基地がある事で航空祭やアメリカンデーなど、三沢ならではのイベントもめじろ押しである。
今日は特にそんなイベントとかはない。だが街の中を歩き回るだけでも、三沢の街を初めて見る彼女には、新しい発見が多いはずだろう。
その予想は的中して、彼女でも知らない建物や歴史的建造物などの事を聞かれ、その度に恭平が答えるといったそんな散策となった。
ある程度散策していたら昼となり、腹の虫がなってきた。
「そろそろお昼の時間ですね」

「それならうってつけの店があるぜ」
　その恭平の答えに首を傾げたファントムだったが。
「寺山食堂ですか・・・」
　寺山修司という歌人及び劇作家が、青森空襲で焼き出された時に身を寄せていた店だ。
「青森で三沢と言ったらここだろう?」
「そうでしょうか?」
「そういうものなんだよ」
　そんなやり取りの中で、二人は出された料理を食べ始める。
　恭平はラーメンを、ファントムはカレーを、それぞれが食べる。
「そういえば聞きたかったのですが」
「ん?なんだ」
「何故私を基地から出したんですか?こんな事に意味はないと思うのですが」
「んー、その割にはお前、結構楽しんでたように見えたけど?」
「気のせいです」
「誤魔化すなよ」
「じゃあ聞きますが、あなたは楽しかったんですか?」

「まあな。いつも一人だったけど、今回はお前がいた。だから、一人の時とは違う楽しみ方が分かった」
「そうですか・・・いつもって事は、あれほど詳しい事も納得です」
「まあな」
　そのまま食事を終え、また街中を歩く二人。
　二十歳越えの男性とおおよそ中学生に見えるファントムが並ぶと、親子のように見えるのは致し方ないだろうか。
「Ｈｉ、キョウヘイ」
　ふと、誰かに話しかけられた。まだ小さい娘を連れた女性だった。
「誰ですか？」
「近くに米軍基地があるのは知ってるよな？」
「ええ」
「そこにいる友人の家族だよ。転勤でここ日本に引っ越してきたんだ」
「Ｎｉｃｅ　ｔｏ　ｍｅ　ｔｏ　ｙｏｕ」
　しばしその親子との会話をした後、別れ、見送る。
　まだ幼い子供は、こちらに向かって大きく手を振って歩いて行った。
「・・・」

「・・・ああいうのを見るとさ、毎度思うんだよ。俺のやってる仕事(こと)は、ああいう人たちを守るためにあるんだって、そう思うんだ」

空を見上げる恭平。

「よく死んだじいちゃんが言ってたんだ。空は自由だ。無限に広がってる。だからお前も空を飛べ。きっと痛快だぞって。実際その通りだった。自分の手で飛んだ空はすごかった」

そして、握った拳を見た。

「だから、その空を奪うザイを許す気は無い。誰もが自由に飛べる、この空を取り戻す為なら、俺は何機だってイーグルをぶっ壊してやる」

「それで死んだら、元も子もありませんよ」

「それもそうだな」

ファントムの言葉に頷きつつ、恭平は踵を返した。

「さて、次はどこに行くか?」

「それはどうぞお好きに。ですが、私が満足できる場所でお願いしますよ」

「そりゃかなり難しいことを・・・分かりましたよ。お嬢様」

そうして、ファントムの手を取って歩き出そうとした時、唐突にファントムが別の方向の空を見上げた。

「ん?どうした?」
「・・・どうやら、ここまでのようです」
ファントムの雰囲気が、緊迫している。
「・・・ザイか」
「・・・はい」
その答えを聞き、恭平とファントムは走り出した。
行き先は当然、航空自衛隊三沢基地だ。

翠緑の鋼鉄の亡霊（エメラルド・フルメタル・ゴースト）

ザイの襲撃。それが走り出したファントムの携帯からもたらされた時には、すでに恭平たちは三沢基地からあと五分の所まで来ていた。
「くそっ！そういや俺のイーグルはまだ配備されてねえんだった！」
「誰かの機体を借りればいいのではないのでしょうか？」
「そう都合よくあるかよ。実はザイが来る前に三沢にあった予備のイーグル片っ端から壊したんだよね!!」
「馬鹿じゃないんですか!?」
「ぐうの音もでないな！」
そんな言い争いをしながら、二人は三沢基地についた。
ふとゲートを素通りしようとしたら、監視員に呼び止められた。
「オイ！泉守一尉！」
「ああ!?なんだ!?今急いでるんだけど!?」
「一旦技本のモニタールームに顔出せって八代通室長が呼んでるぞ！ファントムもだ！」

「私もですか？」
「ああ、なんでも対Ｇスーツを着用して来いって」
そんなわけで二人は出撃用の服装に着替えて八代通の待つモニタールームに駆け込む。
「オイ！言われた通り来てやったぞ！」
「やっと来たか。他の自衛隊員や米軍はもうとっくに出撃してるぞ」
「そんな事は分かっています。お父様、何故、ここに私たちを？」
恭平の怒鳴り声にも動じず、まるまる太った豚のような体をした男は紫煙を吐きつつ言った。
「時間がないから手短に説明させてもらう。今回襲撃してきたザイは前衛に十機、後衛にさらに十機、そのさらに後ろに未確認の機体が確認された」
映像が映し出される。
「なんだアレ・・・？」
横に長い長方形のフォルムに機関砲のような部分が上下左右に四つ持った異形の機体。
ガラス細工のような体色からザイというのは分かるが、それにしてはあまりにも異常だ。

あんなサイズであの形、一体何の意味があるのか・・・・

「爆撃型でしょうか？」

「まだ分からないが、おそらくそれだろう。コイツが一機に直掩が五機、合計二十六機だ。一方こちらで出た機体は約四十機」

「絶望的じゃねえか・・・」

ただの戦闘型のザイを一機倒すためにもかなりの戦力がいる。

それを、二十五機プラスいかにもやばそうな感じのする巨大な機体がいるのでは、明らかに敗北は必至だ。

しかし、それならその状況を打開できるファントムをここに呼んだのか。そして、先日の戦いでまたイーグルを失った恭平も一緒なのか。

「そこでだ。ファントム。あれをたった一機で対処できるか？」

「できません」

なんの躊躇いもなく告白するファントム。

「いくらなんでも私一人であれほどのザイを落とすのは不可能です。せめてあと二機は欲しい所です」

「だろうな」

「じゃあどうするんだ？ファントムでも対処できなければ、ここが燃やされるのも時間

の問題だぞ」
「だからお前を呼んだんだ」
「は?」
　八代通の突然の言葉に思わず素っ頓狂な声を出してしまうも、その後に続く言葉でさらに驚愕する事になる。
「泉守一尉、お前、ファントムに乗れ」
「・・・・は?」
　八代通の突然の言葉に、絶句してしまう恭平とファントム。
「え、えっと、お父様?それって一体・・・」
「一尉の操縦技術はザイどころかアニマのそれを凌駕する。その操縦技術をもってすれば、ドーターであるファントムの性能をフルにいかせるんじゃないかと。そういう結論の元で出した答えだ」
　ものの見事にきっぱりと言い切った八代通にファントムは、絶句どころか何か、底の無い沼にはまったかのような気分になった。
「おい、八代通」
「なんだ?」
「それって、アニマであるファントムはもう用済みって事かよ?」

鋭い視線で八代通を睨む。しかし八代通は動じず紫煙を吐くだけで、すぐにその誤解を解いた。
「いや、アニマも乗せる」
「それは一体どういう意味だ」
「一尉が操縦する事で、ファントムを火器・レーダー管制に集中させ、その性能をブーストする。そうすれば、ドーターのＨＩＭＡＴ性能を殺さずにファントムの力をフルに活かせるって訳だ。幸い、ファントムは複座型だからな」
「なるほどな」
恭平は、拳と掌をぶつけ合わせる。
「アンタの作ったドーターっていうのは壊れないんだろうな？」
「ああ、そこは保証してやる。実際にお前たちが出かけている間に機体をちょいとばかし強化しておいた」
「なら乗った」
にやりと笑って、恭平はいってのける。
「格の違いを見せてやるよ」
「ちょ、ちょっと待ってください！」
ふとそこでファントムからストップが入る。

「なんだよ?俺に操縦されるのは不満か?」
「い、いえ、そういう訳ではないんですが・・・貴方がいつも乗っていたのはイーグルでしょう?私ではあまりにも操縦系統が違います。それに、使った事もない機体をぶっつけ本番で飛ばすなんて・・・」
「問題ねえよ」
「どうしてそう言えるんですか?」
おもむろにファントムの手を取って、言う。
「言っただろ。地上でも空でもお前を守ってやるってな。だから俺をRF―4EJ―ANMファントムⅡに乗せてくれ」
強い、真っ直ぐな眼差しに見られ、そしてファントムはその瞳から目を離せず、しかしやがて観念するかのようにうつむいた。
「本当・・・貴方という人は・・・」
そして、また顔をあげたその顔は、困ったように笑っていた。
「仕方がないですね」

「一応、前部座席を通常の操縦形態にしてあるよ」
「それはどうも」
　ヘルメットをかぶって、古田に感謝を述べつつ、ファントムⅡに乗り込む恭平。
「しっかし、本当に大丈夫なんだろうね」
　横目に準備をしているファントムを見る古田。しかし恭平は心配ないと言う。
「大丈夫だ。俺がいるからな」
「そのポジティブ思考が羨ましいよ・・・いいかい。確かにこの機体ならアンタの操縦に耐えられる。だけど無茶は禁物だよ。必ず、無事に帰ってきな」
「ああ。約束する」
「分かったね」
　古田が恭平の座る操縦席から離れる。そして入れ替わるように、ファントムが後部座席に座り込む。
「ファントム、準備は良いか?」
「いつでも」
「よし」
　キャノピーが閉じる。視界が真っ暗になるも、しかし後ろにいるファントムのエメラルドグリーンの髪が光り出す。

「ダイレクト・リンク――――」
神経融合インターフェース[NFI]を通して、ファントムの感覚神経とドーターがつながる。
それと同時に、キャノピーに光が入り、外の景色が映し出される。
「これがドーターか・・・」
「準備はいいですか?」
「ああ、いつでもいける」
「では、ユー・ハブ・コントロール」
「アイ・ハブ・コントロール」
ファントムが恭平に操縦を任せ、そして自身は火器・レーダー管制に集中する事の意思表示を互いに確認し合う。
『ＦＡＲＢＩＥ０１、ランウェイ２８、クリアード・フォー・テイク・オフ』
管制からの許可を受け、恭平は機体を滑走路に立たせる。
「ラジャー、ＦＡＲＢＩＥ０１、クリアード・フォー・テイク・オフ!」
スロットルを上げ、十分加速した所で、恭平は機体を上げた。
何の問題もなく機体が浮き、空へと駆け上がる。
「お、おお・・・!」
「何こんな単純な事に感動してるんですか?」

「い、いやあ、正直上手く飛ばせるかどうか不安だったから飛べて安心してるというかなんというか・・・・」
「あ、そうですか・・・」
「・・・あれ？ここは私が操作してましたからっていう所じゃないの？」
「言ってほしいんですか？」
「いや・・・」
　何やらぶつぶつ言う恭平を呆れ気味に見つつ、ファントムは恭平にバレないように微笑んで、
「・・・だって、信じてましたから」
「ん？なんか言ったか？」
「いいえ、何も。さ、早く戦闘区域へ行きましょう！」
「ＯＫ！飛ばすぞ！」
　スロットルを上げて、機体を加速させて、二人は紺碧の空の下を駆け抜ける。

仲間がどんどん落とされていく。
『マリオ０５ダウンッ！』
『畜生・・・畜生・・・！』
『ブレイク、ブレイク!!』
『ＳＨＩＴ！』
『ＦＡＬＣＯＮ０３、Ｄｏｗｎ！』
『Ｂｒｅａｋ！Ｂｒｅａｋ！』
無線から、自衛隊と米軍の悲鳴のような報告が嵐のように入ってい来る。
中には、後悔を零す者、悪態を吐く者など、様々いた。
すぐ近くで、米軍のＦ―１６が落ちる。
「くそっ・・・！」
その光景に、狩野は舌打ちするも、それで状況が好転する訳もなく、ただ仲間がどんどん落とされていくだけ。
どれほどミサイルを撃とうと、奴らの発するＥＰＣＭによって、全て自爆させられ、かといって接近して機関砲で落とそうとしても、近くに接近するだけで五感が狂わせる。
中国にいる恋人を殺され、その仇さえも討てない。これほどまでに悔しい事があるだろうか。

「くそがっ・・・!?」
ロックオンアラート。
後ろを振り返れば、そこにはザイが一機、後ろについていた。
慌ててブレイクしようと必死に機体を動かすが、それでザイの機動から逃れる事なんて出来ず、成す術もなしに接近されていく。
（俺は・・・こんな所で・・・・!!）
もう、完全に機関砲の射程に入った狩野のイーグルに向かって、ザイが、その機関砲を放とうとした、その時――――
『ＦＯＸ２ッ!!』
聞き覚えのある声が無線から聞こえたのと同時に、背後のザイが、突如として爆発四散していった。
「な・・・」
そして、その直後、狩野のイーグルの横を、エメラルドグリーンの光を纏った機体が通過していった――――
「敵機撃墜（スプラッシュ・ワン）」

背後のファントムがそう呟く。
「おっし、このままガンガン落としてくぜェ!!」
「その前に少し状況を・・・ってきゃぁぁぁ?!」
突然やってきた衝撃に悲鳴をあげ、恭平は機体を急降下させる。
そして、眼下にいたザイ二機を、その二機がすれ違う瞬間を狙って機関砲――――ファントムの固定兵装である『Ｍ６１Ａ１　２０㎜バルカン砲』を叩き込んだ。
そのまま、その二機のザイは墜落していき、一方のファントムⅡはすぐさま態勢を立て直して次の敵へと向かっていく。
「ど、どうやって一撃で・・・・!?」
「ん?すれ違う瞬間を狙ったっていうのなら簡単かもしれないけど、まあ胴体のどこかに弾丸たたきこめば奴らの動力部分を攻撃出来るんじゃないかって思ってな」
「ですがすれ違う所で弾丸を叩き込むなんて、人間業じゃ・・・」
「安心しろ、これからもっと驚く事になるんだからな!」
スロットルを全開にして、恭平の駆るファントムは戦場を駆け抜ける。
水平線が二転、三転し、恭平は空を駆け抜ける。
前にザイが出てきたらすぐさま引き金を引いてバルカン砲を放つ。ロックオンしたらすぐさま空対空ミサイルを放つ。その管制をファントムに投げて、さらに次の敵へと

飛んでいく。
そして、その際の機動全てが、ファントムの想像を絶する程、激しく、洗練されたものだと驚愕する。
（な、なんて無茶苦茶な・・・）
明らかに通常のファントムでは壊れる急加速と急旋回。バレルロールで一瞬で敵の後ろにつく。わざとスロットルを最低にして落下しながら機関砲を撃って敵を撃ち落としたりと、やる事全てが常識を外れた行為ばかりだった。
そして、恭平はまさしく別の事で驚いていた。
（すげぇ・・・！）
イーグルの時は、その機動をするだけで壊れていくだけだったのに、このドーター化されたファントムは、恭平の操縦に見事に耐え切っていた。
まるで、恭平の為に作られているかのように
「すげえ・・・すげえよファントム！想像以上だ！やっぱお前は最高だよ!!」
「それ、今言いますか・・・!?一尉！後ろからミサイルが！」
気付けばロックオンされて、かつミサイルが迫って生きていた。
この距離では、フレアもチャフも間に合わない――――
（油断した――――）

「問題無いッ!!」
思わず絶望しかけたファントムの不安をばっさりと断ち切るかのように恭平は言ってのけた。
「一体何を言って・・・!?」
何かを言いかけた直後、突然、水平線が回転した。
恭平がファントムⅡを傾けたのだ。果たしてこの行為に意味はあったのか――――
キャノピーの横を、ミサイルが通過した。
「・・・・は?」
その通過したザイのミサイルは、そのまま目の前にいた仲間のザイにぶつかって爆発、墜落させる。
ファントムは、一体何が起きたのかわからなかった。
一体、何故、ミサイルは、機体を素通りして、目の前の、ザイを、落としたのか。
「ようは直撃しなけりゃいいんだろ?だったら僅かばかり横にずれて機体を回転させて翼の上を滑らせれば良い。まあ、言って簡単な事じゃないけど」
「当たり前ですッ!!!」
ファントムは理解した。このパイロットには、もはや航空力学や常識は通用しないと。

「ふ、ふふふ・・・」
「ふぁ、ファントム?·どうした?」
突然、妖しく笑い始めるファントム。
「ふふ・・・いえ、私はどうやら、とんでもない常識破りのパイロットを乗せてしまったようです・・・・なるほど、伊達にイーグルブレイカーと呼ばれている訳ではないようですね・・・」
「え、えーっと・・・?」
バックミラーに映るファントムの顔は、これまでにないほど笑っていた。
「ええ、ええ。やっと私も心の準備が整いました・・・・一尉、いえ、恭平さん」
「な、なんだ?」
「――ファントム(わたし)を乗りこなしてください。壊れるまで」
それはまるで、悪魔の囁きのような言葉だった。
だが、しかし、それは、確かに恭平の最後の壁をぶっ壊すに至ってしまった。
「後悔するなよファントム――Ａｒｅ　ｙｏｕ　ｒｅａｄｙ!?」
「ええ、絶対に後悔しませんよ、恭平さん――ＹＥＳ!!」
「ＯＫ、ＨＥＲＥ　ＷＥ　ＧＯ!!」
そこからは、まさしく蹂躙という言葉に相応しい展開となった。

緑色の閃光が戦場を駆け抜け、あり得ない機動で翻弄し、次々にザイを落としていく。
『Ｈｏ・・・(すげぇ)』
『Ｉｔ　ｉｓ　ｍｏｎｓｔｅｒ？（バケモンかよ)』
『なんて機動だよ・・・・!?』
『こんな戦い・・・一生に一度しかお目にかかれねえぞ・・・』
緑色の閃光が駆け抜けるその様は、その場にいた者たちの目を奪い、そして魅了した。
まるで亡霊に誘われるかのように、激しく、苛烈に、そして鮮やかなその光景は、確かに素晴らしかった。
「恭平・・・」
そして、その機動を知っている狩野は、その光景を生み出している者の名を呼んだ。

蒼穹を駆ける鋼鉄の亡霊が、空に浮かぶガラス細工共をどんどん駆逐していく。
しかし、それでも問題があった。
「このままでは後ろに控えているザイを倒せなくなります」
「じゃあ無視するかコイツら!?」

「いくらザイでも、中核を潰されれば撤退せざるを得ないでしょう」
「それもそうだな・・・よし」
　もう武装もそこまで多くはない。ならば、すぐにでも向かうべきだ。
「こちらＦＡＲＢＩＥ０１、今から後方に控えている敵本体を叩きに行く！それまでコイツらを抑えててくれ！」
『こちらマリオ０１、ＦＡＲＢＩＥ０１、ここまで減らしてくれて感謝する。気にせず奥の敵に集中してくれ！』
　聞き覚えのある声による返事を聞き入れ、恭平たちはすぐさま戦場を抜けて奥へと進む。
　しばし真っ直ぐ飛んだ後、それは見えた。
「でけぇ・・・・」
　それは、余りにも大きく、要塞と呼んでもおかしくない程の巨大さを誇っていた。
　どうやって倒そうかと考えていた時、敵がこちらに気付いたのか、動き出した。
　上部の平面から、何かが出っ張った。その何かとは・・・
「ミサイルポッド!?」
　ファントムの悲鳴のような叫びがあがった直後、そのミサイルポッドからミサイルが全力発射される。

数えるのも億劫なほどの量だ。
「うおあ!?」
フルスロットルで回避行動に移り、全力で回避する。天地が目まぐるしく回転し、上へ下へと機体は踊る。
あまりにも無茶な機動なのに、その機体は悲鳴を上げず。ただ乗り手の操縦に身を委ねる。
「あっぶねえ・・・」
スロットル全開で全てのミサイルを間一髪で回避したが、それでも次がないとは言い切れない。
「いえ、ミサイルの追尾性能はそれほど高くはありません。問題なのは機銃の方です」
機銃がこちらを撃ち落そうと乱射してくる。それも四門。
ある程度距離を取れば撃ってくることはないが、おそらくミサイルを撃ったとしても撃ち落とされるのがオチだ。
なら、どうする?
あのミサイルの弾幕を避けるまではいい。しかし機銃も同時に避けることは難しい。
せめて、この機体のスピードがもっと高ければ、突破出来ないことはないが。
「恭平さん」

ふと、後ろのファントムが恭平に声をかける。
「どうした!?」
「今からこの機体のリミッターを解除します」
「は!?リミッターってなんだ!?」
「単純な話、フルスロットル以上の動力を発揮させます。レバーでは出せない最高速度を、私が自ら解除してこの機体の本来の性能を出します」
「出来んのかそんな事!?」
「通常の機体は内臓されているコンピュータによって制御されています。ドーターの場合はアニマ、つまり私です。本来は機体を安定させる為に必要な部品も、アニマであるなら自在に操作できます。本当ならこんな事すればエンジンにかなりの負荷をかけてしまいますし、私でも操縦不可能になります」
「大丈夫なのかそれ!?」
「あら、私に八回も勝った貴方に、そんな暴れ馬を操縦できない事なんてないでしょう？」
挑戦的な誘い。普通なら、そんなバカげた博打には乗らないだろう。だが、恭平は、そのスリル満点な誘いに、自ら乗る。
「いいぜ・・・やれ!ファントム!!」

「ふふ、貴方ならそう言ってくれると思いました」
妖艶な笑い声が背後から聞こえる。
機体が、もう一度ボックスのようなザイに向いた時、それと同時に、ファントムのエメラルドグリーンの髪も、さらに、強く、眩く輝きだす。
「エンジンリミッター解除。スロットル上昇まで、3、2、1――」
次の瞬間、おおよそ、普通の戦闘機ではありえない加速をして、ファントムは一気に巨大爆撃機に接近していく。
敵を察知したザイは、すぐさまミサイルポッドを掃射する。数えるのも億劫なほどのミサイルが、一気にファントムへと殺到する。
しかし、ファントムはそれを意に介さず、ミサイルを、残像が見えるほどの速度でマニューバして、躱していく。掠りもせず、当たりもせず、機体を回転させアクロバットし、ザイでも不可能な機動で全てをミサイルを躱していく。その合間に放たれる機関砲の弾丸さえも、まるで弾丸が避けていくかのように当たらない。
もはや、ファントムⅡの――恭平とファントムの進撃を止める事は叶わない。
機動が加速を生み、絶妙なタイミングによって行われる減速と加速が全てのミサイルを躱していく。

その操作を、恭平はすさまじい勢いでこなしていく。
不思議と、感覚は冴えていた。
不安を全て置いて行ってしまったかのように、操縦に躊躇いは無く、恐怖なんて初めからなかったかのように、襲い掛かるミサイルにビビる事も無く、ただ己の力を信じて、恭平はただ、ファントムを操縦する。
否、信じているのは、決して自分の操縦技術だけじゃない。
対ザイ戦の為に作り出され、今日という日の為に、辛いシミュレーションを乗り越えて、徹底的に鍛え上げられた、この機体（ファントム）と後ろに座る少女（ファントム）を信じているのだ。
だから、遠慮なく操縦できる。エンジンの悲鳴なんて知った事ではない。この機体の性能をフルに生かさずして、何が操縦者か、何が戦闘機パイロットか、何がファントムのパートナーか!!!
だから遠慮なんてしない。仮令、この機体に限界が来ても、この機体なら、その限界を超えてくれると信じている。
だから、恭平の思考は加速する。
全てをかけて、恭平は、今、ファントムを乗りこなす。

――――恭平さん。

何かに呼ばれて一気に意識が覚醒する。
気付けば、自分は空を飛んでいた。海を下に、空を上に、飛んでいた。そして、体中を叩きつける風が、今まで経験した事のないほど心地が良い。
――ああ、やはり、この空は自由だ。
そう思えるほど素晴らしく、ずっとこのままでいたいと思えるほどだった。
だけど、これは、この景色は、自分だけのものじゃない。
これは、ファントムがいつも見ていた景色だ。
八代通が言っていた。
ＦＮＩによってアニマは神経をドーターとつなげる。その時の操作は、人間が手足を動かすのと同じだと、そう言っていた。
そして、ドーターが受ける全ての刺激、感覚さえも、アニマはダイレクトに受け取ると。
そうこれは、ファントムが見て、感じて、自身の力で飛んでいる、彼女だけの景色。
それを、自分も体感している――――一種のトランス状態のように、自分は、どういう訳か、彼女と感覚を繋いでいるのだろう。
ふと、ファントムが、目の前に立っていた。

――――私を、乗りこなしてください。壊れるまで。

それは、おおよそ彼女の倫理観からは外れている事だ。だけど、不思議と彼女はそれを疑問に思わず、まるで、彼にその身をゆだねてもいいと、そう言っているかのようだった。

だけど、彼女は彼の前に、その手を差し出している。それを手に取れば、彼はもう、本当に止まらないだろう。そして、彼女はその覚悟が出来ているという事なのだろう。

ならば、応えよう。

この、泉守恭平。帝国海軍だった祖父の名にかけて、今、この時、鋼鉄の亡霊を乗りこなして見せよう。

そして、恭平はファントムの手を取った。

――――ああ、飛ぼうぜ。一緒に。

返事を聞く前に、機体のエンジンが咆えた。

周囲から見たファントムの機体は、エメラルドグリーンの燐光をまき散らして輝いていた。

まるで、悠久の時の中で出会えた人に、喜びを感じるかのように。

7・・・6・・・5・・・

巨大なザイの上を駆け抜ける。しかし、ミサイルどころか機関砲を撃たない。

4・・・3・・・2・・・

故障か？こんな時に？誰もがそう思う。だが、違う。

1・・・今ッ!!

通過するぎりぎりの所で、まるで全速力で走るジェットスキーがUターンするかのように旋回した。

そして、機関砲を、咆哮と共に放った。

それと同時に、ザイの上部分からファントムに向けてミサイルポッドが飛び出しそこへファントムの機関砲の弾丸が直撃し、爆発する。

それは連鎖的に爆発を起こし、その閃光はどんどん広がっていく。その上を、狂暴な咆哮を上げる機関砲と、アフターバーナーを全開にして駆け抜ける、翠緑の鋼鉄の亡霊（エメラルドフルメタルゴースト）。

爆発が連鎖的に起きる中で、突如として爆撃型のザイの長方形の体の下から半分が離れる。

どうやら、上部がやられた事で、急いで下の方も外したのだろう。そのまま、全速力

で前に進もうとするザイであったが、その眼前に、あの翠緑の亡霊がこちらに銃口を向けて現れた。

――――ＦＯＸ２ッ!!!

同時に叫び、残りのミサイル全てを、その下部分に叩き込んだ。そして、ダメ押しで機銃の全ての弾丸を吐き出しまくる。

咆哮をあげ、全ての弾丸を撃ち尽くすまで、その引き金を引き絞り続けて、そして、目の前でガラス細工が爆発と共に砕け散っていく様を、その双眸で見届けた。

赤火と黒煙を巻き上げ、下部分も落ちていく。そして、中の爆薬に引火したのか、大きな爆発音を立てて、ガラス細工のデカブツは、消し飛んだ。

その様子は、遠くで見ていた自衛隊と米軍にも見えていて、そして、敵が撤退していく様を見て、彼らは――――これまでにないほどの大歓声を上げた。

誰もが、勝利に喜び、泣き声交じりの歓喜を震わせて、叫んでいた。

その最中で、狩野は、ザイが巻き上げた黒煙の中を、翠緑の流星が空を駆け上っていくのを見た。

雲の上へと駆け上がった所で、不思議な感覚は、全て元に戻り、まるで叩きつけられ

るように視界が元に戻った。
「ぷっはぁ!?」
そしてそれまで止めていた息を、思い出したかのように再開する。
「ぜはーっ!ぜはーっ!・・・し、死ぬかと思った!?」
まるで精神が融合していたかのような錯覚に酔いつつも、恭平はどうにか、ある方向にある景色を確認して、ファントムに声をかけた。
「ファントム」
「ん?なんですか・・・?」
「見てみろよ」
言われるがままに、ファントムも、恭平が見る先を見た。
そこには、今、沈んでいく夕日に、水平線が重なり、その光を海が反射して、煌めくような景色がそこに広がっていた。
「わぁ・・・」
その光景に、思わずファントムは魅入ってしまう。
なんと儚く、美しい景色だろうか。
こんな景色を、ファントムは見た事がなかった。
シミュレーターでも、こんな景色を見る事はなかった。現実で、こういう時だからこ

そ見れる、奇跡の一時なのだ。
　しばらく魅入っていた所で、恭平が声をかけた。
「よく、この天気でこの時間はこうして海を見てるんだ。じいちゃんが見たっていう、海の奇跡って奴だよ」
「貴方のおじい様が？」
「おう。俺も、こうして初めて見た時はしばらく魅入ってて隊長に思いっきり怒られたから、いい思い出だぜ」
　そう言って笑う恭平。
　その彼に呆れつつも、ファントムは、もう一度その景色を見た。
　確かに、綺麗だ。
　でも、きっと長くは続かない。
　夕日は沈む。雲も動く。この、最高のシチュエーションの時でしか、見れない景色だ。
だから、もうすぐ、この時間も終わってしまう。
　それが、とても名残惜しくなってしまう。
　しかし、その終わりの時は意外と早くにやってきた。
『ＦＡＲＢＩＥ０１！応答せよ！ＦＡＲＢＩＥ０１！』
　聞き覚えのある声。八代通だ。

「こちらＦＡＲＢＩＥ０１、なんか用ですか？」
『なんかじゃない！お前ら一体何をした!?いきなり常識を超えた動きをしやがって・・・』
珍しく慌てている様子の八代通に思わず二人して笑ってしまう。
「さて、小うるさいお父様が急かしている事だし、帰りますか」
「そうですね、恭平さん」
「あ、そういえばお前、呼び方変わったな」
ふと指摘されて、しばし何のことかと首を傾げていたファントムだったが、気付いたのか少し顔を赤らめる。
「な、何か不満でも・・・？」
「いいや、むしろずっとその方が心地いいね」
「そ、そうですか・・・」
「ん？どうした？なんか歯切れ悪いが・・・」
「気にしないでください！」
「お、おう・・・」
ファントムに怒鳴られ、それっきり追及するのをやめる恭平。
一方のファントムは、口に手を当てて、やがて少し微笑んで、恭平に聞こえないように呟いた。

「お疲れ様です、恭平さん」

そのまま、彼らは、三沢基地へと帰還した――――

ファントム・イズ・マイバディ

あの襲撃から、早一週間が経った――――

あの日以来、ファントムはあのような、情報を噂として流して敵対関係を作るなんて事はしなくなった。

何故かと聞いたら、ファントムは不敵に笑って『貴方が守ってくれるんでしょう？』と自身ありげに言ってきたので、その時は引きつった顔が戻らなかった。

だが何はともあれ、これで三沢基地にはいつも通りの日常が戻った。

幸い、ザイはあれ以上の攻撃はしてこず、比較的穏やかな日常が続いた。

そう――――

「穏やか過ぎんだよな」

食堂の机に突っ伏して、そうぼやく恭平。

「あら、良い事じゃありませんか？平和が一番ですよ」

「前までこの基地に混沌を呼び出そうとしていた小悪魔の発言とは思えねえ言葉だなオイ」

「事実ですので」
　目の前では、普通に食事をとる可愛らしい日本人形のような少女、ファントムがすまし顔でそう言ってのける。
「そういえば貴方は聞きましたか？」
「何を？」
「新しく、ドーターが完成したそうですよ？」
「お、マジか。どこの国だ？」
「ふふ、相変わらず察しが良いですね」
　やや目を輝かせる恭平に微笑むファントム。
「アメリカですよ」
「おお！ありとあらゆる技術の最先端！」
「ずいぶんと嬉しそうですね」
　さらなる興奮を見せる恭平に、ファントムは呆れ気味に返す。
「どんな機体なんだよ？」
「確か・・・Ｆ／Ａ―１８Ｆでしたでしょうか？」
「強力な雀蜂（スーパーホーネット）か」
　何やらわくわくしている様子の恭平。

「・・・そんなに他のアニマと会いたいですか？」
「ん？ああ。だってお前以外のアニマだぜ？どんな奴がいるのか気になるじゃねえか」
「ふーん・・・」
何故かストローの入ったコップの水をぶくぶくとさせるファントム。
そんなファントムの様子に首を傾げる恭平だったが、何かを察したのかにんまりとして――――
「他のアニマに会ったからと言って、ソイツに浮気する気はないぞ？」
「ぶふぅ!?」
からかうような口調に、ファントムは思わず吹き出す。
「なななな何言ってるんですか貴方はァ!?」
「え？まさか図星？」
顔を真っ赤にして慌てる様子に、恭平はまるで面食らったかのような表情になる。
そして、その時に漏れた言葉にファントムは一層顔を赤くして、
「～～～～ッ!!!」
そのまま椅子を蹴り飛ばす勢いで立ち上がり、水を汲みに行ったのかずかずかと歩いて行ってしまう。
「・・・・」

「ずいぶんと手玉にしてきたじゃないか」
「ん？ああ、古田さん」
　そこへ、古田が声をかける。
「冗談のつもりで言ったのに、なんで本気してんだアイツ？」
「ふふ、無自覚な奴ほど厄介な相手はいないよ？」
「ん？ああ、まあそれは弁えているつもりだが・・・・んん？」
　何故か首を傾げている恭平。
　なんというか、彼も彼女も面倒くさい性格の持ち主である。
「あとでファントムちゃんに声をサンカクに来るように伝えてくれ。エンジンチェックだとか、そのほかの機体チェックをしてほしいからね」
「ああ、分かった」
「それじゃ」
　古田は、その手にカツサンドの入った袋をひっさげて去っていく。
　そんな彼女を見送った所で、ファントムが改めて水を入れて戻ってきた。
「おかえり」
「ただいまです」
　まだ拗ねているのか、ふくれっつらで食事に戻るファントム。

「・・・あ、そういえば八代通に聞いたんだけどよ。また新しいドーターが出来そうなんだって？」
「んん？」
　ギロリ、と睨まれる。
「え、あーっと・・・ど、どんな性能なのかなー」
「んん？」
「ど、どんなアニマが生まれるんだろうなぁ？」
「んんん？」
「・・・・そいつどこに配属されるんだろうね」
「・・・・・」
「・・・・・」
「・・・・・」
「・・・・・俺が悪かったですごめんなさいですので何かしゃべってください」
　恭平が折れた。
「・・・・はあ、仕方がないですね」
　そんな恭平の様子にファントムは呆れ気味に溜息をついて、離してくれる。
「Ｆ―２Ａという機体です」

「おお、平和の零戦（バイバーゼロ）か」
「所属は那覇の方になりますので、ここことは正反対の所に配属されますね」
「へえ・・・いつか会えるといいな。親睦もかねてさ」
「・・・・そうですか」
　やはり拗ねている。
　ここまで拗ねられると流石に何かを切り出す気になれない。
　だが、そこで意外な事にファントムの方から話し出される。
「そういえば、先の戦いで、気付いたことがあります」
「ん？何に？」
「パイロット泉守恭平、そして火器／管制ファントム・・・つまり私。良い組み合わせだと思いませんか？貴方のブレイカーとしての機動で相手の攻撃を躱し、範囲内であれば、味方の位置に関係なく、ミサイルを当てられる・・・」
「まあな。ＨｉＭＡＴを殺さずに一撃必中の攻撃を叩き込めるとなると、まさしく最強だな」
「ええ、まさしく、人間が操縦し、アニマがサポートする。これほど理想的な運用方法はありません。発想の転換ともいえるでしょう」
「・・・・ん？発想の転換？」

「ふふ、どうやら気付いたようですね」
いつもの妖美な笑みを浮かべるファントム。
「普通は。誰もがそう思うでしょう。なぜならドーターは、本来ならアニマのみで操縦する事だけを目的として開発された機体であり、本来なら人間を乗せるなんて事を想定していなかった・・・そこで現れたのが貴方です。ザイに対抗できる、いえ、それ以上の飛行技術を持ち、９Ｇ以上の重圧に耐えうる体を持った、貴方という存在が」
ファントムは、手を組んで、それを口元に当てる。
「普通、核爆弾のスイッチを、暴走する危険性のあるＡＩに持たせようと思いますか？私なら絶対にしないでしょう。ドーターとアニマも同じです。ザイのコアは未だブラックボックス。そんなまだ何も分からない存在をそのまま飛ばしますか？そんな危険性を孕んでいるくらいなら、操縦は人間にまかせてアニマはサポートに回すべきです」
「つまりは、本当の意味で俺たちは理想的って事か。人間が操る兵器の形として、ずっとずっと理想的だ、と」
「その通りです。ふふ、まあ、私自身も、これが答えだとは思っていないんですがね」
ただ、とファントムは続けた。
「話は変わりますが、一般的には私たちには生前の記憶はないとされています。ザイだった頃の記憶は、機械学習によって基本的知識を詰め込まれましたから、おそらく思

い出せない程奥深くに押し込められてしまったのでしょう。ですが、一つだけ、覚えている事があるんです」
「へえ? 何を?」
　恭平は理由のない興味を惹かれる。
「・・・・この星を守らなければ」
「守らなければ?」
「ええ。それだけ。たった、それだけの感情が、まだ暗い密閉空間、保護液が充満したカプセルの中で培養されていた時に私の中にあった、唯一の衝動です。さて、私は・・・ザイは一体、何から星を守ろうとしているのでしょうね?」
「ふむ・・・・」
　その、何気ない質問に、恭平は、しばし考えて・・・・
「人間じゃね?」
　そう、迷いなく言ってのけた。
「・・・・随分と、あっさりしてますね」
「なんというか、それ聞いてアイツらが人類を攻撃する理由が分かった気がする。人間は、この世界で食物連鎖の頂点に立ち、なおかつ唯一文明を築ける種族だ。そんな種族が、地球温暖化や砂漠化の原因を作っている・・・・ただなぁ」

「一体、誰がザイを作ったのか、という事ですよね？」
「そう、そこなんだよ。それが一切分からないんだよな・・・」
うーん、と悩む恭平。
その様子に、ファントムはしばし呆気にとられ、やがて噴き出して笑う。
「・・・なんだよ？」
「いえ、貴方も悩む時あるんですね」
「ああ、悩むよ悩む。俺も人間だからな。それなりに苦悩する事もあるんですよ」
あっけらかんとした性格。
本当に、つかみどころのない男だ。
「本当、貴方が私の監視役で良かったです」
ファントムは、小さく、そう呟いた。

基地内を、目的もなく、ファントムと共に歩いていると、ふとファントムがまた喋り出した。

「そういえば恭平さん。先ほどの人間とアニマのあるべき姿についてですが」
「ん？ああ。それがどうかしたのか？」
「実は、先日の戦闘の事を、ロシアとアメリカが嗅ぎつけたみたいでして」
「あー、そういやアメリカ軍にはめっちゃ見られてたな」
「それで、先ほどの議論の事について、両者とも気付いていたようでして」
「・・・・ん？ちょっとまて、気付いたって事はまさか」
「ええ、ロシアもロシアで、アメリカもアメリカで、私たちと同じ試みをしているようですよ？」
「ちょちょちょちょっと待て。おいファントム。まさかと思うが、俺以外にも、そういった壊し屋的なパイロットがいたりするのか？」
「そのようですよ？私も詳しくは知りませんが、ロシアとアメリカに一人づつ、貴方と同じ体質の人間がいるそうですよ」
「マジかよ!?俺以外にもいたのかよ!?俺ひそかに自慢にしてたんだぞこの操縦技術!!俺以外にいるなんて聞いてねえぞ!!ショックだよ!?俺何気にショックなんだけどちくしょオ!!」
　ファントムから衝撃的事実を聞いて喚く恭平。
「安心してください」

だが、そんな恭平にファントムがささやく。
「それでも最強なのは私たちです」
そう、ささやかに自慢しだすファントム。
「お、おう・・・」
ふと、哨戒を終えたのか、数機のイーグルが滑走路に着地するのを見つける。
「・・・・なあ、ファントム」
「なんですか?」
「お前は、これからも俺のバディで居続けてくれるか?」
「・・・突然なんですか?そんな事言って」
「いや、なんか他にも俺みたいなやつがいるなんて驚いてよ・・・それで、ちょっと想像したんだ。お前が、他の奴についていくって所を」
「あら、貴方でもそんな事を言うんですね」
「まあな・・・なんか情けないな。こんな事で弱気になるなんて」
「全くです」
ファントムが、恭平の前に立つ。
「そんな事言わなくても、私のバディは貴方だけです。私にとって、貴方はこれから先、いくら探しても見つからない最高最強のパイロットです。ですから、私は決しては、貴

方から離れません。ですから安心してください」
「ファントム・・・・」
「それに、貴方にはこれから先、たくさんの事を教えてもらわなければなりません。他にも言った事があるんでしょう？三沢以外に？」
　こてんと首を傾けて、上目遣いで聞いてくる。
　その様子に、恭平は肩の荷が下りたような感覚になる。
「はっ、そうだなぁ。基地のある場所なら大体案内できるぜ。その土地特有の楽しみ方って奴も、その街の名物も、たっくさん食わせてやるよ」
「ただし、私を楽しませるんです。お金は全て貴方が払ってくださいよ？」
「上等だこのじゃじゃ馬娘。お前が心の底から楽しめるようなデートコースを披露してやるよ」
「あら楽しみ。せいぜい、退屈させないでくださいね」
　恭平は、改めて、清々しい程青い空を見上げた。

　どれほど、道のりが遠のくとも、きっと、あの空を取り戻せる日が来るだろう。
　自分が諦めない限り、自由を追い求め続ける限り、必ず、その日はやってくるだろう。
　この少女が、隣にいてくれるなら、絶対に、その日は来る。

何故なら、俺は――

『運命を砕く者（イーグルブレイカー）』なのだから。

運命は飛翔する。

翠緑の亡霊を駆り、天を駆け抜ける自由を追い求める男、泉守恭平。

緋色の有翼獅子と飛び、空を取り戻す為に戦う少年、鳴谷慧。

この双方が邂逅するのは、まだ先の話。されど必ず二人は邂逅する。

無限の繰り返しに、終止符を打つ物語が、今、始まる――――

チャンス・ミーティング

いつかの日、祖父が言っていた。

『鳥は自由だ』と。

なら何故自由なのか。そう聞けば、祖父は笑ってこう言った。

『翼があるからさ』

昔、海兵時代に鍛えられたままの肉体でごつごつとした手で頭をわしゃわしゃと撫で回され、その後に祖父はこう言った。

『お前もこの空を飛んでみろ。きっと新しい世界が広がるはずだ』

そして、初めて空を飛んで、祖父の言葉は本当なのだと思い知った。

「・・・・ん・・・さん・・・・恭平さん」

「んん・・・?」

だれかに声をかけられ、目を覚ます。隣を見れば、そこには、黒髪のおかっぱ髪の少女がこちらを見上げていた。

「そろそろ小松に着きます。準備をしてください」
「ん?ああ、そうだったな」
それで恭平は、今自分が置かれている状況を再確認した。
「そういや、小松に転属するんだったな」

事の発端はほんの数日前。
「異動・・・ですか」
「ああ。そうだ」
三沢基地の司令官からそう告げられ、生返事をする恭平。
ザイの襲撃から二年、恭平はファントムと共に大陸からやってくるザイの襲撃の無い日常を過ごしていた。訓練は当たり前の事、スクランブル待機や陸自基地での訓練などをこなして行っていた。
そんな中で、恭平は一人、司令官の執務室に呼び出されていた。
「それはまた何故に」
「先日、小松で空襲があっただろ?その時の被害から、上で一つの結論が出てな。アニマを一か所に集合させて、独立した部隊を作るってな。それで、お前にはその部隊の部隊

長を頼みたい」
「はあ・・・？」
隊長？俺が？
「御冗談を」
「冗談じゃない」
「分かってたよ畜生」
確かに、経験で部隊での行動の経験のある恭平なら、何の問題もないだろう。
ただ、隊長の経験は一度もない。しかも、そんな急造のチームで、果たしてザイに勝てるのだろうか。
その上、『終末派』の動向も気になる。
「とにかく、すでに上層部で話がついている。嫌でも行かせるからな」
「ええ・・・・」

そんなこんなで二人は小松にやってきていた。
そして現在、恭平はトイレに行っていて、ファントムは一人待ちぼうけを喰らっていた。

「もう・・・」
ふくれっ面で恭平を待つファントム。
あまりにも長いのだ。だからこの様な事になっているのだ。
今のファントムの髪は、黒くなっている。目も琥珀から黒に近い色合いになっている。
その理由は目立たないように薬を使って髪の色などを染めているからだ。
あまり目立つのを好まない性格故に、このような処置をとっているのだが。
そして、そんなファントムに近寄る男たちの姿が。
「ちょっとそこのお嬢さん」
「お兄さんたちを遊ばない?」
ちらり、と彼らを一瞥する。
(面倒な)
数は二人・・・かと思えば、近くに何人が控えている。どうやら、相当たちの悪いナンパのようだ。
「い、いえ、お構いなく」
とりあえずここは相手を刺激しないようにか弱い少女を演じる。
トラブルは避けたいのだ。少し屈辱的ではあっても上手く対処しなければ。

「そう言うなって」
　しかし、長身の男がファントムの肩に腕を回す。
「君、見ない顔だよね？お困りだったようだったから、少し道案内してあげようと思ってね」
「大丈夫です・・・あの、連れの人がいるので・・・」
「いいっていいって、その連れの奴には、後で言っておくから」
（こいつら・・・）
　なんと愚かな。おそらくこの男たちは自分たちが駅に降りた時から狙っていたのだ。
　そして、自分の傍に恭平がいた事も知っている。確かに恭平の服装はあまり目立たないようなジャケットと皮ズボン姿だ。若干ぶかぶかしているからか、彼の体格が分からなかったのだろう。
「ほら、行こうぜ？」
「や、やめてください！」
　腕を引っ張られる。
　これ以上は我慢できない。
　そう思い、掴まれていない方の手を利用して、男を投げ飛ばそうとした。その時――

「ああ、ここにいたのか」
予想外な方向から声が聞こえ、ナンパしてきた男ともどもそちらを見た。
そこには、見た目はファントムより若干年上な感じの少年が、こちらに片手をあげてやってきていた。
「着いてたんなら連絡ぐらいよこせよな」
瞬次にファントムは理解する。この少年は、自分を助けようとしてくれているのだ。
しかし、相手が悪すぎる。
「ちょっとごめんねえぼくぅ」
「この子にはちょぉっと先に俺たちと楽しい事する予定なんだ。だから先に帰っててくれないかなぁ?家にはあとで送ってくからさ」
まるで威圧するように、もう一人の、やや体格が丸々している男がその少年に詰め寄る。
このまま、少年が逃げ帰ってくれたなら、どれほど良かった事か。
「ど、どこかって、あんたらソイツをどこに連れていく気だよ?」
「秘密の場所さ。この子も俺たちもたくさん楽しめる良い場所だよ」
「・・・すみませんが、正直に言って貴方たちは信用できない。彼女は連れていきます」
「チッ、ガキがいきがってんじゃねえよ」

とうとう臨戦態勢に入ってしまうチンピラたち。
一方の少年は喧嘩慣れしていないのかたじろぐ。
（仕方ありませんね・・・あまり目立ちたくはありませんが・・・）
周囲にいる仲間の事にも気を配りつつ、目の前の男を投げ飛ばす準備をする。
その時であった。
「おいお前ら」
背後から、聞き知った声が聞こえた。
「子供相手に、熱くなり過ぎだ」
見れば、そこには明らかにキレている様子の恭平が立っていた。
「貴方は・・・」
「もう、遅いですよ」
「へ？知り合い？」
「悪いな、遅れた」
恭平がファントムの隣に立ち、そして男たちを睨みつける。
「悪いな。アンタらのいう良い所に、こいつは連れていけない」
「ハッ、良い男がいっちょ前に正義の味方きどりかぁ？そういう夢はガキの頃で終わりにしとけっての」

「俺を正義の味方って言うって事は、自分たちが悪い事をしているって自覚はあるのか」
「ああ？」
「いいか、お前ら。こんなつまらない事に時間を割くんじゃねえよ。いくらモテないからと言って、こんな事してれば余計にモテねえぞ？」
　恭平のその言い分に、男たちの額に青筋が走る。
「テメエ、いっちょ前に説教かましてくれるじゃねえか・・・」
「たかがどこにでもいる雑魚の分際で、俺たちの前に立ちはだかってんじゃねえよ！お前らァ!!」
　片方の男が合図を出すと、周囲に控えていた仲間たちが集まってくる。
　その数、十二人。
「おーおーおー、こんな大人数で」
「これは警告。さっさとそのお嬢さん渡せば、怪我はしねえぜ」
「こりゃあダメだな。こいつらは大人になれなかった子供だぜ、全く」
　やれやれと諦めた恭平は、しばし焦った様子の少年に目を向けた。
「おい、そこの少年！」
「は、はい！」
「すまないな。うちの連れかばってくれたばかりにこんな事に巻き込んじまって」

「い、いえ!どっちかっていうと俺の方からトラブルに巻き込まれにいったっていうか・・・」
「その心意気だけでも十分だ。悪いが、こいつら軽くのすから、それまでの間、こいつを任せられないか?」
　そう言って、ファントムの肩を持つ。
「え、分かりました・・・」
「ならよし。ファントム」
「分かりました。だけど、怪我だけはしないでください」
「分かってるって。お前のパートナーを信じろ」
　それを最後に、ファントムは少年の元へ向かう。
「いっちょ前にかっこつけてくれるじゃねえかニイチャン」
　ガラの悪い男たちが、恭平に詰め寄る。
「だけどこの人数、ただじゃすまないよぉ?」
「それは、お前たちの方だろ」
　ゆらぁり、と恭平が振り向く。
「軍人を相手にして・・・ただで済むと思うなよ」

少年、『鳴谷慧（なるたにけい）』は、目の前の光景に茫然としていた。

「ふー、はい。終わり」

ナンパされている少女を助けるだけのつもりが、相手は逆に自分を追い返そうとしてきて、しかしやはりほうっておけないから反発した結果、喧嘩に発展しそうになって、流石に戸惑ったその時、少女の連れであろう男が割って入ってきて、そしてそこから大人数での大喧嘩に発展したのだが・・・・

「す、すげぇ・・・」

近くの壁に叩きつけられてきっちりと地面に並べられているナンパ男たちの姿があった。

あまりにも呆気なく終わったのだが、どこぞの蛇男みたく、連続で男たちを薙げたりして地面に叩きつけていったのだ。

その手際のよさは、まさにプロとも言うべき程だった。

そして、隣に立つ黒髪の少女は、まるで分かっていたかのようにぱちぱちと拍手を送っていた。

「流石です」
「おうそりゃどうも」
少女の誉め言葉に軽く返しつつ、男は慧の方を見た。
「君」
「あ、はい」
「改めて、連れを助けてありがとうな。いつか礼をするよ」
「ああ、いえ。結局、自分は何も出来なくて・・・」
「いや、実際あの場でこいつらを引き留めていてくれなかったら間に合わなかったかもしれないからな。ありがとうな」
「ああいえ・・・」
「と、助けてもらったうえで悪いんだが。小松空港にはどういったらいいんだ?」
「え?小松空港ですか?」
「ああ、実はそこに用があって・・・」
「それなら、五番乗り場からバスが出ていたと思いますよ。航空線って奴です」
「航空線・・・それならロータリーの向こう側か」
男はしばしそちらに顔を向けていたが、すぐに視線を戻す。
「ありがとう。それさえわかれば問題なく行ける。いつかこの礼はするよ」

「いえ、お構いなく」
「まあ、明日すぐに会える事になると思うけどな」
「え・・・？」
　明日？何を言っているんだ？
「あの・・・」
「っと悪い。こっちの話だ。そろそろ暗くなる。帰った方がいいと思うぞ」
「そうですか・・・それじゃあ、俺はこれで」
　その言葉を最後に、慧はその二人組と別れた。
（明日すぐに会えるって、どういう事だ・・・？）
　それだけが心残りで、その答えは、明日分かる事となる。

「鳴谷慧さん、ですか・・・」
「なんというか・・・危なっかしいな」
　例の資料にあった、一般人の少年。
　自分たちとは違うアプローチで、ドーターに乗る少年。

「ブレイカーじゃないパイロットって所か・・・」
「では、私たちもそろそろ参りましょうか。少し、時間を無駄にしてしまいましたし」
「それもそうだな」
ファントムの提案に乗り、恭平は、五番バス停へ向かった。
「明日、改めて会おうぜ」
自転車に乗ってさっていく慧の姿を見送りながら、そう言葉を投げかけた。

そして、その翌日の事――――

家にいる幼馴染と多少のやり取りの後に、鳴谷慧は航空自衛隊小松基地にやってきていた。

いつものように入構届けに書き込みをしながら、隊員が内線を使ってでのやり取りを待っていると、

「今日はサンカクに来てくれだそうだ」

「サンカク？」

「第三格納庫だ」

何故だろうか？いつもは技本の事務所の筈なのに、今日はどうして。

そう疑問に思いつつ、以前、自らのパートナー、『ＪＡＳ―３９グリペン』に案内された、第三格納庫へと向かう。

ふと、扉から中に入った所で、いつもとは違う音が聞こえた。

排気音だ。レシプロ機のものではなく、最近聞き慣れてきた、ジェットエンジンの生み出す、唸り声が。

中に入れば、そこには一機の異様な戦闘機が鎮座していた。

エメラルドグリーンの装甲、低翼配置の主翼に逆Ｙの字型に構成された水平・垂直尾翼。そして、双発のエンジン付近の空気がゆらゆらと揺らめいており、それが熱の発生源を教えていた。

ややずんぐりむっくりした印象なのは、胴体の凹凸が乏しいせいか。
ただ、その異様なカラーリングを見ればわかる。
これはドーターだ。
ここにいる、ＪＡＳ―３９グリペン、そしてＦ―１５Ｊイーグルと同じ、オーバーテクノロジーによって生み出された改修機。
しかし、何故ここに？
「おう、来たか」
だがそこへ、白衣の巨漢がやってくる。
「悪いな、暑い中、冷房もきかない所で」
「いえ。あれってファントムですよね？」
機体の形状から、慧はそう推測する。
「うん？ああ、よく知っているな」
自衛隊のイーグルが配備される前の主力戦闘機。そして、アメリカが作ったベストセラー機であり、半世紀以上も前から活躍している、歴戦の戦闘機。
「正確にはファントムⅡだがな。それもＲＦ―４ＥＪ、戦術偵察機への改造型だ。下に増槽のようなものが見えるだろう？あれが偵察ポッドだ」
確かに燃料タンクにしてはあまりにもいかつい。

外装型で色々とモジュールを取り換えるタイプなのだろう。
ふと、そこでエンジンの排気音が途絶える。どうやら、エンジンテストが終わったようだ。
「行くぞ」
スタッフが電源ケーブルを外している所へ、八代通は歩き出し、慧もその後をついていく。
その最中で、キャノピーが駆動し、中から二人の影を見せる。
「あら」
そして、その姿に驚く。
「ごきげんよう、昨日はどうも」
「よっ、昨日ぶりだな」
それは、昨日、駅前でナンパされていた少女と、そのナンパしてきた男たちをまとめてのした男だった。
「なんだ？知り合いか？」
「昨日、道を教えていただきました」
「正確にはナンパされていた所を助けてもらってたんだよな」
「それは言わないでください」

男のからかいに顔を赤くしつつ、機体から降りる少女。
その髪は、昨日とは打って変わって鮮やかな翠緑だった。和人形のような顔立ちにそれはかなりの魅力を引き立てている。
「ご挨拶が遅れました。私はＲＦ―４ＥＪ―ＡＮＭファントムⅡと申します。どうぞ気軽にファントムとお呼びください」
「お、おう・・・」
ふと、ファントムの背後に男の方が飛び降りる。パイロットスーツを着込んでおり、外したヘルメットからは、それでも跳ねるくせっ毛のある黒髪が姿を見せる。
「泉守恭平一等空尉だ。よろしくな」
「よ、よろしくお願いします・・・」
しかし、そうなると理解できる。あの昨日の喧嘩で見せた強さ。なるほど軍人ならありえなくもない。
差し出された手を握り返し、その武骨さに改めて感服する。
ごつごつとした固い手は、かなりの訓練をしている事が分かる。
だが、一つ気になったのは、手袋の外された右手にある、操縦桿のものとはまた違うタコ。これは一体なんなのだろうか。
いや、そもそもな話、

「何故、普通の人間がドーターに?」
　自分のパートナーであるグリペンと同じように、このファントムという少女も何か不具合を抱えているのだろうか。
「言っておくが、お前とグリペンのような問題は、この二人にはない」
「え?それじゃあなんで・・・」
「それは・・・」
「慧」
「あ、慧だ!」
　理由を聞く前に、そこで、二人の少女が乱入してきた。
　片方のペールピンクの長い髪をなびかせて、ポンチョブラウスを着込む少女の名はグリペン。ドーター『ＪＡＳ３９―ＡＮＭグリペン』を本体とするアニマにして、慧のパートナー。とある理由により、慧と一緒にドーターを駆る少女である。
　一方の派手なブロンドの髪を持つのはイーグル。『Ｆ―１５Ｊ―ＡＮＭイーグル』を本体とし、天真爛漫でお調子者なトラブルメーカーなやんちゃっこ。だが、アニマとしての実力はグリペン以上の元那覇基地所属のアニマである。
　そんな二人の視界に、慧や八代通だけでなく、ファントムや恭平が入り、酷く驚いた様子になる。

おそらく、知り合いの他に誰かがいるこの状況に驚いているのだろう。
だが、イーグルの目が、恭平を確認して、数秒すると・・・
「ん?」
「・・・・・ひっ」
『ひ?』
途端に怯えたようになってなぜか瞬間移動でもしたかのように慧の背後に隠れた。
「え、ええ!?」
これには流石の慧も驚く。
「い、イーグル!?どうしたんだよ!?」
「こ、怖い!その人怖い!」
何故かそんな事を喚きながら恭平を威嚇していた。
「な、なんだなんだ・・・?」
「おそらく、恭平さんのせいでしょうね」
「どういう事だよ?」
「恭平さんにはちょっとした二つ名がありまして。彼女はその二つ名がついた理由で彼女は怖れているのでしょう」
訳が分からない。一体どういった理由でイーグルは恭平を恐れているのか。

「なんか、こういう女の子に警戒されるっていうのは、いささかショックが大きいな・・・」
「あ、アハハ・・・アハハハハ・・・・・」
慧は笑うしかなかった。
「まあいい。揃ったな。傾聴」
そこで、八代通が口を挟んだ。
「突然だが一つ発表がある。本日をもってお前たち、小松基地所属のアニマは空自の指揮系統から独立する事になった」
突然の発表に、慧は内心混乱する。何故いきなり自衛隊の指揮下から突然外れる事になったのだろうか。
まさかクーデター？
「ああ、勘違いするなよ。別に自衛隊から離れる訳じゃない。所属は引き続き日本国自衛隊のままだ。ただ技本や統幕と同じく防衛大臣の直轄になる。名称は独立混成飛行実験隊、略称『独飛』。要はアニマ・ドーターの集中運営部隊だ」
青天の霹靂とはこのこと。訳が分からない。それは八代通が肝心な部分の説明をしてないからではあるが、こう次々に理解できない事を言われると、学生である慧の処理能力ではいささか理解するのには限界がある。
「つまり、チームで動くという事です」

そこで、恭平の傍らのファントムが補足した。
「これまでバラバラだったアニマを一箇所に集中し、ザイへの対処能力を高める。私達は特殊なメンテナンスを必要としますから、保守、整備の観点からも一つに纏まっていた方が運用しやすいわけです」
なるほどなるほど。さらにドーターの維持管理ができる部局は今の所、この日本においては八代通の特別技術研究室しかなく、さらに各地に分散していた為に保守部材やノウハウの共有も困難であり、さらに言えば通常の戦闘機部隊と自分たちでは性能が違い過ぎる為に共同ミッションも不可能、と。
であるならば。
「じゃあ逆にどうしてこれまで分散してたんだ？今の内容を聞く限り最初からどこか一つの基地に集中させておけばよかっただろ」
「それについては俺から言わせてくれ」
ここで恭平が指を二本立てて見せる。
「まずはこいつらの元々の機体がそれぞれの自衛隊基地のものであった事。ドーター化されてもその基地の装備である事には違いない。だからそのまま固定されたんだ」
中指が折られる。
「だが、そんな理由であるなら、所属なんざ書類通せばいくらでも変更できる。で、肝心

なのは次。ようはその基地のお偉方、つまり司令部だとかその辺りが、対ザイ戦の切り札たるアニマを手放したくなかったからだ。鳴谷もドーターに乗る以上は知ってるだろうが、通常の戦闘機ではザイに太刀打ちできない。その最中で生まれた切り札を、誰だって、そう簡単に手放したくはないだろうな」

「はあ・・・」

うんうんと一人勝手に納得している恭平にやや首を傾げる慧。

そんな中でファントムが続けた。

「そんなミクロな部隊単位の問題を先の小松空襲が吹き飛ばしてしまったんです。ザイが大規模襲来した時にアニマを分散してはまずい、戦力の分散が愚策・下策だと遅まきながら気付いた。だから集結の調整が通りやすくなった。そういう事ですよね？お父様」

「うむ。まあ大体そんな感じだ」

全部言われて不満そうな八代通だったが、一方の慧はふむ、と納得していた。

要所要所の説明がされていたために、ある程度の事態は把握できた。

ただ、

「貴方、誰？」

隣のイーグルが不満そうじゃなければ良かったのだが。

「イーグルは今、お父様の話を聞いてたんだけど」
「あら、これは失礼」
「げっ」
　その時、恭平の顔が若干ひきつった。
「私は三沢基地より配属されました。ＲＦ４―ＥＪ―ＡＮＭファントムⅡと――――」
「Ｆ―４ぅ？」
　イーグルの声がこれまでにない程嫌みったらしい声音になる。
「まだ飛んでたんだ？てっきり全部廃棄済みになってスクラップになってるかと思ってたよ」
　完全な挑発。これはまずいと慧が止めに入ろうとした時、ファントムが片手をあげて制して――――
「たかが二十歳そこそこのお子様が大口をたたくものですね。相手の実力も満足に測れないお子様が、随分と図の高い事で。そんなだから先の小松空襲も満足に戦えなかったんでしょう？」
　空気が一気に凍りつく。
　イーグルが一瞬呆気にとられた後に、その顔を赤く染めて、明らかに怒っている事を態度に示す。

慧は思わず恭平を見た。そんな恭平はまるでこうなる事が分かってたと言わんばかりに頭を抱えていた。
「厄日だ・・・」
さらに何かつぶやいている。
「・・・どっちもおばさん」
そして止めのグリペンの爆弾投下。慧が口を塞ぐももう遅い。
「実力・・・実力って言った?」
幸い、二人には聞こえていなかったみたいだが、完全にイーグルは喧嘩腰だ。
「それって、イーグルより貴方の方が強いって事?」
「さあ、それはどうでしょう?ただまあ・・・」
その時、ファントムの琥珀色の目がきらりと光る。
「この場にいる全員の中で、最も強く、リーダーに相応しいのは、この泉守恭平ただ一人ですけども」
「おいこっちを巻き込むな」
そのファントムの一言で、注目が一気に恭平に集まる。
「貴方も本能的に気付いているのでしょう?彼がどういう存在なのか」
「う・・・」

何故か、イーグルは反論できない。一体どうしたというのだろうか。
「どういう事なんだ？」
「大鷲殺し（イーグルブレイカー）」
慧の誰にでもなく放った疑問を、グリペンが答える。
「イーグル・・・なんだって？」
「イーグルブレイカー。自衛隊史上最高の操縦技術を持つパイロット。その機動は並みの戦闘機を片端から壊す程で、初飛行の際に乗っていたイーグルを操縦しただけで破壊したから、それでついたあだ名がイーグルブレイカー。それが彼」
「え、ていう事は・・・・」
慧は恭平を見る。その慧の視線に気付いた恭平は一度慧の方向を向いて溜息をついて、改めて気を付けをすると、敬礼をする。
「泉守恭平一等空尉、昨日付けで三沢からここ小松に配属される事になり、そして、本日をもってこの『独立混成飛行実験隊』略称『独飛』の隊長を務めさせていただく事になった。三沢では毎日のようにイーグルをぶっ壊していた。よろしく頼む」
「ええ・・・・」
そのぶっ飛んだ自己紹介に、慧はげんなりとした表情を隠せない。
イーグルブレイカーで毎日のようにイーグルを壊していた？一体なんの冗談だ。こ

の人、本当に人間なのか？
「言っておくがれっきとした人間だよ鳴谷君」
「わざわざワトソンに説明するホームズのような言い方しないでください。そして何気に俺の心読まないでください」
　それはともかく、
「これどうするんですか？」
「ああ、それを今考えていた」
　しかしそうしている間にもイーグルとファントムの対立は収まらない。
「私と彼が防空戦に出ていれば、多少は味方の被害も抑えられたと思いますけど？」
「――――ッ!!」
　完全な宣戦布告。
「・・・悪い、手遅れだこりゃ」
「はあ!?」
　恭平から諦めの声が挙がる。
「勝負しよう!!」
　イーグルが、ファントムを指さしてそう宣言する。そのブロンドの髪は、抑えきれない感情を表現するかのように輝いていた。

「実際に飛んでどちらが強いか確かめよう!!そうすればイーグルの実力がちゃんとわかる筈!!」
「あらあら」
どうしましょうと言わんばかりのファントムのあの態度。
慧は知らないが、恭平の話術をもってすればこの場を収める事は容易いだろう。
だがそれはイーグルが、見た目相応の精神年齢を持っていたならの話だ。
イーグルは見た目に反してかなり子供っぽい性格の持ち主だ。恭平の話術はあくまで話の通る大人に対してしか通用しない上に、理屈が通用しない子供には全く効果をなさない。
何故なら子供は感情で動く生き物だからである。危険を知らなかったり何が悪いのかを理解できていないからだ。
一応、おだてればどうにか出来ない事はないだろうが、すぐにファントムがその火を再点火させる可能性もあるのだ。
だから、この事態はもう避けられない。
もし避けられる可能性を持っている人物がいるとするならば、今、ファントムが視線だけでうかがっている八代通だけだろう。
恭平に不可能なのだ。慧にだって無理だしグリペンも若干やる気だ。

「いいだろう」
　と、八代通はあっさり許可してしまった。
「うわぁー、マジかー」
「ちょ!?八代通さん!?」
「せっかくだ。異機種間戦闘訓練(DACT)といくか。グリペン、お前も出ろ。三機まとめて評価する。ああ、だが一尉は今回は休んでくれ」
「え?なんで?」
「たまにはファントム単体でのデータもとりたい。いいな?」
「私はそれで構いませんよ?」
　ファントムはうふ、と笑う。その目を見て、恭平はがっくりと肩を落とす。
　そして、恭平は慧に近付いてその肩に手を置いて。
「頑張れ」
「あっはい」
　と、嬉しくない声援をするのだった。
「と、そうだ」
　が、恭平はすぐに慧の耳に口を寄せて。
「ファントムは必ず反則行為するから大目に見てやってくれ」

「え？」

囁かれたその内容に、慧は聞き返す暇もなく、くるりと恭平が踵を返して全員を見渡す。

「えー、じゃあ隊長として、異機種間戦闘訓練を許可します。皆、正々堂々と勝負するように」

と、なんともやる気なさげに言うので、慧も慧でげんなりとした表情をするしかなかった。

ザ・アザー・アニマ

「どーしてこんな事になったんだか・・・・いや、今更かぁ・・・」
　モニターを見ながら、そう愚痴る恭平。
「良い機会じゃないか。お前も他の基地のアニマの実力を実際に知れるんだから」
「その理由があんな険悪なムードじゃなければ良かったんですけどね」
　丁度、三機とも飛び立った事を確認して、恭平は傍らの八代通に聞く。
「それで、こりゃ一体どういう事なんだよ八代通」
　恭平が示したのはグリペンの資料だ。
「鳴谷とグリペンの脳波が全く一緒のもので、さらにある程度離れると脳波が乱れるとか・・・こりゃ普通の事じゃあねえぞ」
「ああ、それについては未だ研究中だが、ただわかっている事は、鳴谷慧が一緒にいる事で、グリペンは飛べるっていう事だ」
「その割にはなんか酷いがな」
　モニター越しに見るグリペンの機動は、慧というハンデがあるが故にどこかぎこちないものだ。

「それで、君からみて、鳴谷君はどう思うかね？」
「よく言って裏表がない。悪く言って嘘がつけない。とにかく感情が顔に出やすい」
「なるほど、まあそれについては俺も同意見だ」
「ただ、そんな彼だからこそ、グリペンのパートナー足りえるのかもしれない」
気付けば、演習は終わっていた。
結果はファントムの圧勝。
ただ、その結果に恭平は頭を抱えていた。
「やっぱこうなったか・・・」
ファントムのパートナーであるがゆえに、恭平はファントムの所業に気付いていた。

「うわぁあああん!!」
ファントムの元へいく道中で、泣き喚いて横を通り抜けていくイーグルに内心で土下座しつつ、恭平は何やら険悪なムードになっているファントムとグリペン・慧ペアの元

へ向かった。
「よーお前ら、訓練お疲れさん。イーグルは何やらどっかの子供みたく走り去っていったな」
「あ、一尉」
「あら恭平さん」
　その空気に迷わず足を踏み入れる恭平。
「ファントム」
「はい？」
　そして、ファントムの頭を掴むなり、
「いたたたたたたッ!?!?」
「一発目早々反則行為どーもご苦労様でした」
「す、すみませんすみませんですからアイアンクローやめてくださいいたたたた!?」
　全力で右手の握力を使ってファントムの頭を締め上げる恭平。
「悪いな鳴谷にグリペン」
「え!?ああっと、いえそんな事は・・・」
「あ、ファントムが死んだ」
「勝手に殺さないでください・・・」

恭平のアイアンクローを喰らって地面に倒れ伏すファントムを無視しつつ恭平は二人に謝る。
「こいつはこういう奴なんだ。だからといって許せとは言わないが、まあできれば仲良くしてやってくれ。そんじゃ」
そう言ってファントムを抱えて去ろうとする恭平。
「あ、そうだ」
しかし何かを思い出したのか振り返る恭平。
「そういや、こいつ、人種で特に有害なのは誰なのかっていう話をしてなかったか？」
「え？まあ、言ってましたけど・・・」
「俺の持論では、力を持たない奴が一番の害悪だと思っている」
「は？」
「もちろん、強きは弱きを助けよ、ていう言葉もあるがな、世の中成功する奴ってのは、人を動かす力を持つ奴だと思うんだ。その方法は様々だ。演説で人々を説得する、力で人々を魅せる、物で人々を釣る・・・とにかく、人を動かせる奴が、全ての物事において高い成功率を獲得できる。だけどな、そんな力も持ってないのにやれ正義だの悪だの言う奴が、一体何ができるっていうんだ？力が無ければ、己が達成したい目的を達成できない。ただ喚くだけで何もできない奴が、勝手にでしゃばる。これ以上に迷惑な事が

あるか？」
「それは・・・」
「その点、お前とグリペンは何かを成すための力を持っている。その心を持っている・・・安心しろ鳴谷。お前は何かを成す為の力を持っている。問題なのは、それをいかに、どのように使うかだ。それさえ分かっていれば、お前はグリペンを乗りこなせるだろうよ」
　そう言って、恭平はまた歩き出す。
「じゃ、また明日」
　片手をあげて、そう告げて、恭平は去っていく。
　その様子を、慧はグリペンと二人でただ見続けた。

「・・・・そろそろ降ろしていただけませんか？」
「ん？」

肩に担いだファントムがそういうので、降ろす恭平。
「ふう・・・何かを成すための力・・・ですか。驚きました。貴方が自惚れをしているなんて」
「失望したか？」
「いいえ。何せ貴方はイーグルブレイカー。常識を壊す存在です。ですから、それくらいの自惚れは、私の許容範囲ですよ？」
「ソイツはどうも。ただま、お前、何事にも全力でいるとそのうちこと切れるぞ？」
「その時は貴方が看病してくださいな」
うふふ、と笑うファントムに、恭平はやはり苦笑を浮かべる。
やはり、この少女は油断ならない。そう思いつつ、恭平は先を歩くファントムの後を追った。

数日後――――

「ふあ、あぁあ・・・」

眠いのを我慢して、恭平は食堂に出ていた。

今ファントムは検査に出ているために一緒にはいない。

ふと、気付くと目の前にグリペンがいた。

「よおグリペン」

「一尉」

声をかければ、機械のような声でペールピンクの髪をなびかせてこちらに振り向いてくれるグリペン。

「今日はファントムと一緒じゃないの？」

「ああ、アイツは検査だ。今から飯か？」

「うん」

「だったら一緒に食おうぜ。今日は鳴谷の奴もいねえからな」

今日は慧は休みだった。

ただ学校の補講にくわえて基地でのバイトという名目上のグリペンとの訓練も入っているうえにトレーニングもやっているそうなのだ。

（考えてみるとすげえハードスケジュールだな）

恭平も、その忙しさには恐れ入ってしまう。あれでよく気疲れしないものだ。

（まあ、こんな可愛い女の子と一緒にいられるんだからな）

グリペンはファントムとは違い、幼いが故の可愛さというものがある。ファントムはどっちかというと綺麗系。しかしからかえばそれなりの可愛さを見せてくれる。いわゆる面倒くさいツンデレタイプだ。

一方のグリペンは、その幼さからくる可愛さと、無表情さから醸し出される人形のような可憐さを秘めている。そして、何事にも素直なので絡め手が通用しない上に直球でくる為に、かなりの頑張り屋な面が見て取れる。いわゆる、努力っ子って奴だ。

ただし――――

「お前その体で結構食うのな」

「うん」

小松限定日替わりBセット。Aセットより一品多い定食である。ちなみに恭平も同じもの。

「そういえば、一尉に聞きたい事があった」

「なんだ？」

「どうして一尉はファントムに乗ってるの？」

素朴な疑問、というのは目を見るだけですぐに分かった。

真っ直ぐな目だ。ガラスのような瞳に映る真っ直ぐな心が、見て取れるほど、率直に、真面目に聞いてきている。

その問いに、恭平は数秒間をおいて、

「それは俺がファントムと一緒に乗ってる、という意味か？それとも、ドーターに乗っているという意味か？」

「どっちも」

「どっちもかい・・・こほん」

一度咳払いして、恭平は語り出す。

「まず前者だが、アイツ、実は結構寂しがり屋だからだ」

「寂しがり屋？」

「おうよ。アイツ、三沢に初めて来た時に何したと思う？情報という情報を片っ端から集めて、それを基地内に流して自分に敵意が向かないようにしてたんだよ」

「ふーん・・・」

「それで俺が見破ってやったらアイツなんて言ったと思う？何で身を守ればいいんですか？だってよ。だから俺は言ってやった。俺が守ってやるってな」

「それは、何故？」

グリペンが、興味ありげの瞳で恭平を見る。

「単純な話、俺がアイツを守ってやりたいって思っただけだよ。確かにアイツ一人で機体を操縦しても、この間のように、仮令、クラッキングしてもお前らを簡単にノせるほどの実力を持ってる。でも、アイツはいつだって自分の身を守る事に精一杯なんだ。だから、俺はアイツがそんな事に気を配らなくていいように、守ってやってるんだよ。その代わり、俺はアイツを操縦して、それをアイツが手伝うっていうギブアンドテイクな関係でやってんのさ」

「そう・・・」

いつの間にか、グリペンのBセットの皿の上の料理は無くなってきた。

「なんとなく、貴方という人が分かった気がする」

「そうか、そりゃよかった」

にっしっしと笑う恭平に、グリペンは思わず、こんな事を呟いた。

「・・・・誰とでも、打ち解けられそうな人・・・」

「ん？なんか言ったか？」

「・・・・何も」

立ち上がるグリペン。

「それじゃあ、私は検査があるから」

「おう、いってらっしゃい」

そう言って、グリペンはおそらく、技本棟の方へ戻っていく。

グリペンを見送り、特に予定もなく小松基地内を歩いていると、

「ん？」

不意に気配を感じて視線を向ければ、そこには見覚えのあるブロンドの髪を持った少女が、なぜか物陰からこちらをじっと睨みつけていた。

「うー・・・」

そしてなぜか唸っている。

「・・・隠れきれてないぞ？」

ちなみに彼女が隠れているのはフラッグポーンである。

「ッ・・・～～!!」

「あ!?ちょっと待て!!」

声をかけられたからか、いきなり逃走を始めるイーグルに対して、恭平も追いかける。

「いーやー!!犯されるぅぅぅ!!」

「待てゴラ!!勝手に俺を犯罪者にすんな!!あ、おい!!待てー!!!」

いきなり自身の名誉を懸けた鬼ごっこに変わった追いかけっこを初めて数分後。

「いい加減にしろぉおお!!」
「うわ!?」
　どうにかその背中にダイブして抱き着く事で捕まえる事に成功する恭平。
「いーやー!離してー!!壊さないでぇ!!」
「待て待て待て!!落ち着け落ち着け!!俺はお前を壊す気は無いし何か変な事をする気は無い!!どっちかっていうと話がしたいだけだ!」
「嘘だー!!」
「嘘じゃねえよ!?って、あ、ちょ、ちょっとまて、頼む待て、爪を立てるのはアーッ!!」
　数分後。
「いってぇ・・・おま、引っ掻く奴があるか・・・・」
「急に抱き着いてくるのが悪いもん」
「返す言葉もございません・・・」
　顔に赤い線を何本も作りながら、顔をさする恭平に対して、背中を向けてふくれっ面で座り込んでいるイーグル。
「・・・なあイーグル」
「ッ!」
　びくり、と体が跳ねる。

「・・・そんなに俺が怖いか？」
「・・・・」
　その問いに、イーグルはびくりと体を震わせる。
　その様子に、恭平は頭を掻く。が、
「・・・・・もん」
「ん？」
「別に怖くなんてないもん!!」
　イーグルが立ち上がって恭平に指を指しながらそんな事を叫ぶ。
「お、おう・・・？」
「貴方なんて、全然怖くなんてないもん!!そ、その気になれば、貴方なんて、コテンパンだもん!!」
「う、うーん・・・」
　そのイーグルの言い様に、恭平は首を傾けて・・・
「いや、ファントムに勝てなかっただろ？」
「うぐ・・・・」
　ぐっさりとイーグルの心に突き刺さる言葉が恭平から飛び出て突き刺さる。
「つ、次は勝つもん！」

「まあ、その意気やよしだけどさ」
恐る恐る、恭平はイーグルの頭に手を乗せる。
「!?」
それによって、イーグルの体が凍ったかのように固まる。
「あんま、自分の実力を見誤るなよ。自信があるのは良い事だが、それで墜ちたら悲しむ奴が多い。特に、お前の大好きなお父様だとかな」
「・・・・・」
そのまま、ゆっくりと頭を撫でていき、微笑みながら言葉を紡いでいく。
「だからま、俺が隊長を務めている間は、ちゃんという事聞いてくれよ? 戦いになれば我儘なんてどれほど通せるか分かったもんじゃないからな」
「・・・・・分かった」
何か悔しいのか、ふくれっ面で視線を逸らして膝を抱えるイーグル。
「・・・・」
(一応、信頼は勝ち取れたって所かな・・・?)
そう思って安心した所、
「キョウヘイサァン」
「――――ッ!?!?!」

突如として体中に蛇が這うかのような気持ち悪さに、というか、悪寒に襲われる恭平。
ゆっくりと、ブリキ人形のように振り返れば、そこには、何故か虚ろな目を全開にして口角を怖いぐらいに吊り上げてこちらを見るファントムの姿があった。
「ふぁ、ファントム!?」
「ナァニシテルンデスカァ?」
「な、何って・・・イーグルとただ話してただけだぞ?」
「ジャアナンデイーグルハアカクナッテルンデショウネェ?」
「ん?ああ、子供なりに恥ずかしいんじゃね?ほら、イーグル精神年齢子供でも、体格的には大人な訳だし」
「ん!?ねえ!それってイーグルが子供っぽいって事!?」
恭平の言い訳を聞いたイーグルがなぜか突っかかる。
「ソレッテ、ワタシハコドモッポイッテイミデショウカァ?」
「いやお前、どっちかっていう着痩せする方で実際はかなりグラマラス――――」
「見たんですか!?」
突如として顔を赤くして体のある部分を腕で隠すファントム。
「え?図星なの?」
「な・・・・ッ!?」

そしてまさかのお世辞。
「貴方は・・・本当の事しか言えないんですか!?」
「いや俺も狙ってるわけじゃ・・・」
「〜〜〜〜!!!」
スパァンッ!!!
乾いた爽快な音が響き渡り、ファントムが荒い足取りで去っていく。
「理不尽・・・」
そして恭平は地面に沈んだ。
その頬には、くっきりと赤い手形が出来ていた。

また、別の日。
「ん？おお慧」
例にもよらず、今日も慧が基地にやってくる。
「あ、恭平さん」
「今日もグリペンの所にか？」
「ええ、まあ・・・」
グリペンは、少々特殊な事情を抱えている。
グリペンは、どういう訳か慧がいなければ三時間しか覚醒していられず、逆に慧が傍にいると十時間以上、即ち普通の人間と同じ時間帯、活動が出来るのだ。
原理は分からないが、理由としては、慧とグリペンの脳波は全くの同じだという事であり、それのお陰で、グリペンの覚醒時間が変わるという事だった。
だから、慧はなるべくグリペンと行動をともにする必要があるのだ。
まあそれはともかく、
（慧の奴、たぶんそれを口実にしてグリペンに会いに来てるんだろうなァ）
内心、ゲスい顔をしていた恭平であった。
「あ」
「ん？」

そこで、恭平はある事を思いだす。
「そうだ慧、お前に言わなくちゃならない事があったわ」
「え？言わなくちゃならない事？」
いつになく真剣な顔の恭平に、慧は、なんとも言えない感覚を覚えた。

「終末派・・・ザイの事を神の使いと称し、ザイの行動を肯定して、世界各国でテロ活動をする過激派集団」
「そんな奴らがいるんですか・・・!?」
グリペンを迎えに行き、グリペンの秘密基地にて、恭平が言った言葉に思わず怒鳴り気味に聞き返してしまう慧。
「いるんだよ。世界の終わりを望んじまうふざけた連中が。教祖と名乗る女を筆頭に、世界中で破壊工作やら人質やら、とにかく軍の動きを抑制するように動いている。だが、最近になって奴らは航空施設と戦力を手に入れた」
「航空施設を・・・？」

「この意味が分かるか?」
恭平が慧に聞く。だが、慧にはいささか難しい話らしく、代わりにグリペンが答える。
「ザイの迎撃戦に介入できるようになった」
「な・・・!?」
その言葉に、慧は驚愕する。
「世界各国で、妨害してくるようでな。初めはロシア、次にフランス、アメリカと出現場所はバラバラ。後で分かった事なんだが、奴ら、世界中の一部の基地を占領してその航空戦力をぶんどって、さらには基地を私物化してたらしい。当然、世界はその基地を占領しかえすなり破棄して爆破しようとした。だが、それらすべてが悉く失敗した・・・」
「それは、何故・・・・?」
「・・・ドーターだ」
恭平の言葉が、慧に理解されるまでに、時間がかかる。
「奴ら、どういう訳かドーターを所持していやがった。それも一機だけじゃねえ。確認されているだけでも七機」
F―16　ファイティングファルコン。
F―14　トムキャット。
YF―23　ノースロップ。

ＡＶ―８Ｂ　ハリアーⅡ。
ダッソー　ミラージュ２０００。
ＭＩＧ―３１　フォックスハウンド。
Ｆ―３５　ライトニングⅡ。
「そんなにいるんですか!?」
「ああ、数的に考えてこちらが完全に不利。世界中のドーターかき集めれば、数の不利は覆せるが、特に、ファイティングファルコンはこの中で断トツの戦闘能力を有している為に、並みのドーターじゃ敵わないとされている。正直言うと、俺も実際に対峙してみない事にはなんとも言えないが、油断はできない」
「なんでドーターがそんな奴らの味方に・・・」
「それは俺が知りたいよ。初期の段階で人類を守る、という価値観があるはずなのに、なんでアイツらは世界をぶっ壊すぞーなんて言っている奴らに味方してんだよ?」
　手をひらひらと振ってそう言い返す恭平であったが、やがて俯いて、静かに話を再開する。
「いいか、慧。俺たちの相手は、これからはザイだけじゃない。これからは、イカれた人間どもさえも相手にしなくちゃいけない」
「待ってくださいよ・・・なんて人間同士で殺し合わなければならないんですか!?今、

世界はザイの所為で・・・」
「それが理由だろうな・・・アイツらは、抗う事をやめた連中だ。そして、その諦めを他人に押し付けてくるような奴らだ。だからこそ、俺たちはその悪意と・・・いや、アイツらなりの『正義』と戦わなくちゃいけない。俺たちが世界を守ろうとしているのと同じように、アイツらは、それほど世界を壊したい程の想いがあるんだろう・・・・」
「・・・理解、できません・・・」
「それでいい。いっぱい悩め。そして、悩んだ先にある答えを見つけろ。ただな、いつか、お前の手の中の引き金に、敵の命がかけられる時が来る。その時の判断は、全てお前に委ねられる。お前も、戦う以上は、それは覚悟しておけ」
「・・・」
慧は、自分の手を見る。それは、いつも操縦桿を握る方の手だ。
その様子に、グリペンは心配そうに慧を見ていて、恭平は黙って真っ直ぐにその様子を見据え、やがて微笑み、慧に向かって歩み寄る。
そして、その肩に手を置いて、
「まあ、そんな事が起きないように、俺が隊長として努力するさ。人との撃ち合いは、本物の軍人の仕事だ」
そう言い残して、恭平は慧の横を抜ける。

「伝えたい事は伝えた。後はお前次第だ。じゃあな」
手を振って、恭平は去っていく。
一方の慧は、その場に立ち尽くし、自分の手を見ていた。
「・・・・・慧」
グリペンが、心配そうに慧の顔を覗き込む。
それに気付いた慧は、グリペンを見て、何かを思って、見ていた掌を握りしめる。
「・・・・・敵の命」
目の前に、高く固い壁があるように感じた。

秘密基地から、基地への帰り道。恭平の足は、いつもより荒く速かった。
「・・・・絶対にそんな場面には合わせねえよ」
もし、次のザイが現れるというのなら、奴らは必ず出てくる。
奴らは、ザイの行動の為なら、容赦なく敵を撃ち、落とす。
であるならば、慧もグリペンと共に必ず撃ち落とされるだろう。
（何があっても、そんな事にはさせねえ。お前らが俺たちを撃ち落としに来るってい

なら、俺はそうなる前にお前らを撃ち落とす・・・!!）

以前に一度、彼らと戦ったことがあった。

黒い月と剣、そして彼岸花のエンブレムを翼に描いた機体が、基地を襲撃してきた。

奴らの目的は、滑走路の破壊、及び、ファントムの破壊だった。

その事を察知した八代通が、ファントムを一早く飛ばし、そのまま恭平とファントムは戦いを始めた。

だが奴らは、己の命を犠牲にしてでも、こちらを撃ち落とす気だった。

だから、恭平は彼らを撃ち落とした。

完膚なきまでに、全滅させて。

「恭平さん」

ふと、ファントムがそこに立っていた。

その眼差しに、恭平は、ある予感がした。

「・・・・ザイか?」

「はい。すぐに慧さんたちを集めてください」

戦いが始まる――――

リコーナセンス・イン・フォース

「本日〇六三〇、東シナ海南西部の防空識別圏にザイが侵入した。ただちに那覇基地所属の自衛隊機・嘉手納の米軍機がスクランブルしたものの双方被害は大きく撃退には至っていない。敵残存勢力は石垣島北方百五十キロ上空を周回中。観測機の報告によれば一部が近隣の無人島に落下したらしい。ひょっとして燃料切れかと思われたが」

八代通がプロジェクターを操作し、ある画像を映し出す。それには山がちな小島の空撮写真だが、本来なら鬱蒼と緑生い茂るはずの島に、なぜか所々煌いて見える。

「落下したザイの破片・・・なんて生易しい物じゃなさそうだな」

恭平がそう呟く。彼は知っているのだ。ザイは決して、なんの意味もなく不自然な行動はとらないという事を。

「お前の懸念通りだ。もろもろの分析結果から、こいつは察するに、敵のＦＯＢだ」

「ＦＯ・・・なんですか?それ」

聞き慣れていない慧など知る由もないだろう。

「Ｆｏｒｗａｒｄ　Ｏｐｅｒａｔｉｎｇ　Ｂａｓｅの略でな。山頂にレーザーサイト、山肌を利用したシェルターに各設備を繋ぐ通信網。これ全ては基地に最低限必要な設

備だ。即ち、前線基地」
「前線基地!?」
「厄介な事になったな・・・」
　驚く慧を他所に、恭平は険しい表情でプロジェクターを睨みつける。
「別に驚く事じゃないだろう。奴らがタクラマカン砂漠で発見されて早二年。奴らの行動範囲は数千キロに及んでいる。まさかその間ずっと飛んでいた訳でもあるまい」
　だから、どこかに中継地点があってもおかしくないのだ。
「必要最低限の設備さえ用意しておけば、奴らは自然に補給してまたどこかに飛べる・・・別に俺たちのような人間の肉体はないんだ。あるのは無限にあるあのへんな体とコアだけ・・・でもだからこそ、その基地が出来た場所があまりにも厄介すぎる」
「基地が出来ると何か悪い事でも?」
　グリペンが、そう質問してくる。
　それに対して、八代通がプロジェクターを操作しながら説明する。
　映し出されたのは、日本の南側を映す地図だ。その地図に、いくつかの線が引かれていた。
「まず、これが第一列島線、極東における対ザイ戦の防衛ラインだ。現状ここが維持できているおかげで太平洋の航路・空路は守られている。少し広いが『我らの海(マーレ・ノストゥルム)』という奴

だな。西からどれだけザイの圧迫を受けようと東からの掩護でなんとか持ちこたえられる。陣地の縦深性が確保されてるわけだ。これが破られると」

さらに操作すれば、大陸からの矢印が日本を囲む。これだけ見れば、慧でも理解できる。

防衛ラインが崩壊し、日本はさらなる危機的状況に落とされるという事だ。

そこで恭平が口を挟む。

「それで、今回ザイが基地を作ろうとしているのは、まさしく第一列島線の真上。ここを連続して抑えられると、当然のように太平洋側の防衛ラインが崩壊する訳だ。そうなれば、直接的な意味でも間接的な意味でも破滅的な状況には変わらない」

「じゃあどうするんですか?」

「決まっているだろう?できる前に潰す」

八代通がそう断言する。

「イーグル達が行って蹴散らして来ればいいの?」

「馬鹿、落ち着け」

「わわ!?」

妙にはしゃぐイーグルの頭を恭平がわしゃわしゃと撫でまわす。

「事はそう簡単な事じゃねえんだよ。相手は前線基地、たいして俺たちは対地特化の戦

闘機を持ってるわけじゃない。仮令、目一杯爆装してもどれほど打撃を与えられるかわかったもんじゃないんだぞ？」
「それに、上空には直掩の戦闘機が複数います。爆装のみ、対空装備なしでいけば、それこそ自殺行為。どうなされるおつもりですか？」
「基地への攻撃は、自衛隊・米軍が行う」
ファントムの質問に、八代通はそう答える。
その答えに、ファントムは首を傾げる。
「対地ミッションの編隊が随伴するという事ですか？」
「いや、それじゃあ俺たちが護衛しきれない。だとするならば・・・・ミサイルか？」
「察しが良くて助かる。一尉の想像通り、第七艦隊の残存艦艇、及び石垣島の陸自によるミサイル飽和攻撃を行う」
つまり、ミサイルの航続距離を利用したアウトレンジ攻撃を行うという事なのだろう。
大量のミサイルを投下すれば、流石のザイでも対応しきれないだろう。だが、それでは一つ問題がある。
ザイの持つＥＰＣＭ。これがある限り、電波で動くミサイルは空中で爆破されかねない。

　であるなら、どうするべきか。
「ファントムを中間地点とすることでミサイルの誘導システムを受け持ち、ナビゲーションしてザイの基地に叩きつける。それで他の二機を直掩に回して護衛させる、と・・・こういう認識でいいか？」
「ああ、それで構わない」
「なるほどな・・・・」
　ふうむ、と考え込む恭平。
「つまり、私自身が空飛ぶ電波標識になれと？」
　そこでファントムが口を挟む。
「そうだ。これだけのミサイルをさばけるのはお前のようなベテランだけだ。偵察ポッドを換装すればデータ・リンク機能も向上できる。下手な早期警戒管制機よりは指揮・管制能力は機体出来るだろう」
「確かに私ならその手の任務には適任でしょう。すでに三沢でも経験している事です。恭平さんが操縦して、私が管制に集中出来れば、問題はないでしょう。ですが・・・」
　ふと、ファントムは慧、グリペン、イーグルの三人を見た。
「イーグル、グリペンに背中を任せろという事でしたが・・・」
　何か、嫌な予感がする。まだ付き合いは短いが、この油断できない腹の内が真っ黒な

日本人形のように美しい少女が、このような場面で言う言葉は容易に想像できる。
いや、彼女が事の重大さを理解しているなら、流石にそのような事は言わないはずだ。
だが彼女ならいいかねない。だけどそうとも限らない。
考えれば考えるほど頭がこんがらがっていき――――
「お断りします」
最終的に答えは彼女自身が言ってきた。
「ちょっと!?イーグルたちの護衛が信用ならないっていうの!?」
当然のように憤慨するイーグル。
「私にまともに勝てなかった貴方たちが恭平さんの背中を任せるなど、笑止千万。むしろ足手纏いとなって遅れを取るのがオチですね」
「なんですってぇ!?」
「おいイーグル落ち着け!」
今にもファントムに掴みかかりそうなイーグルを抑えようとする慧だったが、その前に八代通が間に入って止める。
「今回のミッションの要はお前だ。それは理解しているだろう?イーグルはともかく、グリペンは鳴谷の事で手いっぱいだ。適任なのはお前しかいないのは理解しているだろう?」

「理解はしています。ですが、だからと言って彼女たちに護衛を任せるのは、いささか不安があるというものです」
「はあ・・・実際に操縦するのはお前じゃないだろう。そういうのはパートナーにも言うべきじゃないのか？」
「それもそうですね。恭平さん」
　ファントムが恭平に声をかける。だが、その前に、
「八代通さん」
「なんだ？」
「本格的に作戦を始める前に、威力偵察をしてきてもいいでしょうか？」
「威力偵察だと？」
「ええ。見た所、完成まで時間があるようです。一回ぐらいの出撃ならどうにか間に合うでしょう」
「それで敵に作戦が勘づかれないという保証は？」
「ない、ともいいきれませんが・・・とにかく、一度威力偵察をさせていただけないでしょうか？」
　すっと、真剣な眼差しで八代通を見る恭平。
　その視線を受け止めた八代通はため息をついて、

「その真意は？」
「敵基地の対空兵装の確認・・・・もしこちらを確実に撃ち落とせる兵装があった場合には、ミサイルを誘導する以前の問題です」
「なるほどな・・・・」
　恭平の説明に、八代通は納得したように呟き、
「ま、この部隊の隊長はお前さんだ。好きにしろ」
「ご考慮頂きありがとうございます」
　八代通の返事を聞き、恭平は慧とアニマたちの方を向く。
「一時間後出撃する。各自、それまでに準備を整えろ。いいな」

「と、いう訳ですまん」
「はあ・・・」
　ファントムのいない場所で、恭平は慧、グリペン、イーグル（は、話を聞かずにさっさと自分のドーターに乗ってしまった）に謝っていた。

「まさかあそこまで頑固だと思わなかった」
「まあ、恭平さんが悪いわけじゃないですし・・・そもそも、ファントムのあの性格はどうにかならないんですか？」
「どうにもならんだろうな・・・アイツの根底にあるのは人類の救済であって、人間じゃないからな・・・自分さえ生き残ればいいって考えが根底にあるから、自分が死ぬような選択肢だとかは徹底的に排除したがる奴だからなぁ・・・」
「それって、ファントムは私達を信用してないって事になる」
「それについては俺も同意見だよ。お前たちは圧倒的に実力が足りてない」
　恭平の辛辣な言葉に、慧は思わず拳を握りしめる。
「言っておくが、俺は本当の事は包み隠さず言う方だからな。お前たちは確実に実力が足りてない。その点を考えると、お前たちは死にやすい。いいか、お前ら」
　恭平は、二人に告げる。
「俺が撤退と言ったら、迷わず撤退しろ。今ここで死にたくなかったらな」
　それだけを言って、恭平は、自身の機体の元へ向かった。
「・・・・慧」
「・・・実力が、足りてない・・・」
　恭平の言葉が、慧の心に深く突き刺さる。

「ＢＡＲＢＩＥ０３、クリアード・フォー・テイクオフ！」
操縦桿を倒し、機体を浮かせて大空へ飛ぶ。エメラルドの機体が、天空を飛び、飛翔する。
その次に、山吹色の機体、イーグルが飛び、それに続くようにクリムゾンの輝くグリペンが飛ぶ。
「作戦は話した通りだ。室戸岬沖海上で空中給油機から燃料を補給した後に作戦海域に行く。そこで、本来の作戦に見せるようにグリペンとイーグルが突っ込んで敵を可能な限り倒し、その合間をファントムで切り抜ける。ただし、あくまで道を開くだけだ。敵を猟犬さながら追い回すだけで良い。いいな？」
『０１、了解』
『０２、了解』
返事を聞いて、とりあえずこれで一通りの事は済ませたと思い、ふっと息を吐く。

ただ、恭平はふと後部座席に座るファントムをバックミラー越しに見つつ声をかける。
「なあファントム、お前もうちょっと他人に優しく出来ねえのか？」
「優しくして、何かいいことでも？」
「お前の為に仲間がよろこんで楯になってくれる」
「確証がありませんね。そんな人がいるなら、今頃戦争でさらなる被害が出ていた筈ですよ」
「容赦ねえなお前」
「それが私です」
相変わらず、と言った具合だ。
「もうちょっと信用してやってもいいんじゃないか？」
「それなら、彼女たちがそれに見合うだけの実力を身に着けていたなら、考えたかもしれませんね」
「おい」
これはだめだ。
「私は死ぬわけにはいかないんです」
「そりゃ俺だって死にたかねーよ。だけど、俺が生きる為にはお前が必要だ」

「それは私も同じです。ですから貴方をみすみす殺させる訳にはいきません。ですから、彼女たちに貴方の背中を預けるのは断ったんです。彼女たちでは、貴方についていけない」
「でも、俺たち一機でやれることでもない」
ふと、話に割り込むかのように、通信が入る。
どうやらファントムに対してのようだ。
「ＢＡＲＢＩＥ０３、聞こえますけど・・・なんですか？暗号化通信まで使って・・・・」
「誰からだ？」
「ＢＡＲＢＩＥ０１からです」
０１というとグリペン――――慧の乗る機体だ。
どうやら、ファントムに対してのみの通信をしているようだ。
そうなると、少し暇になってしまう。
そう思った矢先、今度はグリペンから恭平に向かって通話が入る。
「へいこちら隊長の泉守一尉です。なんの用だＢＡＲＢＩＥ０１？」
『一つ、貴方に聞きたい事があるの』
「なんだ？」

『今回の威力偵察の本当の目的は何？』

気付けば、敵の前線基地が見えてきた。ガラス細工のような表面の、きてれつな構造をした、ザイの基地。

その上空には護衛の直掩が数機飛んでいる。

敵が作っている島の名前は、海鳥島という――

「ＥＰＣＭレベル上昇、ガスト２４、２５、２６――シールド作動、マスターアーム・オン・・・行けます」

「よし」

ファントムが、全ての準備を整える。

「戦闘開始ッ!!」

『ＢＡＲＢＩＥ０１、エンゲージ』
『ＢＡＲＢＩＥ０２、エンゲージ！』
目の前を飛んでいた機体の下の増槽が外れ、戦闘が始まる。
『ひゃっほう！』
イーグルが快活な声と共にローリング。すれ違いざまに二機のザイを機関砲で叩き落とす。
その神業じみた所業に、慧の驚いた声が無線から聞こえる。
その間、グリペンもミサイルを射出。一機のザイを追いかけ、その俊敏さで叩き落す。
そのまま、中々に良い連携でどんどんザイを撃ち落としていく――――が、恭平の顔は険しかった。
「ダメだこりゃ」
「ですね・・・さらなる敵機を確認しました」
「おう」
敵機の接近を確認する。どうやら二時と十時の方向からそれぞれ四機づつ近付いてきているらしい。
それは当然、グリペンたちも気付いているはずなのだが・・・
『ちょっと!?何してるの!?』

そんな中でイーグルの怒鳴り声が聞こえてきた。
どうやら気付いたようだ。
「何って、お前らの戦いを観戦してた」
『なんでですか!?』
慧の驚いたような声が響く。
現在、ファントムは戦闘している場所とは遠い場所で旋回してその場にとどまっていた。
「お前ら、護衛の意味分かってんのか？ただ護衛対象に攻撃を当てさせなければいいの。追い回したり、妨害するだけでも十分に護衛と言えんの。それと上、回避行動!!」
恭平がそう言うと、すぐさまグリペンが機体を傾け、上空から急降下してきたザイの攻撃を躱す。
「死角から攻められればすぐには対応できない。レーダーと太陽が二つの視覚の死角になる。こういうのは空中戦の王道だぞ！」
『なんでもいいから早く来て！ミサイルが無くなっちゃう！』
「ばっか使い過ぎだ!?ただ追い回すだけでなんでそんなにミサイル使うんだよ!?」
『あーもううるさいうるさい！いいから早く来てよ！』
『ちょ、喧嘩してる場合か!?』

「全くもってその通りだよ慧・・・」
そう呟いて、そろそろ手助けに入ろうかなどと考えた所で。
「――――恭平さん、新たな機影を確認しました」
「・・・ッ!?どこからだ!?」
ファントムの言葉に、恭平は喰いつくように聞く。
「ここから三時の方向――――それも、数が多い上に、そのどれもが普通の戦闘機です」
「三時ッ・・・!」
すぐさま恭平は右を見る。そこには、確かに低高度でこちらに向かってくる複数の影が見える。
その中には、こげ茶色――――ダークブラウンの光と、アメジストパープルの光を確認――――。
「――――ッ!!」
それを見て、恭平の額に冷や汗が流れる。
（できれば来てほしくなかった・・・!!）
操縦桿を力の限り握りしめて、恭平は、言う。
「・・・・ＢＡＲＢＩＥ０１、及び０２、作戦は中止だ」
『え!?』

『何言ってんの!?』
　驚きの声が返ってくるが、無視して続ける。
「いいかお前ら・・・・これから来る敵軍との戦闘は極力避けろ」
『何を言って・・・』
「・・・・・・終末派だ」
『・・・・・!?』
　息を呑む声が聞こえた。
　それと同時に――――
『あ、あー・・・警告ー、警告するー』
　オープン回線で無線に通信が入る。少女の声だ。
『お前らの行為は神への反逆行為であり、無駄な行為だ。落とされたくなかったらすぐに私達に付き従え。それが嫌なら神の使いたちが崇高なる目的を遂行する為の拠点が出来上がるのを指をくわえてみてろー』
『もし拒否して戦闘を続行するようであれば、即刻、貴方たちを敵と判断し、撃墜します。これは警告です。冗談ではありません。我々の言葉に嘘はありません』
　二人の少女の声。
　それはまさしく、今ここに向かってきている第三勢力からの警告。

「冗談言うなペテン師どもが。お前らの行為は完全な破壊行為だろうが」
　その警告に、恭平はそう答える。
『その言葉を返答と受け取ります』
『っへへ、じゃあやってもいいんだよなぁ？』
　敵が、動く――――
「俺が相手をする」
『ッ!?まってください！』
「いいや待たねえ・・・アイツらはそもそも待ってくれねえぞ」
　操縦桿を切る。
「お前らは隙を見て逃げろ！俺も後から向かう！」
『ですが・・・！』
「いいか慧！・・・人を撃つ覚悟がないなら今すぐ逃げろ」
　敵の数は、十二機。そのうち二機が、ドーター。
『――――『シェン教』の徒が一人、『グレイゴースト』』
『同じく、『ハリアーⅡ』！』
『今から貴方たちを殲滅します』
『その命を神様に返しなァ!!』

アメジストパープルのドーター『グレイゴースト』とダークブラウンのドーター『ハリアーⅡ』が加速する。その後ろの機体『トーネードＡＤＶ』の部隊が追随する。
「ＢＡＲＢＩＥ０３、エンゲージ」
増槽を外し、戦闘を始める。
正面から放たれるミサイル。それをバレルロールし、先ほどイーグルがやったのと同じように機関砲で撃ち落とす。
そしてそのまま二機のドーターとすれ違い、その後ろにいるトーネードを一機機関砲で撃ち落とす。
『ッ!?』
『やろっ』
そのままミサイルをリリース。
「ファントム、正面二機！」
「分かりました」
戒めから解放された槍は炎を迸らせ空を飛翔し、そのまま翼下の戦闘機群に急降下する。
当然、敵は回避行動をとる。
だが、ただでさえ無数のミサイルを捌ける程の技量を持つアニマが火器・管制に集中

しているのだ。仮令フレアやチャフを使っても無駄。逃げられない。
さらに二機、撃墜。
そこで命令を受け取ったのか、他の機体がグリペンたちの元へ向かおうとする。
「行かせるか・・・」
『それはこっちの台詞です』
だが、そこで上空からグレイゴーストが妨害してこようとする。だが、ファントムはなんとバレルロールでその妨害を回避する。
『な!?』
驚きの声がグレイゴーストから出る。
だが、その間に恭平の操るファントムはグリペンたちに向かうトーネードの部隊に迫る。
「ＦＯＸ２・・・!!」
また二本リリース。放たれたミサイルは、アニマの精密な操作の元、寸分違わず外側二機に直撃する。
黒煙を巻き上げて、一気に海面へと落下する。
『・・・ッ』
ふと、誰かが息を呑む音がした。だが、それを気にしている暇は無い。

『テメェ！』
　ふとそこでハリアーがファントムの後ろを取る。
「ミサイル、来ます！」
　ファントムの鋭い声がと共に、ハリアーからミサイルが放たれる。
　そこで恭平はスロットルを最低にまで引き下ろす。それと同時に速度を失ったファントムは加速度的にミサイルとの距離が縮まる。
『馬鹿が！』
　ハリアーの罵倒が聞こえた。だが、次の瞬間、機体が回転、翼の下をミサイルが通過、信管が作動する前に通り過ぎて炸裂する。
　だが、ファントムには大したダメージは入っておらず、スロットルを最大にしたファントムがほぼ一瞬にしてハリアーの後ろを取る。
『なッ!?』
「喰らえ・・・ッ!?」
　そのまま機関砲の引き金を引こうとした直前、上空からグレイゴーストが強襲する。放たれた機関砲の弾丸を躱し、スロットルをあげる。
　その後ろをグレイゴーストとハリアーが追随する。
『待ってくれ！』

その時、慧から通信がオープン回線で入る。
『なんでこんな事をするんだ!?こんな事をしても、なんの意味もないだろ!?』
『意味ならありますよ。人類が自らの愚かさを思い知りながら、神の導きによって全てが無に帰る・・・ようは、人類が絶滅するのです』
『そんな事は分かってる！知りたいのはなんでお前たちはそんな事をしているかだ！お前たちは・・・人を守るために作られたんじゃないのか!?』
『人を守るため・・・?』
高速で飛び回る、三機の煌き。
『おいおい馬鹿言ってんじゃあねえぞ』
『え・・・・?』
ハリアーが、嘲るように言い返す。
『アタシらの目的はこの星を守る事だ』
『なら――――』
『だから人類を皆殺しにするんだよッ!!』
慧の言葉を蹴っ飛ばすように、ハリアーがアフターバーナーを全開にしてファントムに襲い掛かる。
だが、放たれた機関砲は『捻り込み』という技術によって躱されただけでなく後ろを

とられる。しかしファントムが機関砲を撃つ前にグレイゴーストが妨害。ファントムは避けざるを得ずに回避する。

『何を言って・・・』

『くどいですよ。私達の目的は星を守る事。であるならば、その最も手っ取り早い方法として人類を皆殺しにするのは当然の事じゃないですか』

『そんな・・・他に方法はないのか!?』

『ふふ、貴方は馬鹿なんですか?今、この星を壊しているのは他でもない人類。即ち、地球は人類という病気によって死へと向かっているのです。であるならば、その病原体を根絶するのは当然の事でしょう?』

『・・・・・』

狂っている。ここまで、狂っている存在を、慧は見た事がないだろう。

本来、人を守るために作られたドーターとアニマが、人類を絶滅させるためにザイに加担している。

これほど、皮肉な事があるだろうか。

『どこのどなたか存じませんが、我々は、神の意向に従っているまでです。ザイこそが神の使い。星に巣食う害虫である人類を根絶する為に遣わされた、いわゆる尖兵たちなのです』

ミサイルをリリース。それがグレイゴーストに向かって突き進むも、ハリアーによって撃ち落とされる。

『ですので改めて言いましょう。貴方方の行為は神への反逆行為であり、無駄な行動です。どれほど遣いたちを落とそうとも、神の御業によっていくらでも復活し、貴方たちに迫ります。ですので、もう諦めて私達と来なさい。さすれば、貴方の今までの罪は赦され、私達と一緒に神のもとへと行けるでしょう』

『・・・・・』

無線から聞こえる慧の唸り声は、迷っているようにも聞こえた。

「・・・・ざけんな」

「ツァ!?」

その時、ファントムの動きが変わった。

ファントムの背後を取っていたグレイゴーストの視界から、突如としてファントムが消える。

『なっ!?』

「諦めれば罪が赦されるだと?・・・・ふざけてんのかァ!!」

放たれる機関砲が、回避行動をとったグレイゴーストの翼に数発叩きつけられる。

『しまった・・・・!?』

「神への反逆行為!?大いに結構だ!!なぜなら俺は、人を守るために戦っているからだ!!」
　逃げようとするグレイゴーストを、おそろしい機動によって追い回し、上を取って機体を垂直にして機関砲を叩き込む。
『つぅ・・・!』
「お前らの言い分なんざどうだっていい！俺は軍人だ！自衛隊だ!!自分の国――――人を守るのが俺の仕事だ!!それを諦めちまったら、一体誰が守るっていうんだよ!!」
『・・・!!』
『テメェ!!』
　ハリアーが助けに入る。だが、ファントムから五時の方向から迫ってきたハリアーの機関砲をバレルロールによってあり得ない速度で回転、回り込んで機関砲を放つ。
　どうにか躱すも、続くミサイルがハリアーを襲う。
「だから俺が守るんだ！守れる力を持ってる俺が守るんだ!!俺は、その為にここにいるんだ!!!」
　ミサイルがハリアーを追い立て、態勢を起こしてローリングしようとしたハリアーの背に二、三発弾丸を叩き込む。
『ぐうっ!?』
（行ける・・・!!だったらこのまま・・・・!!）

追撃しようとした。その時、
「きょ・・・へい・・・さ・・・・」
「ッ!?」
恭平の耳に、ファントムの苦しそうな声が聞こえてきた。
それと同時に、機体の軋みが聞こえてきた。
「な!?」
それに気付いた恭平が慌てて追撃を中止する。
「ハア・・・ハア・・・やっと気付いてくれましたか」
「なんかすまんファントム!!」
「そう思うなら後で何か奢って・・・ッ!?回避!」
「ッ!!」
機体を傾けて下から襲ってきたグレイゴーストの攻撃を躱す。
『ッ・・よくも・・・!』
さらなる追撃をしかけてくるように旋回してくるグレイゴースト。
「くそっ!さっさとこいつら片付けて、慧たちの所に行かなきゃならんのに・・・!!」
『グリペン!イーグル!下!!』
その時、未だオープン回線だったのか慧の声が無線から聞こえてきた。

次の瞬間、ザイの基地の方向からまばゆい光が迸る。
「なんだ!?」
思わず目を細める恭平。
光が収まったのを確認して、恭平はすぐさま僚機に連絡を取る。
「こちらＢＡＲＢＩＥ０３！何があった!?」
『地対空・・・クラスター弾を受けた』
「まじかよっ・・・!!」
『地上発射タイプ、打ち上げて敵編隊の真ん中で自爆させて小弾をばらまく』
『なんだよそれ・・・！』
「くっ・・・」
次が来ればやばい。
これじゃあ制空戦なんてしている暇なんてない。
『また来る！』
イーグルの悲鳴のような叫びが響く。
「撤退だ！」
『逃げろ！イーグルも、全速力で！』
恭平と慧の声が重なる。

『逃がすか！』
しかし負傷している筈のハリアーが撤退を妨害してくる。
「ファントム！ミサイル全部使う!!」
「どうぞ思う存分使ってください」
引き金を連打する。翼下のミサイル全てがリリースされて妨害してくるハリアーに向かう。
ハリアーは正面から飛んできている。それに放たれたミサイルは全てファントムが精密な操作を実行している上に、ハリアーは負傷している。
回避は、不可能だ。――なのに、
『全てはザイの為にッ!!』
『全てはザイの為にッ!!』
命令した訳でもないのに、二機のトーネードがミサイルとハリアーの間に割って入る。
そして、全てのミサイルが、その二機のトーネードに突き刺さり、爆発し、そして、海面に向かって落ちていく。
『そんな・・・！』
慧から、そんな声が響いた。

「自ら盾になりやがった・・・」
「つくづく、救えない方々ですね」
ファントムがそう毒づき、彼らは、どうにか逃げる事に成功した。

ディターミネイション

八代通の指示に従い、恭平たち独飛のメンバーは、海鳥島からもっとも近い沖縄の那覇基地に帰還していた。

どうにか着陸し、恭平は改めて僚機の惨状を確認した。

地対空クラスター弾の影響で、二機の体はあちこちに小さな損傷が出来ており、あのまま二撃目を喰らっていれば、どうなったか分かったものじゃない。

恭平は、すぐさまファントムから降りるなり、すぐさま慧たちのもとへと向かった。

「慧！グリペン！イーグル！」

丁度、慧が下りてきた所で、恭平は急いで駆け寄る。

慧の顔色は、かなり悪い。

「大丈夫か？」

「ええ・・・まあ・・・・」

声音もどこか弱々しい。それもそうだろう。

（あんな所を見せつけられちゃあなぁ・・・）

頭を掻いて、先ほどの事を思い出す恭平。

終末派――――『シェン教』

以前にも戦ったことはあるが、やはり、奴らは異常なまでの信仰心を持っている。それ故に、自分の命すら顧みない戦いをする。

仮令、弾丸がなくなろうがミサイルがなくなろうが、己が体を弾丸として敵にぶつけたり、基地に落下して自爆したりとやる事全てが常軌を逸している。

それは、おそらく彼らの信仰心の為せる技なのだろうが、それでも、決して許容できるものじゃない。

己の正義の為に、自らの安全を無視する行為など、決して認められない。

だが・・・

（このままじゃ、いつまで経っても基地を破壊する事は出来ない）

奴らの出現は、思った以上に厄介だった。

ドーター二機の出現、終末派の行動、それを見た慧の心情。

今回の作戦の要は、恭平の乗るファントムであり、ファントムがミサイルを操縦する以上、恭平は下手に得意の高機動を発揮できない。

そうなれば、敵ドーターを相手取るのはイーグルとグリペン。だが相手の連携は想定以上で、一方のこちらはそこまでの連携を取れず、さらにはグリペンは慧という弱点を抱えている。

さらにグリペン自身もそこまでの実力はもっていない。
とてもではないが、
（あの二人を相手にするには荷が重すぎる・・・）
それに、人である慧にとっては、
（人を殺す事と同価値だ・・・）
それは軍人の仕事だ。
人を撃つことも、人を殺す事も、国を守るためにその訓練をしてきた人間がするべきだ。
一般人である慧がするべきことじゃない。
しかし、そうなると・・・
「作戦の遂行は不可能ですね」
ふと、背後から声が聞こえた。振り返れば、そこには自身の半身に背中をもたれているファントムの姿があった。
「ファントム・・・・」
「慧さんがそのような状態では、グリペンとともに飛ばすのは無理・・・さらにドーターが二機も出てくるとなれば、私たちも必然的に戦わざるを得ません。だけどそれではミサイルの誘導に気を回す事も出来ない・・・・」

「だから諦めるのか？」
「必要であるならば」
　ファントムは冷静だ。彼女の行動はつねに自分が生き残る事を前提としている。色んな事に何もかもが全力だ。
「だが、海鳥島を取られれば、ザイの行動圏はさらに広がる事になる。そうなれば、人類滅亡が加速する事になるぞ」
「ええ、そうですね・・・・ですが、それが直接的な要因になるとも限りません」
「そりゃそうだけども・・・ああ、っもう！」
　ダメだ。これに限っては彼女も譲る気は無いらしい。話は平行線。一向に流れが変わる様子もない。
　模擬戦で力付くでミッションに同行させるか？いや、だめだ。ファントムはそもそも勝ち目のない戦いはやらない主義だ。必ず自分が勝てる勝負でないと乗ってはくれないだろう。
「あう」
「おい大丈夫か？」
　ふとそこで背後で可愛らしい悲鳴が聞こえた。振り返ればはしごから足を滑らせたのかぶらぶらとぶら下がっているグリペンの姿があった。

　その表情は若干、脂汗を伴っている。
「アニマはドーターは一心同体だ。ドーターのダメージは痛みとしてフィードバックしてアニマに伝わってくる。一応、リンクレベルを下げて痛みを小さくすることも可能だが」
「なんですかそれ」
「でも、リンクレベルを下げ過ぎると上手く機体をコントロールできなくなって逃げきれなくなると思った」
「それで我慢してた、と・・・」
　そう呟いた慧は、口をひくひくと動かしつつグリペンの両頬を挟み込んだ。
「うううう!?」
「お前なぁ、痛いなら痛いっていえよ。逃走中ならともかく、着陸ぐらいは引き受けられたぞ」
　そう、着陸ぐらいなら慧でも出来るのだ。彼だって、何もグリペンとただ一緒にいるだけではないのだ。何度かシミュレーションでＪＡＳ―３９Ｄグリペンを操縦した事があるのだから。

――――――ん？

操縦？慧が？グリペンを？

その三単語が揃った瞬間、恭平の脳裏に稲妻が走る。

「これだぁ・・・」

「ん？」

何かを呟いた恭平に気付く慧だったが、それよりも早く恭平はファントムと向き合っていた。

「へいへいファントム、もう少し話ききーや」

「なんですかその喋り方。気持ち悪いですよ？」

「さっきから聞いてれば随分と弱気だな。それでも俺のパートナーかよ」

ぴくり、とファントムの肩が震える。

「生き残らなければならないのは分かるが、ようは死にたくないって事だよな。うん。

そりゃそうだ。誰だって死にたくないもんな。でも、お前は結局、戦えなくなった自分を捨ててもらうのが怖いだけなんだろ？違うか？」

ぴくぴくとファントムの耳が動いた。ような気がする。

「兵器として作られたくせに戦場を選ぶ？笑わせてくれるぜ。兵器なら戦場を選んでる余裕なんてない。ただ命令に従って作戦を遂行するだけでいい。それなのにお前は逃げるんだな。失望したよ」

ひきつった笑みを、ファントムが恭平に向ける。

「ずいぶんと好き勝手言ってくれますね。なんですか？私は貴方のパートナーに相応しくない、と。そう言いたいんですか？」

（おいおい最後の方涙声になってるぞ・・・流石に失望は言い過ぎたか）

よく見れば目尻にも涙が浮かんでいる。だが、帝国海軍の軍人の孫として、甘やかす訳にはいかない。

「そう言われたくなけりゃあ、作戦をきっちり完遂させるんだな」

「ふっ、先ほども言いましたが、終末派が出てきた以上はそれは不可能です・・・ぐす」

（おいいい!?最後、ぐすって聞こえたぞぐすって!?）

さらに目尻に涙が溜まっている。まずい。どうにか取り持たなければ結界する。

「そうか。だったら仕方がない。ここは力づくと行こう」

　どうにか動揺を押し殺し、グリペンと慧のそれぞれの肩に手を片方ずつ置いた。
「これからこいつらと模擬戦して、こいつらが勝ったら作戦に参加。逆にお前が勝ったら俺はお前の言う通り、ここを捨てて小松に戻る」
「・・・・・ん？え!?ちょっ、まっ!?」
「うううう!?」
　突然の事に当然驚く慧とグリペン。
「その二人が・・・私と・・・？」
「ああ」
「ちょ、ちょっと待ってくださいいきなりなんですむぐ」
「すまない慧。だが拒否権は無い」
「ほんはばはな（そんなバカな）!?」
　口を塞がれてもなお暴れる慧。
「ふ、ふふふ・・・・」
　その一方でファントムはファントムで暗いオーラを迸らせていた。
「ずいぶんと舐められたものですねぇ。言っておきますけど、そこの二人は私に負けたんですよ？勝ち目なんてあるはずがありません」
「そいつはどうかなぁ。もしかしたら予想外の手段で勝ちに来るかも？」

相も変わらず軽い口調でそう挑発する恭平。
そこで、今まで俯いていたファントムが顔をばっと上げる。
その目は・・・やっぱり泣いていた。
(((泣いたー!?)))
「いいでしょう!その勝負受けてあげます!負けてももう一回なんて許しませんからね!!」
そのままずかずかと去っていくファントム。
「・・・・やり過ぎたか」
「それ以前に何するんですかアンタはぁ!?」
「何って模擬戦に強制参加だが?」
「それはそうですけど・・・ああ、もう!わかりましたよやればいいんでしょうやればァ!!」
もはや自暴自棄となっている慧。
一方のグリペンは突然の事に頭がついていっていないのかぐるぐると目を回している。
「ま、お前に勝ち目がないわけじゃあない」
「それは分かってますよ。アイツはどんな事にも全力を注いでるんでしょう?」

「それが分かってんなら問題ねえかな・・・・」
どうやら、慧の方にも勝算はあるようだ。だが、
「と、いきなり話は変わるんだが、お前、さっきの戦闘を見てどう思った?」
「え・・・」
「終末派の連中の行動・・・どう思ったよ?」
「それは・・・・」
それを聞いて、慧は口を閉ざす。
これが、もう一つの課題だ。
慧の覚悟。
終末派と相対して、それでもなお戦い続ける覚悟はあるのか。あるいは、人を撃つ覚悟はあるのか。
それを今、試されている。
「異常だ、と思っただろ?」
「・・・」
恭平の言葉に、慧は肯定するかのように黙り込む。
だが、やがて、吹っ切れたように口を開く。
「可笑しいですよ、あんなの・・・なんで、あんな簡単に自分の命を投げ出せるんだ。ど

うしてもっと生きようなんて思わないんだ。どうして・・・・誰かが悲しむなんて思わないんだ・・・・!!」

拳は握りしめられ、歯は、これまでにない程食いしばられていた。

「どうして、世界を壊すなんて簡単に言えるんだよ!奪われたものをどうして取り返さないんだ!?奪われたんならどうして取り戻さないんだ!?どうして、あんな簡単に諦めきれるんだよ!訳わかんねえよ・・・!!」

精一杯に、自分の気持ちを吐き出す慧。

慧は、自分の感情を隠せない人間だ。だから、思った顔に出るし、動揺しやすい。

でも、だからこそ自分に正直で、戦いたいと願った。

ザイという存在の恐ろしさを直に体感して、恐怖を刻みつけられた。

だが、彼はそれでも戦う事を選んだ。

自分に正直に。グリペンという少女と共に、空を飛ぶことを選んだ。

「慧。お前は、自分の痛みが十分わかってる」

「え・・・?」

「だからこそ、お前は他人の痛みも理解できる。だからお前は他の誰にもない『強さ』を持っている・・・お前に、この言葉を贈ろう」

慧の肩に手を置いて、恭平は言う。

「自分の痛みが分からない奴に他人の痛みを語る資格はない。俺が尊敬する、かつて帝国海軍だった俺のじいちゃんの言葉だ。他者を理解する前に、まずは自分を理解する。そしてそこから、少しずつ周囲に目を向けるんだ。そうすれば、お前が守りたいものが見えてくる筈だ」

それを言った恭平は踵を返して歩き出す。

「そういう訳だ。八代通には俺から言っておくから、お前らはゆっくりと作戦会議してくれ」

そう言って、恭平は慧たちの元から去っていった。

「と、いう訳で舟戸さんをプリーズ」

『ふざけるな、今すぐやめろ・・・と言いたいが、それしかないだろうな』

「ご理解いただき、ありがとうございます♪」
『やめろ気持ち悪い』
「すみませんでした」
　画面の向こうの八代通はげんなりとした表情で額を抑えていた。
『それで、勝算はあるんだろうな？』
「もちろんですよ。慧が俺の予想通りの事をしてくれればね」
『フン、あくまで余裕、か・・・まあいい』
　紫煙を吐いて、八代通は続ける。
『終末派が現れたって聞いた。それもドーターが二機も来たらしいな』
「ええ」
　八代通の質問に、恭平は先ほど印刷してきたあの二機のネットに乗っていた写真を見せる。
「『ＹＦ―２３―ＡＮＭグレイゴースト』。アメリカ空軍向けに作られた試作ステルス機の二号機で、スーパークルーズ機能搭載。アフターバーナーなんて使わなくても超音速による巡行が可能ないわゆる空飛ぶ巡洋艦・・・世代で言えば第五世代に分類されるいわば最新型・・・確か、アメリカでは第六世代の機体のドーター化がもうすぐできるとかできないとか聞きましたけど・・・・」

『そんな事俺が知るか。それで、もう一機の方は？』
「ああ。『ＡＶ―８Ｂ―ＡＮＭ　ハリアーⅡ』。第二世代型戦闘機だが、小規模な飛行場といった他の機体の活動が制約される環境下での近接航空支援と戦場航空阻止をこなす事の出来る唯一の機体ですね。この機体ならどうにか出来そうなものですが、問題なのは二機の連携。まだチームとしてまともな連携が取れていない以上、こちらが遅れを取るのは確実です」
『じゃあどうする？』
「正面戦闘をするなら、の話ですが」
『何・・・？』
　恭平が不敵に笑う。
「今回の目的は敵前線基地の破壊・・・であるなら、下手に落とす必要なんて無いわけです。ただ攻撃を妨害してくれればあとはこっちで勝手にミサイルを操作して基地を破壊します。後はそのままとんずらこけば良いだけ。簡単でしょう？」
『はあ・・・全く、お前という奴は・・・』
「隊長は俺ですから」
　わざとらしく胸を張って見せる。
『まあいい。とりあえず舟戸を向かわせる。後はお前たちでどうにかしろ。そんで、あ

の我儘娘をどうにかしてくれ』

「父親公認とあれば」

その言葉を最後に、通信を終える。

「さぁて、どうすっかな」

両手を頭の後ろで組んでしばらく基地内を散策する恭平。

ファントムはおそらくいじけて口を聞いてくれそうにないし、イーグルは気付けばどこかに行ってしまっていたし、慧とグリペンには模擬戦に集中してもらいたいから下手に話しかけられない。

はて、そうすると後はどうするべきだろうか。

(そういや、真耶の奴はどうしてっかな)

真耶とは、恭平の妹の事である。

泉守真耶。現在航空自衛隊浜松基地所属のオペレーター（雑用）であり、現在二十一歳。

現在、婚約中の相手アリ。オペレーターとしての実力は母親仕込みで確かであり、特に戦況の把握はずば抜けて速い。

さらに活舌も良い上に彼女が言うとどれほど細かい命令でもなぜか頭に入って、それでいて理解できてしまう為に『人形使いの女王（スキッパークイーン）』なんてあだ名もついていたり。ちなみに本人はこの名前を嫌っている。

「今何してんのかな～」

なんて思いながら那覇基地を歩いていると、ふと目の前を黒髪のショートカットのゴスロリ姿の少女が通り過ぎた。

「よお真耶、お前その恰好も結構似合うんだな」

そう言って恭平はその少女の横を素通りする。

「――――ってちょっとまてぇぇえ!?」

寸での所で異常に気付いた恭平は思わず自分の妹そっくりな少女に理不尽なツッコミを叩きつける。

「ちょ?!真耶!?お前真耶か!?なんでゴスロリになってんのお前!?ていうかお前所属ここだっけか!?浜松だよなお前の所属!?どうしてここにいんの!?」

と、マシンガンの如き言葉の嵐を真耶（仮）にぶつける。

だが真耶（仮）は首を傾げるばかりだった。

「・・・あー、一つ聞くぞ。お前、真耶か？」

間。そののちに真耶（仮）はスマホを取り出すなり何か文字を打ち、そしてその画面

を向けてきた。
『泉守恭平一等空尉』
それは、間違いなく恭平の名前だ。しかも階級まで丁寧に書かれている。
そう、そこまではいい。とにかく、そんな言い方は自分の妹は絶対にしない。
兄として、そこは絶対だ。
「オーケー。確かに俺は泉守恭平一等空尉だ。だからちょっと待て。いいか?そこで待つんだぞ?ステイ、ステイだ。勝手にどこか行くなよ?いいな?」
それを聞いて、真耶（仮）は。
『何故そこまで念を押す必要が?』
「いいから絶対に動くんじゃねえぞ!分かったな!?」
思わず怒鳴ってしまったがすぐに恭平はある人物に電話をかけた。
数回のコールの後、
『もしもし、お兄ちゃん?どうしたの?』
随分と聞き慣れた声が電話越しに聞こえた。
「ああ、真耶か。お前今どこにいる?」
『え?雄也君とデートだけど・・・って何言わせるか!?』
「ああ、うん。お前と雄也が仲良くしてるってのは良ーくわかった。そしてお前が今絶

賛ラブラブしてるって事も」
『ラブラブ言うな！で？なんでいきなりそんな事を聞いてきたの？今任務中の筈だよね？』
「いや、ちょいと俺の目の前で、現在進行形であり得ない事が起きてるから電話を掛けただけだ。気にするな。それじゃあデート楽しめよ。親父が許してなくても俺は歓迎してるって伝えておいてくれ」
『うん分かった。それじゃあねお兄ちゃん、任務頑張ってね』
「おう」
　妹との電話を終え、恭平は通話を切って、改めて目の前の真耶（仮）を見る。
「・・・お前、名前は？」
　その問いに、彼女は、
『Ｆ―２Ａ―ＡＮＭバイパーゼロ』
　バイパーゼロ、噂に聞いていた、那覇基地のイーグルの元同僚。なるほど、それなら納得がいく。
　彼女のこのふざけた服装もその容姿も、おそらく偶然の産物なのだろう。
　それを理解した瞬間、恭平は緊張の糸が切れたかのようにハァーっと息を吐き出した。

「あー良かった。どにかくお前がどういう存在だったのか理解できて安心した」
『それは良かったです』
　何やら労ってくる真耶（仮）改めバイパーゼロ。
「改めて、俺は泉守恭平。特別混成飛行実験隊の隊長を任されている。一応、お前の上司という事になるのか？」
『独飛は那覇基地所属のアニマ限定と聞いてますので厳密には違うと思います。ですがその点は曖昧なので、一応そうなるのでしょう』
「おおう、ファントムとはまた一風変わったまともな返し・・・まあいい。それで、お前はどうしてここに？」
　その質問に、バイパーゼロはしばし逡巡した後に、
『逃げてきました』
「は？」
『少し、驚いてしまって』
「・・・一応聞くが、誰からだ？」
『鳴谷慧からです』
　意外に早い切り返し。
「よし、この際何があったかなんて聞かない。だからとりあえず少し話をしよう」

『具体的には何をでしょうか？』
「うーむ・・・そうだ。お前、この基地に一人だけだけど、大丈夫なのか？」
『ここの防衛は私一人でも成立しています。守るだけなら問題ありません。攻めるとなると話は変わってきますが』
「なるほどな・・・」
　それなりの実力はあるのだろう。
『それに、今回の作戦には私も参加する事になっています』
「え？マジか？」
『貴方は隊長ですので、教えておく必要があるでしょう』
　そのままバイパーゼロから彼女の作戦における動きを聞きだした所、
「任せた」
　割と本気で恭平はバイパーゼロに頼んだ。
「しかし、一人ってのも退屈じゃないのか？」
『私は人間との直接接触は可能な限り避けるよう指示されている』
「え？そうなの？」
　なんだそれは。
「もっと他の人と話そうとは思わないのか？」

『イーグルたちと話しています』
「そうじゃなくてだな・・・なんか、こう、基地の人とかにさ」
『それは私の性質上、あまりよろしくありません』
「え？性質上？なんだそれは――――」
さらに聞こうと思った直前でスマホが鳴る。
すぐさま恭平はスマホ取り出して耳に押し当てる。
「はい泉守」
『おう一尉。こっちの調整終わったんだが、見に来ないか？』
舟戸だった。
「それはご苦労様です。そこに慧はいますか？」
『いんや、まだ来てないな。でもま、アンタも面白い事考えるよな』
「それはちゃんとした勝算があるからですよ。もし慧が俺の予想通りに動いてくれればきっと勝てます」
『そりゃ頼もしい。で？一応当事者であるアンタに一応報告しといたが、どうする？』
「もちろん見に行きますよ。そんじゃ、後はよろしくお願いします」
『あいよ』
そこで通話が切れる。

「よし、バイパーゼロ・・・」
そしてバイパーゼロの方を向いたが・・・
「あれ?」
そこには誰もいなかった。
「・・・・逃げられた」
そう呟くも、それに答えてくれる人はいないわけで、ただそこに立っている時間が無駄に過ぎていくだけだった。

那覇基地の屋上にて、慧は頭を抱えて悩んでいた。
(どうすればいいんだ・・・)
その理由は単純、終末派の事についてだ。
これからやるファントムとの模擬戦は良い。問題なのはその先、あの基地を破壊する

作戦を実行する際に、奴らは必ず現れるという事だった。
そうなったのなら、自分は一体どうすればいいのだろうか。
『いつか、お前の手の中の引き金に、敵の命がかけられる時が来る』
いつか、恭平の言った言葉が脳裏によみがえる。
自分の手の中の引き金・・・・
「ッ・・・」
もし、もし自分が撃たなければ、仲間が撃ち落とされる可能性がある。そうなったら、もう、何もかもが手遅れだ。だけど、それでも相手は人間。ザイではない。
命ある、存在だ。
「慧」
ふと、そこで後ろから声をかけられる。
振り返れば、そこには、見知った顔の少女がいた。グリペンだ。
「大丈夫？慧」
「ああ・・・いや、そうとも言えない、かな・・・」
握った拳に自然と力が入る。
「・・・なあ、グリペン」
「何？」

「俺は、どうするべきなんだろうな・・・」
慧は、自分の想いを、最も信頼するパートナーに吐露する。
「終末派の奴らを見るまで、俺は、大丈夫だって思い込んでた。だけど実際に対峙して、アイツらのあんな行動を見せられて、俺、なんか怖くなったんだ。あんな人間がいるなんて思いもよらなかった。皆、ザイの事を許せないと思ってた。あるいは、悲しんでると思った。だけど、アイツらは違った。世界の滅亡を望むなんて、そんな事、思わなかったんだ・・・」
同じ人間として、命を投げ捨てられる奴らが心底怖かった。
命を、簡単に投げ捨てられる、奴らの考えが、堪らなく分からなかった。
分からないからこそ、怖かった。
「俺、アイツらと戦える自信がない」
「慧・・・・」
今度対峙すれば、確実に遅れを取る自信がある。こんな後ろ向きな自信なんて本当の所いらないが、それでも、そう思わずにはいられない。
異常だからこそ、慧は、戦う事を躊躇ってしまう。
そんな慧を、グリペンは心配そうに見上げて、しばし考え込んだ後、グリペンは口を開いた。

「慧、正直、私は終末派の行動が理解できない」
「・・・・」
「理解できないからこそ、許せないって思う」
「許せない？」
一体、何が。
「どうして、そんな簡単に命を投げ出す事が出来るんだろうって。命は、たった一つしかないのに、どうしてそう簡単に捨てる事が出来るんだろうって。どうして、もっと生きようとしないんだろうって。そんなの、結局逃げてるだけ。空を飛ぶ力を、人を守れる力があるのに、どうして戦おうとしないのかって、そう思う」
抑揚のない声に、僅かな怒気が感じられた。
「あんなの、ただ逃げてるだけ。周りの人に比べたら恵まれている状況で、簡単に命を諦めるなんて、私は許せない。贅沢過ぎる」
「贅沢・・・」
「贅沢は敵」
何やらずれた所で燃えているグリペン。
そうか、贅沢か。
であるならば、自分のこの弱音も、贅沢の内の一つになる。

命を投げ出す事。それは決して、勇気なんかじゃない。
（それは、逃げる事・・・・）
奴らは、逃げている。自分の持つ力の責任から逃げているだけの、ただの狂信者。
生きる事を諦めた、臆病者たち。
自然と、怒りが湧き上がってくる。
「慧？」
ふと、グリペンの心配そうな声に、慧はハッと我に返る。
「ああ、すまん。ちょっとぼーっとしてた」
「疲れてるなら、休んだ方がいい」
「だな。でも、大丈夫だ」
グリペンを、じっと見る。
そうだ。自分は、こんな所でうじうじしていられない。
あんな奴らに、構っている暇なんてない。
ただ今は、目の前の課題を達成する事から始めよう。
慧は、そう心に決め、空を見上げた。

プロテクト・エヴリデイ

どこかの航空施設にて。
「・・・・おい」
「はっ」
「アタシらの機体は一体どうなってる?」
「整備の九割はすでに終了しております。あと三十分で終わるとのことです」
「はっ、そうかい」
エンジンが曝け出された自分自身を見つつ、ハリアーはダークブラウンの髪をなびかせる。
アニマに共通する可憐な容姿。ハリアーの場合は、長い髪にくわえて、秀麗さのある容姿である為、どこかSっ気を感じさせるような姿だ。
「ハリアー、こんな所で何をしているのですか?」
「ん?ああ、グレイか」
その後ろから、ショートカットのアメジスト色の髪を持った少女が話しかける。グレイゴーストだ。

「何って、自分の体の様子を見にな」
「そうですか・・・教祖様から連絡が来ました」
「お、なんだなんだ？」
　グレイゴーストの言葉にハリアーは嗜虐的な笑みを浮かべグレイゴーストの向きなおる。
「私達は引き続き基地の防衛。その間、別動隊は敵艦隊と石垣島を襲撃しミサイル発射を阻止、さらに出来る事なら那覇基地の滑走路を破壊、最悪ドーターをしばらく飛べなくしろとのお達しでした」
「はっ、中々に生温い事言ってくれるじゃねえか。どうせなら撃墜すればいいのに」
「最悪の場合、ですよ？つまりは、落とせなくても、という意味でしょう？」
「そんな事わぁってるよ」
「それともう一つ」
「んだよ鬱陶しい」
　グレイゴーストの言葉に、鬱陶し気にハリアーは耳を傾ける。
「赤の機体――ＪＡＳ―３９は確実に撃ち落とせ、との事です」
「はあ？あのファントムじゃなくてか？」
　戦術的には、あの緑のドーターさえ撃ち落とせば、こちらの勝利は確実な筈。おそら

くあの機体が向こうの作戦の主軸であり、基地を破壊する為のなくてはならない立場の存在のはずだからだ。

なのに、何故、ＪＡＳを狙う必要があるのか。

「なんでも、あの機体こそが、対ザイ戦の切り札になりえるだとか」

「あのド素人な動きをする機体がねえ・・・ま、教祖サマの言う事なら、従うしかねえな」

ハリアーはそう頷き、また自らの機体を見上げる。

その顔に、獰猛な笑みを浮かべながら――――

結果としては、慧とグリペンの勝ちだった。

訓練開始の前に、ファントムに遅延プログラムをいともたやすく見破られてはいたが

（これは慧の提案である）、模擬戦が始まり、ファントムが予想通りクラッキングを敢行。複数のダミーを展開し、攪乱しようとしていたが、ファントムが上から止めを刺そうとした瞬間、グリペンの機体が反転、そのままファントムと向き合う形になり、放たれた一番から四番までの空対空ミサイル（AAM）を全て吐き出してファントムを撃墜、見事、グリペン・慧ペアが勝利した。

グリペンは勝利に気持ちを抑えきれないのかはしゃぎだし、一方のファントムは信じられないという表情をしていた。

その最中で、慧は彼女に一つネタ晴らしをした。

単純な話、ファントムと戦っていたのはグリペンではなく慧である。

ファントムは、アニマ用のデータリンクをクラッキングする事でグリペンを攪乱。それによって処理落ちした所を撃ち落とす気だった。だが、あくまでファントムがクラッキングしたのはアニマ用のデータリンクであり、機体からの出力をそのまま受け取る通常のデータリンクは攪乱していなかった。

要は、途中からグリペンはスタンドアローンで、ただそこに座っていただけであり、後半の戦闘は全て慧が行っていたのである。

故に、アニマを相手にしていたと思っていたファントムは、見事に人間の機動に翻弄されて、見事に返り討ちにあったのだ。

ちなみに、遅延プログラムは全くの囮である。

「――――と、言う事だ」

その説明をした慧の目の前には、未だシミュレーションに乗るファントムの姿があった。

その表情は俯いていて分からない。

「・・・えーっと・・・ファントム、あのな・・・」

「ま、これに懲りたらこれからもチームとして仲良くやっていこうぜって事だ」

と、そこで恭平がファントムにそういう。

「・・・・」

が、未だファントムは俯いたままで、

「・・・おい、ファントム？」

「・・・・・う」

「う？」

次の瞬間、

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁん!!!」

「はぁ!?」

（（泣いたァ!?））

今までの所業からは考えられない、ファントムの号泣。
これには慧のみならず、恭平やグリペン、そして今回の訓練に手を貸してくれていた舟戸まで驚く。
「うわぁぁあああん!!きょうへいさんにみすてられたぁぁあ!!」
「は!?捨てる!?俺が!?」
「きょうへいさんはもうわたしなんていらないんだぁぁあああ・・・・!!!」
心の底が腹黒いファントムから信じられない状態。
まさかここまで泣き出すとは思わなかった。
「ま、待て待て待て!?ファントム待て!俺はお前を見捨てない!いらないなんて言ってないからな!?」
「だって、だってきょうへいさん、しつぼうしたって・・・」
「ああああれはお前を戦いに呼び出すための嘘!冗談!はったり!ブラフだ!」
「ぐりぺんにまけたらこんびかいさんともいって」
「それ言ってないよな!?絶対に言ってないよな!?」
「私が覚えてる限りでは、一尉ははっきりとは言っていない。はっきりとは」
「グリペンなんだその不安しかないフォローは!?でも助け船はありがとう!」
肩を掴んでぐらぐらと揺らし、とにかく弁明をする恭平。

「とにかく!俺のパートナーはお前以外にありえない!さっきは酷い事言ったが、それでもお前はこの作戦に必要不可欠なんだ!お前がいなくなるのは俺は嫌だ!」
「うえ・・うう・・・・それはほんとうですか・・・?」
「本当だ」
「ほんとうのほんとうですか?」
「本当の本当だ!このやり取り無限に繰り返してやってもいいぞ!」
「・・・・・」
　そこまで言って、泣くのが止まるファントム。
「・・・・分かりました」
　ようやくいつもの調子に戻り、目元を拭う。
「ただし、一つだけ条件があります」
「条件?」
　ファントムは、恭平ではなく、慧の方を見て。
「次の出撃の際は、慧さん、貴方がグリペンを操縦してください」

出撃は、明朝。
それまで、寝て英気を養いたい所だが、どうにも寝付けず、恭平は整備されているファントムを見上げていた。
その周囲では整備員が突貫で整備をしており、機体のダメージやらなんやら、出来る限り最善の状態で飛べるように手配してくれている。
「あら、恭平さん」
ふと、後ろから聞き慣れた声が聞こえて、振り返ってみれば、そこにはファントムがいた。
「よ、お前も起きてたのか」
「ええ。仮眠も十分とりましたし、明日の出撃には影響ありません」
「本当か？さっきまであんなに泣き腫らしてたのに」
「わ、忘れてください！」
頬を赤くして膨らませ、そっぽを向くファントム。
実に可愛い。
「悪い悪い」
「それはともかく、我々にはある課題があります」
「課題？」

「終末派の事です」
終末派・・・・その名を聞くと、反吐が出そうになる。
あんな、生きる事を諦めた連中は、望み通り叩きのめしてやりたい所だ。
世界を終わらせるために戦う、それは決して、恭平にとっては認められる事ではない。
「おそらく、次の出撃でも彼らは必ず出てくるでしょう。自分たちがどれほどやられようとも、彼らは決して進撃をやめない。自分たちの理想の為に、戦い続けるでしょう」
「分かってるよ。だからこそ俺が全部墜とす。空を取り戻すために、俺はどんな事でもやってやる」
「覚悟は十分なようですね。ですが、貴方一人の覚悟だけでは決して成し遂げられない事ですよ?今回の事は」
「ああ・・・」
ファントムが言っているのは、おそらく慧の事だろう。
慧は、一般人であり、子供だ。
さらに、裏表がなく隠し事が出来ない。真面目で愚直。愚者とさえいえるほど、真っ直ぐな性格だ。
当然、壁にぶつかる事があるだろう。それをどのようにして超えていくのか。
慧は一体、どのような決断をするのか。

「見物ですね」
「よく言うぜ。お前の泣き顔の方がよっぽど見物・・・」
「いつまでそのネタでいじるつもりですか!?」
「俺が忘れるまでだ・・・待て、悪かっただからその手にもってるレンチを仕舞え今すぐ!」
　どうにか頭の危機は回避された所で、ファントムは恭平の手を持つ。
「ん?」
「私は貴方の翼です。命令してくれるならどこまでも飛び、敵を撃ち落とします。ですので、今回も貴方の翼として共に戦いましょう」
「まあ、そういう約束だからな・・・」
「そうではありませんよ。もう、変な所で鈍いんですから」
　恭平の態度に呆れつつ、ファントムはいつもの意地の悪い笑みを浮かべる。
「ファントム(わたし)を乗りこなしてください。壊れるまで」
　それは、彼女が彼に告げる、最大級の信頼の証。人類救済を願う彼女の、自らを危機に落とす矛盾した言葉。
　だが、彼女はその言葉を撤回するつもりはない。
　何故なら、彼女は、彼の戦闘機なのだから。

「おう、後悔するなよファントム」
恭平がその手を握り返す。
「当然です」
ファントムがそう返した所で、ふと遠くで景気の良い声が聞こえた。
見てみれば、そこにはグリペンと慧、そしてその慧に抱き着いているイーグルがいた。
「おいおい」
「うふ、相変わらず、イーグルは子供ですね」
「俺からしたらお前ら全員子供だがな」
「私、これでも貴方より生きてるんですよ？」
「あーはいはいソウデスネー。ま、いいか」
恭平が歩き出して、どうにかイーグルの拘束から脱出した慧の後ろに立ち、その背中をバンッ！と叩く。
「うおあ!?」
「よーどうした慧！眠れないのかー？」
「きょ、恭平さん!?」
「随分と楽しそうですね。私も混ぜてくださいますでしょうか？」
「ファントムまで!?」

慧の顔が一気に青ざめる。
それもそうだろう。この中で一番のくわせものコンビであるファントム・恭平ペアが登場したのだから。
「慧、不調なら一緒にメンテナンスしよう。フナさんに頼めば見てもらえるはず」
「あはははは！おすもう！おすもうさーん！」
「元気が有り余ってるのであれば、シミュレータでもう一戦しましょうか？私もドーターのチェックが終わるまで手持ち無沙汰ですし」
「なんなら俺の操縦技術教えてやろうか？お前でも簡単テクニックを伝授してやらんでもない」
「だーもう！お前ら緊張感なさすぎだぁ!!」
その夜、ハンガー内に楽し気な声が響いた。
夜は明けていく。そして、戦いが始まる――――

「システムオールグリーン。機体に一切の異常無し・・・行けます」
「おっし、タワー」
　ファントムの機体チェックが終わり、全ての準備が整う。
　パイロットスーツに対Ｇスーツ。特異体質である恭平には無用の長物だが、これを着ていないとどうにも調子が出ないのだ。
「っとそうだ。忘れる所だった。ＢＡＲＢＩＥ０１、応答しろ」
『えーっと、こちらＢＡＲＢＩＥ０１、どうしました？』
　応答したのは慧。今回の作戦において、慧はグリペンの前部座席に座り、機体の操縦を行う事になっている。
　要は恭平たちと同じだ。
「大丈夫か？緊張はしてないな？」
『ええ、お陰様で』
　昨夜のあれが効いたのだろうか。慧の口調はそれほど強張ってはいない。
「よし、慧。出撃する前にこれだけ言っておくぞ」
『はい？』
「躊躇うのは最初の一発だけにしろ。それまでは俺たちが全力でカバーする。いいな」

それだけを言い残して、恭平は通信を切る。
「躊躇うのは最初の一発だけですか・・・さて、慧さんはどのような決断をしてくれるんでしょうね？」
「さあな・・・でも、これだけは言える。慧は必ず結果を出す」
それが一体なんなのかは、流石の恭平にも分からないが。
『ＢＡＲＢＩＥ０３、クリアード・フォー・テイクオフ』
「ラジャー、ＢＡＥＢＩＥ０３、クリアード・フォー・テイクオフ』
エンジンが咆え、機体が加速する。操縦桿を起こせば、機体は盛り上がり、空を飛ぶ。
「さあ、始めようか・・・!!」
恭平は、そう、誰に言うでもなく呟いた。

今、那覇を守るための戦いが始まる。